

人魚の夏

ふーてんもどき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私はクールビズに真っ向から唾を吐くものである。

目次

| | |
|---------|-----|
| 一章 | 1 |
| 二章 | 17 |
| 三章 前編 | 43 |
| 三章 中編 | 59 |
| 三章 中編・二 | 85 |
| 三章 後編 | 104 |
| エピソード | 127 |

一章

私はクールビズに真っ向から唾を吐く者である。

我が家のクーラーには朝から晩まで過労を強いており、冷凍庫は常に豊富な種類のアイスクリームで満たしている。極寒と呼ぶに相応しいほど冷房の効いた部屋で毛布に身を包み、棒アイスを食べることは至上の贅沢だ。

寒いなら冷房なんか点けるな、とおっしやられる自然主義の方々に、是非ともこの妙味を一度味わっていただきたい。クーラーを奴隷のごとく酷使しつつも、寒いので毛布を被るといふこの無駄こそが贅沢の極致であると私は考えるものだ。

古今東西の隔てなく、上流階級の間人は無駄の限りを尽くして贅沢を楽しんできたではないか。食べきれないほどの豪勢な酒宴しかり、何のためにあるのか分からぬ天蓋付きの巨大なベッドしかり。一般人でありながらこれらに準ずる贅を貪れる現代に産まれたことを感謝するばかりだ。

故に私は、文明の利器によって夏の酷暑を嘲笑う。それこそが現代人としての使命であると信ずるところである。

「分かるか、弟よ」

「出ていけ引きこもり」

血を分けた唯一無二の兄弟に同意を求めたが、にべもなく拒絶された。そればかりか兄である私を引きこもり呼ばわりとは、なんということだろう。私は人よりもほんの少し単位を落としがちなだけで、気の向く講義があればちゃんと大学に顔を出しているというのに。

弟は中学生になって以来、年長者を敬うという美德を忘れてしまったようだ。実に嘆かわしい。

「お前な、ここは俺の家だよ。どこに出てけと言っんだ」

「僕の部屋から出てけっつんだ」

「そんな冷たいことを。冷たいのはクーラーとアイスクリームで間に合うのに」

弟の部屋の真ん中で敢然と居座っていた私は、怒り狂った弟によつ

て床から引き剥がされてすごい力で追い出された。廊下へ放り出す間際、尻に蹴りまで入れてくる始末だ。補助輪付きの自転車で「兄ちゃん！」と必死に私のあとを追いかけてきた弟はどこへ行つてしまったというのか。

まあ彼の気持ちも分からないでもない。

人生初の受験期を迎えた中学三年生の夏休み。勉強する傍らで誰かが寛いでいては、さぞかし鬱憤が溜まることだろう。それくらいは分かっている。

分かった上で兄弟の絆を信じ、彼の人情に訴えたわけだが、残念ながら兄の気持ちは伝わらなかったようだ。以心伝心とは難しいものである。

ここで私は途方に暮れた。家のなかで涼める場所を全て失つてしまったからだ。

我が家には四台のクーラーがある。居間、私の自室、弟の自室、両親の寝室にそれぞれ一つずつの配置となっている。

この内、居間と私の部屋のクーラーが同時に故障するという空前の大事件が起こったのは昨晚のことであった。ここに私のサンクチュアリは潰え、弟にも見限られ、華々しい大学生の夏休みに汚点を残すこととなった次第である。ちなみに親の寝室にあるクーラーは型が古いので私の肌合わない。

「この世は無情だ。神も仏もないじゃないか」

私は居間に備え付けてある神棚へ文句を吐き捨てる。お供えしてある水なんか沸騰して熱々のお湯になればいいのだ。

しかしいくら神に不平不満をぶつけたところで、茹だるような暑さは変わらない。私は涼を求めに外出する所存のほぞを固めねばならなかった。

家の近辺でゆっくり涼めるところとなると、かなり限られてしまう。大抵、市立図書館か喫茶店の二択である。昔は喜んで川なんかで遊んでいた私も、このように立派なインドアに成長した。

無論、万年厳しい懐事情に則しているのは図書館であるが、そこへ行くには自転車を十五分も走らせなければならぬ。それに比べて

最寄の喫茶店『マーメイド』は徒歩五分で着く。

玄関を出てマンションの一階に降り、駐輪場に停めてある愛車の黒いサドルに触れてみる。太陽の恵みをこれでもかと吸収した合成樹脂は凶器的な熱を帯びていた。

なにが愛車か。

私は喫茶店へ行くことにした。

○

『マーメイド』は老夫婦が二人で経営している小ぢんまりとした昔ながらの純喫茶である。軒先に雑然と並んでいる観葉植物が目印だ。

やれハニートーストだの、やれタピオカミルクティーだのと奇抜な洒落っ気に走りがちなカフェが乱立する昨今、素朴な味わいのナポリタンを十数年変わらずオススメとして提供し続けるこの店には好感を抱かざるを得ない。

私は足繁く通っているわけではないが、それは常に金欠だからであり、決して『マーメイド』を軽んじてはいはない。むしろ懐が潤えば進んでコーヒーマーメイドの一杯でも飲みに行く。ここのコーヒーマーメイドはやたらと苦くて旨い。

もう一つ、私が『マーメイド』を気に入っている理由として、知り合いに会わないことが挙げられる。

私と同年代の学生たちはこぞって前述した流行りものの店に行く。そして写真映えする料理を携帯電話のカメラで撮ってはオンラインに晒すのである。

私は清貧を重んじるよく出来た人間なので、こうした自己顕示欲の塊じみた行為を蛇蝎のごとく忌み嫌う。その光景を見れば嫌気がさすし、キヤツキヤウフフとした声を聴くだけでも腸から怒りが込み上げてくる。

それが大学のキャンパスを同じくする同輩であれば尚更だ。友人や恋人と一緒にいる時に、偶然にも隣の席に座っている私を見かけた彼らはヒソヒソと陰口を叩くのだ。「あいつ一人で来ている

ぞ」とか、「友達いないのかしら」とか。そうして静謐を愛する私のような好青年が、あたかも一人ぼっちの寂しい人間だと吹聴されるのである。きつとそうなるに違いない。たぶん。おそらくは。

そういった煩わしさを感じなくて済む『マーメイド』は重宝するものだ。あの店はあらゆる面で私に優しい。

住宅街を抜けて幅の広い県道を横断する。アスファルトから照り返す熱が厳しく、私の白い肌をチリチリと焼く。家を出て三分で私の全身は汗ばんできた。じつくりと干物にされてゆく鱈の気分である。

艱難辛苦を乗り越えて、私はどうにか商店街の入り口に着いた。ここから向かってすぐ左に折れて裏通りへ進めば、喫茶『マーメイド』がある。

裏路地では建物の壁に張り付いている室外機がファンをやたらと回して熱風を吐き出している。むわつと暑い空気に当てられて、急激に私の腹の底から憎しみが沸き上がってきた。

あれらの室外機は当然、建物の中の空調に繋がっていて、部屋の気温と湿度を適切に保っているはずだ。屋内にいる人間たちはその恩恵を一身に受けて恍惚としているに違いない。

考えるだけで吐き気を催す光景だ。自分達だけが涼むためにこれだけの熱を排出して、奴らは平然としているのである。許しがたい。地球に申し訳ないとは思わないのか。こんなに苦労している私に申し訳ないとは思わないのか。人類は皆平等に夏の苦しみを共有するべきではないのか。あれもこれも全部ぶっ壊れてしまえば平和に近づく気がするし、これを大学の卒業論文のテーマに据えよう。

私は幽鬼のようにフラフラと歩きながらも、足元の鉢植えを蹴飛ばさないよう注意し、営業中と書かれた看板がぶら下がっている『マーメイド』の扉を開けた。

「いらっしゃいませー」

ドアの鈴が鳴り、年配の奥さんの声と、店の中に蓄えられた冷気が私を迎えた。

私は先刻までの己を恥じた。

いったい何をトチ狂っていたのだろう。クーラーはこんなにも素

晴らしい発明ではないか。全くもって今こそが平和であるに違いない。

圧倒的な自己矛盾を抱えた私はそれを良しとしつつ、カウンター席の一つに腰かけた。お冷やおしぼりを持ってきた奥さんにコーヒーを注文する。

店内には他にも何人が客がいた。

テーブル席は四つのうち三つが埋まっていて、カウンター席には私の他に一番奥の方で初老ほどの男性が座っている。男性はくたびれたベレー帽を深く被り、コーヒーを啜りつつ競馬新聞を熟読していた。身なりが全体的に薄汚く、私は彼の私生活を案じた。

近くのテーブル席に座っているのもカップルや家族連れではなく、これまた中年のおじさんで、彼の手元をこっそり見ると内田百聞の全集を読んでいるらしかった。

『マーメイド』にはこうした客が珍しくない。この水煙草でもふかしたら似合いそうな雰囲気を実に私好みである。水煙草はやったことがないけれど。

胸ポケットから取り出した煙草に火をつけて、煙を口のなかで弄びながら久しぶりの『マーメイド』をゆっくり見回す。狭い店内にも関わらず出入口の近くにピアノが置いてある。あれは奥さんと旦那さんのどちらの趣味なのだろうか。

この店のマスターである旦那さんは口元に見事な髭をたくわえた老紳士で、コーヒー豆を挽いたり、その粉をサイフォンで蒸らしている姿はとても絵になる。

そうやって作業をしている旦那さんの後ろの壁には、いくつかのメニューが書かれた札が掛かっている。上から順に眺めていくと定番のナポリタンやオムライスなどのメニューが並び、その最後に『ヴェスヴィオの噴火』という文字が異彩を放っている。

ヴェスヴィオとはイタリアのナポリ湾岸にある火山の名前だ。海原を見渡す位置にあるこの大いなる山は、かつてローマ帝国の時代に大噴火を起こし、ポンペイという麓の街を壊滅させたことで有名である。

その山の名を冠するメニューの実態こそは超巨大なナポリタンとなる。要は大食いチャレンジだ。一食二千円で、三十分のうちに完食できれば無料となる。

私がまだ食欲の権化だった高校生の時分、これに挑み完膚なきまでに叩きのめされた。

この店特有の噛みごたえのある太い麺はすぐに胃を満たし、しかも腹のなかでさらに膨れてくる。ケチャップソースで赤く染まったこれが食べても食べても一向に無くならず、さながら止めどなく湧き出る溶岩と闘っているような気分させられる。そして我々の胃袋はポンペイの轍をなぞるがごとく壊滅させられるのである。

かつてのトラウマから目を反らし、煙草を吸い終わったので持ってきた文庫本を読みつつコーヒーが出来上がるのを待つ。

すると、ドアベルが鳴って新しい客が入ってきた。

不意にそちらを横目で見て、私は驚きのあまりその人を二度見した。

白いワンピースの女性だった。

背はすらりと高く、踵の高い靴がさらに彼女のスタイルを良く見せている。夏も盛りだというのに肌はまったく日焼けしておらず、透明感を感じるほどに白い。それと対照的に黒い長髪は漆を塗ったように豊かな艶がある。

しかし私が驚愕を顕にしたのは、決してその人が美人だったからではない。

彼女は私と同じ大学に通う学生だったのだ。

○

鮎川さんは私と学舎を同じくする心理学部の三回生で、これまた私と同じボランティアサークルに所属している。

同じだった、と言うべきか。

まだ私がキャンパスライフに夢を見るホヤホヤの新生生だった頃、勧誘されるがままにこのサークルに入った。表向きは貢献意欲に満

ちた好青年のつもりであつたが、女子の一人とも仲良くなれなかつたことを鑑みるに、私の欲望は外部に筒抜けだったのかもしれない。

私が鮎川さんを見たのは新歓パーティーでのことだった。

酔漢と化した先輩の猛威から逃げて隅の方で麦茶を飲んでいたところ、同じく孤立している鮎川さんと目が合った。お互いに無言で会釈しあい、それから一つも言葉は交わさなかつたあの日のことを、今も鮮明に覚えている。私は物静かな紳士を装いつつ、あんな美人がいるなら入部した意味もあるなあ、と内心で歓喜していた。

しかしながら私は、恋も青春も何一つ成就しないまま退部した。

女と見るやのべつまくなし口説こうとする軟派を嫌う私は、己がそうならないよう自戒する。そうして徹底的に受け身の姿勢をとつていたのだが、どうにもそれが裏目に出たらしい。

入部早々、私は周囲から浮き始めて、一ヶ月経つてもなかなか名前すら覚えてもらえず、半年が経つ頃にはサークルに大変居辛くなつていた。二回生になってから暫くしてだんだんと顔を出さなくなり、三回生にしてもはや修正不可能と見て、泣く泣く退部届けを出した次第だ。無論、誰も惜しみはしなかつた。

私が辞めるまでの二年と数カ月の間、鮎川さんも仲間内からは浮いていたわけだが、彼女のそれは私とは気色が違つているようであつた。

鮎川さんの何事にも驚かぬ巖のように冷静沈着な振る舞いは、孤高の趣すらあるものだ。サークル内のお調子者が公然で堂々と告白し「いいえ」の一言でばつさり切り捨てられていたのは実に痛快無比であつた。

そんな鮎川さんの姿勢は少しも変わることがなかつた。私も彼女とはほとんど話す機会がなく、退部してからはいよいよ直接的な関わりを持たない。

ただ一つ、私には鮎川さんに対して後ろめたいことがある。どうしてだか、彼女とはよく目が合うのだ。

例えば講義中、しみつたれた教授の講義を聞き流して何となく辺りを見てみると、鮎川さんの視線とかち合う。廊下ですれ違ふ際も視線

が交わることは多々あった。終いには踏み切りで電車の通過を待っている折、その電車に乗っている鮎川さんと目が合う始末だ。もちろんサークルに所属していた時など甚だしいことこの上なかった。

私は最初、これを恋の予兆と感じ、鮎川さんが私に思いを寄せて常に視線を送っているのだ、と妄想に耽っていた時期があった。そうして受け身一辺倒の自戒を破り、彼女に何やら話しかけた記憶がある。

しかし冷静になってみれば、私の方が無意識に彼女を見つめているのだとも考えられる。容姿の差を考慮に入れたならば、誠に遺憾ではあるが後者の説が有力となる。

そうなると、第三者から見れば私はあたかもストーカーではないか。

ひよつとすると鮎川さんは日々私の視線に怯えているのかもしれない。彼女に交遊関係がないからまだ良いものの、もしも誰かに相談されればたちどころに噂が立ち上り、私の悪評が燎原の火のごとく広まることは想像に難くない。やがて私は正義を振りかざす有象無象に弾圧され、ボランティアサークルでの羞恥も余すことなく掘り起こされた挙げ句、退学を余儀なくされるのだ。変態のレッテルを貼られながら。

その恐ろしい顛末を考えるたびに、私の背筋に冷たいものが走る。つまり私は私で、鮎川さんに怯えているのである。

近頃は彼女と目を合わさぬよう試行錯誤を繰り返しては失敗する日々を過ごしている。何故失敗するのか。天に偶然を司る神がおおすのであれば、一度そのご尊顔を仰ぎとつちめてやりたい。

どちらも被害者なはずなのに、男女の違いでこうも状況が変わるのはどうしたことだろう。私は世間に断固として男女平等を訴える。

以上のような経緯があり、私は鮎川さんを苦手としている。彼女の得体の知れないところが尚更不安を掻き立てる。彼女がその謎に包まれた雰囲気の通り、この町の権力者や、危ない仕事を生業にしている組織の令嬢だった場合、私はどうなってしまうのだろう。ドラム缶の中でコンクリートと仲良く心中し、海底の風景の一部と化す様子をよぎる。

だからこそ私は鮎川さんと極力関わらないように仙人のごとく身を潜めて過ごしてきた。

しかし偶然を司る神様とは、ほとほと折り合いが悪いようである。

○

『マーメイド』にやって来た鮎川さんは、ちらりと私を見た。例によつて目が合い、私は慌てて顔を下に向ける。

鮎川さんは何も言わず、奥さんに促されるまま私から一つ空けた隣の席に座った。盗み見るように横目で伺えば、ツンと澄ましたような彼女の横顔がある。他人の空似ではない。間違いなく鮎川さんだ。

私はひどい混乱に陥った。

一体なぜ、彼女のような人がこんな所にいるのだろうか。住まいがこの近くにあるのか。どこかの令嬢ではなかったのか。いやそれは私の妄想か。でも本当に彼女に迷惑をかけていたらどうしよう。

考えが纏まらず、涼しい店内にいるのに脂汗が滲んでくる。

鮎川さんのような乙女と、分煙もされていない鄙びた喫茶店はどこまでもミスマツチである。まるで沼に住む鴨の群れに、一羽の白鳥が紛れ込んでいるような不自然さだ。

動揺を隠すためにコーヒーを啜る私の横で、鮎川さんはメニューをしげしげと眺めている。手元のメニュー表を一通り見終えたのか、今度は壁に掛けられたホワイトボードに視線を移す。

「あの、ヴェスヴィオの噴火ってなんですか」

鮎川さんが奥さんからお冷やを受け取りつつ質問をする。ナポリタンの大食いチャレンジだということを教えられた彼女は少しの間考えてから言った。

「じゃあそれください」

一瞬にして、店内に緊張が走った。

奥さんが言葉を失い、それぞれの趣味に没頭していたおじさん達も鮎川さんに視線を集中させる。かくいう私も、もはや体裁など気にしている余裕はなく絶句して彼女を見つめた。

すごい量になることを奥さんは脅かすように説明するが、鮎川さんの意思は変わらなかった。

しばらくして彼女の前に山と見紛うほどの麺の塊が置かれた。ケチャップで真っ赤になったそれは溶岩を流すヴェスヴィオ山の威容を存分に放っている。私は過去のことを思い出し、このナポリタンを見ているだけで腹が一杯になった。

鮎川さんはそれを前にして、眉一つ動かさずフォークを手に取った。実に手慣れた様子でフォークに麺を巻き付けて口に運ぶ。

それはなんとも不思議な光景であった。

背筋はピンと伸びていて、麺を巻く際に食器の音を立てることはない。口元は汚れず、全く啜らないために白いワンピースに着くことさえない。彼女は実に洗練された動きで、しかし麺の山をみるみる内に小さくしていく。優雅な姿勢のまま圧巻のペースで食すので、まるで魔術によって麺を消し去っているようにすら見えた。

半分の量になっても鮎川さんのペースは衰えを見せず、ついには完食してしまった。僅か二十分の出来事であった。

カウンター席の奥にいたおじさんを皮切りに拍手の音が店内に響く。店のご夫婦も、怪しいおじさん達も、ついでに私も。皆が鮎川さんを「ブラボー」と口々に讃えた。

すると鮎川さんは少し頬を赤くしながら、拍手喝采をあげる私たちにペコリと慎ましいお辞儀をした。そんな彼女の姿を見るのは初めてのことである。

「あの、デザートにアイスクリームを」

鮎川さんが小さく挙手をして言った。

○

サンデーグラスに乗ったアイスクリームが実に涼しげに見える。食べている人が鮎川さんだから、余計にそう思うのかもしれない。彼女はさつきまでのナポリタンと違い、ゆつくりと氷菓子の冷たさを味わっていた。

彼女の食べっぷりを気に入ったのか、旦那さんがサービスだと言ってコーヒーを出す。滅多に出さない高級な豆を使ったとか、なんか。

鮎川さんはそれをおずおずと受け取り、ほんの少し啜ってからアイスの横に置いた。苦いものはあまり好きではないのだろうか。

すっかりぬるくなったコーヒーを飲みつつ私が盗み見ていると、彼女は不意に私の方を向いた。

「な、なんでしよう」

何を敬語になっっているのだ、私は。

ここで視線まで逸らしては男が廃ると思い、鉄の意思で彼女の目を見ると、鮎川さんが私の持つコーヒーを眺めていることに気付いた。

「コーヒー、好きなの？」

「うん、まあ」

私の曖昧な返事に「ふうん」と言い、自分のコーヒーを飲む鮎川さん。一口飲むたびにアイスクリームを三口は食べている。

「最近いいよね、サークル」

再び口を利いた鮎川さんに、私はコーヒーでむせそうになった。

まさか私が辞めたことを知らないのだろうか。いや、誰にも気にかげられることのない私に限っては仕方がないかもしれない。

しかしそうなる、彼女は私と目が合うことさえ気にしていないのだろうか。今までのことは私の一人相撲だったのか。ならばまだ彼女の中に威厳ある私の像を築くことも可能なのではないか。

私は錯乱した思考を脳内の奥に押し込めて、ひとまず鮎川さんの問いに答えた。

「辞めたんだよ、夏休みの前に」

「なんで？」

「いやそれは」

ずいぶんと繊細なところをズバズバと聞いてくる人だ。さつきから鮎川さんの印象が二転三転して私を混乱させる。

「鮎川さんはちゃんと行ってるの」

ずっと孤高の風だった鮎川さんを思いながら聞き返すと、彼女は無

表情のまま「うん」と言う。

「昨日は川のゴミ拾いだった」

「川って、隣の?」

「ううん。山の方にあるバーベキュー場の。今度の打ち上げで、使用料金が割引になるんだって」

「なんて現金な」

ほとんどアルバイトじみた活動内容に、私は呆れた。ボランティアとはなんぞや。しかし鮎川さんはその仕事に満足しているらしい。

「でも、川が綺麗になるのは良いこと」

私は、いつの間にか鮎川さんと普通に話している状況に気付いた。喫茶店のカウンターに並んで、彼女とこんな風に何気なく会話する日が来るなどと思ってもみなかった。

そもそも鮎川さんはこんなな話す人だったのかと驚かされる。それは彼女の胃の巨大さよりも意外なことで、胸の中にむずむずとした熱のようなものが込み上げてくるのを感じた。

「鮎川さんはこの近くに住んでいるのか」

勢い余って、個人情報聞いてしまった。なんて節操のない。もっとうとう、丁寧かつ慎重に事を進めるべきだというのに。そう考えて、『事』とはなんだろう、と自分で分からなくなる。

鮎川さんは特に気にした様子はなく「いいえ」と簡潔に答えた。しかしそれ以上のことは言わなかった。

「森崎くんは、よくここへ来るの」

「たまにね。今日は暑いから涼みに来たんだ。うちのクーラーが壊れちゃったからさ」

「そう」

鮎川さんは素っ気なく言って、残ったコーヒーを一気に飲み干した。そしておもむろに立ち上がるとレジ前へ歩いて行き、アイスクリーム分の清算を済ませる。腹にあの大量のスパゲティが収まっているのか疑わしいほど自然な振る舞いだった。

少しは話せることを嬉しく思っていたのだが、やはり鮎川さんという女性は謎のままであった。ひよっとしたら何か気に障ったのだら

うか。しかしそれを直裁に尋ねるのは、私の主義に反することだ。もう行ってしまうのを残念に思いながらも、私はまだ寛いでいくために再び本を広げようとした。

しかし、立ち去るかと思われた鮎川さんは、扉の前に立ったまま私の方を見つめていた。まるで私も一緒に来るのを待っているようである。そう思ったのは、流石の私であっても間違いではないだろう。

開きかけた本をしまい、私も会計を済ませると、鮎川さんは一つ頷いて扉を押し開けた。外の熱い空気が流れ込んでくる。私は彼女の後に続いて店の外へ出た。

去り際、奥さんの「ありがとうございます」という声を聞き、私は何だかむず痒い気持ちを感じた。

○

私は鮎川さんの後を追うようにして商店街を歩いた。アーケードの日陰を持った商店街は、太陽の下を直に歩くよりはだいぶ楽である。しかしそれでも暑いものは暑いので、普段より客足は疎らなようだった。

少し前を歩く鮎川さんは時折、雑貨屋や服屋の前で立ち止まり、店頭に並んでいる品物を眺めている。彼女もウインドウショッピングなんてするのだと意外に思ったが、その頭の中で何を考えているのかはやはり分からないままである。

豚の貯金箱やエキゾチックな竹編みのくずかご、輪っかの形をしたヘンテコな扇風機、私の嫌うクールビズを主張する紳士服などを鮎川さんはしげしげと観察する。古本屋では乱雑に積まれたセール品の山から黄ばんだ一冊を引き抜き、ぺらぺらと捲る。彼女はそれを購入して鞆に入れた。

他にも薬局で冷えピタの製品情報を見比べたり、誘われるままに水素水の試飲を試してみたりと忙しい。販売員のお兄さんは水素水の効能を熱心に説明していたが、鮎川さんの鉄壁の会話術を前にして早々に諦めたようで、私は彼に憐憫の情を抱かずにはいらなかった。

鮎川さんはなかなか好奇心が旺盛で、その行動を予測することはもはや不可能に近い。私はそんな知られざる彼女の一面を好ましく思う反面、己の存在意義を早くも見失いつつあった。

「いったい私が付いていく意味はなんだろう。ひよつとしたら鮎川さんが「一緒に来い」という素振りをしたように見えたのは私の勘違いだったのか。いや、彼女は確かに私へ領いたりしていたが。」

「そう思い始めたところで、鮎川さんは唐突に話しかけてきた。」

「暑いのは嫌い？」

ある雑貨屋の前で足を止めた彼女の隣に立つ形になり、私は暫く返事に迷ってから、嫌いな方だということ伝えた。

「私も、少し苦手」

鮎川さんはそう言うてから店の中へ入り、棚を物色し始める。色とりどりの風鈴が掛かっている棚だった。彼女が優しく触れる度に、丸い硝子細工がチリンチリンと軽い音を立てた。

日本人の遺伝子が風鈴の音を涼しく感じさせるのだと云う。そんな何処かで聞きかじった曖昧な知識を、私は思い出した。つまり鮎川さんの鳴らす風鈴の音色に、図らずも私が涼しさを覚えたのは、私が純然たる日本人である証かもしれない。それに、同じような形をしているのに音色が微妙に違うのも面白く感じ、私にもそのような感性が備わっていたのだと感慨深くなる。

そうして一緒になってこの可愛い硝子玉の群れを見ると、しばらく風鈴の具合を確かめていた鮎川さんは、たくさんある中から一つを選んで購入した。

会計から戻ってきた鮎川さんは私の方へ来ると、今しがた買った物を私に差し出した。

「あげる」

「えっ」

断る暇もなく、風鈴の入っているレジ袋を私に押し付けるようにして渡してくる。それを落とさないように受け取り、私は呆気にとられるままビニールの袋から風鈴が梱包された箱を取り出してみた。

箱を開けて中身を確かめると、それは川魚が泳いでいる絵の描かれ

た風鈴であった。女の子が選んだにしては随分と渋いなあ、と思う。しかし相手が鮎川さんなので不思議と納得できるものでもあった。

しかしこれを本当に貰っていいものなのか。それ以前になぜ私に風鈴を買ったのか。

不可解な行動のわけを聞こうと、風鈴を一旦箱に戻して顔を上げたが、そこに鮎川さんの姿はなかった。

「鮎川さん？」

忽然と姿を消してしまった鮎川さんを探して雑貨屋の中を見て回るが、私以外の客の気配はない。店から出てアーケード街を右往左往してみたが、それでも白いワンピースを着た彼女は見つからなかった。

まるで空気に溶けてしまったかのように、なんの前触れもなく、鮎川さんはいなくなっていた。

私は前衛アートの彫刻が据えられた商店街の中心で立ち尽くした。帰ってしまったのだろうか。こんなにも唐突に。

狐につままれるか、ひつ叩かれでもした気分である。別れが突然すぎて喫茶店を出てからの記憶さえ疑わしく思えてくる。

これまでのことは白昼夢だったのだろうか。夏の暑い空気に錯乱して見た、泡沫の夢だったのか。

しかし私の手には確かに、彼女が「あげる」と言って渡してきた風鈴がある。

私は己の頬をつねる代わりに、もう一度風鈴を取り出してその音を聞いた。川魚の風鈴は、その渋い柄にしては妙に可愛らしい音を奏でる。色々鮎川さんに聞きたいことはあるが、連絡先さえ知らない彼女の動向を追うことなど出来るはずもない。

そうやって突っ立っている内に汗をじんわりとかいてきて、私はもともと避暑のために出掛けたのだと思い出し、今度は図書館へ向かうことにした。

何だか自転車を走らせてもいいような気分だった。

愛しのクーラーの調子を診てくれる業者は、明日の昼に来るとのことであった。それで今晚だけは熱帯夜に耐えなければならぬ。

弟は、また私が自室に入ってくるのを恐れていたのだろう。いつまで経つても私が乱入して来ないことを怪訝に思った彼はあちらから私の部屋にやって来た。

「兄ちゃん、自分の部屋で寝るの？」

「クーラーがこれだからなあ」

「別に、寝るだけなら僕の部屋に布団持って来てもいいよ」

どうも弟は、昼に「引きこもり」とか言ったことを気にしているらしかった。彼はまだ青いけれど、そうやって反省できる点は立派なものである。

しかし私はやんわりと断りを入れた。

窓のレース掛けには川魚の絵が掛かれた風鈴が提げている。網戸を残して開け放たれた窓からは生ぬるい風がそよいできて、それが風鈴を軽やかに鳴らした。

「どうしたのそれ」

弟が心底意外なものを見る目をして聞いてきたので、私は少し考えてから言った。

「クールビズというやつだ」

○

おしまい

二章

川原を歩く夢を見ている。

なぜ夢と分かるのかと言うと、大学生にもなった私が川原なんぞに出向くわけがないからだ。虫に刺されるし、足は疲れるし、良いことなど一つもない。

しかし今の私の足は、いくら歩いても疲弊しないのだ。虫も、一匹も見かけない。

両側は森に囲まれ、さわさわと揺れる緑葉の隙間からは木漏れ日が射している。その光が澄んだ小川の水面に反射し、微かにきらめく。目には見えないが、何処からともなく蝉の鳴き声が穏やかに響いていた。

やがて、川へ競り出すように大きな白い岩がでんと聳えているのが見えてきた。私はその岩に登らなければいけない。

何の躊躇いもなく素足を水に着ける。背筋を凍らせるような冷たさは感じない。私の足は一切の感覚がなくなつたようだ。なのに気分はふわふわと軽やかで、風船のように宙へ浮かんで行きそうな気持ちさえした。

岩の頂上に苦もなく登つた私は、しかし、そこからの景色を見ることはなかった。足を滑らせたのだ。

私は頭から真つ逆さまに落ちて、水飛沫を上げて川に潜る。くぐもつた水音。この川に底と云うものは無く、下にはただただ深い深淵が広がっている。まるで得体の知れない怪物が、大口を開けて待ち受けているようだった。

「助けてー」

幼い男の子の声が響いた。それは私の口から出たものである。

水のなかにいるのに「助けて」という言葉だけが明朗に響く。しかしそれが父にも母にも弟にも、誰にも聞こえないことを、私は知っているのだ。

どれだけでもがいても私の体は鉛で出来ているように沈んでいく。冷たい水が肺を満たす感覚がする。それは死の触感だった。

もう水面からの光も届かなくなった時、私に近付いてくるものがあつた。彼女は朦朧とする私を優しく抱き締めると、魚のように見事な速さで上へと泳いでいく。

私は彼女の顔を見ようとした。ぼやけた視界のせいで輪郭すら曖昧だが、彼女が穏やかに笑つたような気がした。

そして何事かを私に言う。

「ブーブーブー」

まさかのバイブ音である。どういうことか。

疑問を抱いた瞬間、私の夢はシャボン玉を割るように呆気なく覚めてしまった。

彼女の顔も、分からぬままだった。

○

私が目を覚ますと、そこは慣れ親しんだ自室であつた。間違つても河原ではない。

横を向けば、開きつばなしの本がある。幼いときに買ってもらつた妖怪大全という凶鑑で、人魚の頁が目につく。他にも、万年床と化している煎餅布団を中心として、フローリングの床には文庫本や参考書や猥褻本などが散らばっており実に居心地がいい。

ヴヴヴと音がする。

窓からは昼下がりの陽光が差している。しかし室内は実に涼しい。先日壊れたクーラーは無事に修理されて、順調に冷気を送ってくれているのだ。

ヴヴヴと音がする。

クーラーの風に煽られて、窓枠の風鈴がチリンチリンと爽やかな音色を奏でる。あれは最高の睡眠導入剤だ。

ヴヴヴと音がする。

鮎川さんから貰つた川魚の風鈴。その音を聴きながら寝たから、あんな夢を久しぶりに見たのだろうか。

ヴヴヴと音がする。

私は怒りに飛び起きた。枕元で携帯電話が震えている。

こんな昼間から電話をかけてくるとはどんな不埒者だろう。きつとセールスや詐欺の電話に違いない。私の電話帳の乏しさを鑑みれば、自ずとかかってくる電話の内容は予想できる。実に嘆かわしいことである。

着信拒否をしてさっさと寝直そうと思い携帯を手にとってみると、液晶画面に表示されていたのは数字の羅列ではなく、私の知る人間の名前だった。つまり、数少ない電話帳に登録してある人物である。

しかし決して嬉しくはない。何故なら私の知り合いなど、ろくなのがいないからだ。どちらにせよ吉報にはならないことに虚しさを感じる。

それも、今回かけてきた野田という人物は、特に厄介な相手だった。

○

野田先輩は私よりもずっと歳上で、私の知る誰よりも得体が知れない。

私が一回生だった頃の夏、まだ大学デビューには間に合うと思いつみ無駄な努力を積み重ねていたある日、目の前に彼が現れた。

『馬鹿』と大きく書かれたTシャツを堂々着こなす彼は、野田と名乗った。後で聞いた話によると、喧嘩別れした彼女が置き土産として残していった物らしい。野田先輩は「あつらえ向きである」とやけに好んで、夏の間中その馬鹿Tシャツを愛用している。私としてはあの人に彼女がいたことの方が驚きだった。

「君は現状に悩んでいるな。自分の思い描いていた大学生活とかけ離れていくことに対して焦っている」

開口一番、彼は私の心情をピタリと当てた。私がこのストーリーカーめいたことを言う男に恐怖と困惑を持つと、それを表情から読み取ったのか、男は朗らかな顔でうんうんと頷いた。朗らかな、というところが尚さら胡散臭い。

「案ずるな。少年よ大志を抱け、だ。いや青年だったかな。どちらでもない。大志の前では悩みなどあつてないようなものじゃないか。

君は己の内から湧き出る欲望のままに人生を謳歌すればよろしい」

「え、ああ、はい」

彼が何を言っているのか半分も理解できなかったが、その圧倒的な熱量により、私は諸々の疑問を放棄して頷くしかなかった。

男は満足そうにニンマリと笑う。

「よしよし。少しはためになったかな」

「まあ、はい」

「よしよし。では百円」

「えっ」

それが野田先輩との出会いだった。結局は金をむしりとられた記憶しかない。私が流されるままに払った百円で彼はパピコというアイスを買い、私と分けあった。しかも足りない分は自分の懐から出している。もう訳が分からない。

野田先輩について詳しく述べると話は紆余曲折し、やがては単行本を出版し続編まで書くことになるため、ここでは簡潔に説明することとする。

男性。年齢不明。所属サークル不明。専攻科目不明。そもそもちゃんと単位を取っているのか不明。

やや簡素過ぎたであろうか。無論、上記の内容は、野田先輩という深淵の表面に漂う上澄みの一部でしかない。

確かなのは彼の素性がほとんど不明であるということだ。二年ほど留年していて、三年休学していることは彼自身が明かしている。酒の席のことだったので定かではないが、本当だった場合、留年した年数と休学期間だけで五年経っていることになる。恐ろしいことだ。どうやって学校や親を説得しているのだろう。

三日三晩麻雀に没頭しては荒稼ぎをし、見知らぬ人の宴席に乗り込んで一芸を披露し酒を鯨飲して拍手喝采を浴び、そして猫のようにしこたま昼寝をする。これで大学生だというのだから驚きである。少なくとも私は、彼が学問に取り組んでいる姿を見たことがない。

それでいて憎めないのが野田先輩の特異な点だった。彼はロバのように面長でやや間の抜けた顔をしていて、いつもニコニコと愛嬌の

ある笑顔を絶やさない。何が面白いのか常に笑っている印象である。まあ、彼ほど卓越した、先に煩わされることのない落ち着きぶりを持っていれば、この世のほとんどは面白く見えてくるものなのかもしれない。

私は先輩が嫌いではない。むしろ好きと言える部類だ。ああいう奇人変人の類いは見ていて飽きない。

しかしそれは見る分には、という話であって決してお近づきになりたいなどといった気持ちは一欠片もない。関わったが最後、ハンマー投げの鉄球のごとく振り回され散々な目に遭うことは想像に難くない。

なのに何の因果か、私と野田先輩は少なくとも互いの連絡先を知っているくらいの関係にある。無論私から接触するはずもない。コンタクトは大抵向こうからだ。

私はどうやら、野田先輩という怪奇的生命体に気に入られているらしかった。

○

私は電話に出るか出まいか迷った。その間も携帯は鳴り続け続ける。野田先輩の執念は凄まじい。あの人は一度こうと決めたら頑として方針を変えない人だ。なんとはた迷惑な初志貫徹だろう。

葛藤の末、電話に応じた。出なかった時の方が被害が大きいだろうと考えた次第である。

「はい、もしもし」

「やあ君。すっかり待ちくたびれたよ。あまり師匠を待たせるものではない」

「弟子になった覚えはありません」

野田先輩は何かにつけて私を弟子にとろうとする。或いはもう師弟のつもりなのか。

彼が何を人に伝授することがあるのか甚だ疑問だが、自分のことを「師匠」と呼ばせたことから察するに、師弟関係というものに憧れているだけなのかもしれない。

「相変わらずつれないな。まあ良い。自我は強い分だけ良い。そうで

なくては人生を楽しめないからなあ」

「また訳の分からないことを。それを言うために電話かけてきたんですか」

「そう焦るな。短気は損気と言う」

野田先輩は電話の向こうであくびをした。向こうも昼寝をしていたのだろうか。大口を開けている姿が容易に想像できる。

「君はどうせ暇だろう。取り敢えず今から私の下宿に来なさい。ちよつと話があるんだ」

この言葉に、私は大変な危険を感じ取った。胡散臭いにも程がある。呼ばれるままに馳せ参じれば十中八九、面倒事に巻き込まれるであらう。

「話があるなら電話で済むじゃないですか。今言つてくださいよ」

「顔を突き合わせることに意義がある場合というのもあるのだ。いいから来なさい。アイスもあるよ。君、パピコ好きだろう」

「馬鹿にしています?」

アイスごときで私が釣られると本気で思っているのだろうか。野田先輩はそこはかとなく、私を馬鹿だと思っている節がある。

「君を馬鹿だと思ったことはない。どちらかと言えば阿呆で間抜けだ」

「ひどい!」

何が変わっているというのか。

「いいじゃないか。何事にもよし悪しがある。君の間抜けは良い間抜けだ。誇りなさい。私の弟子となるに申し分ない才能だよ」

「誇りません。と言うか誇れません。弟子にはならないし、先輩の下宿にも行きません」

スピーカーから「ううむ」と先輩の唸る声。

「困ったな。よし、パピコはやめだ。ガリガリ君を買ってあげよう」
「微妙に価値が下がってませんか。とにかく行きませんかからね、俺は」

そう言つて通話を切る直前、野田先輩が「仕方ないか」とため息混じりに呟いたのが聞こえた。

スリープにした携帯をそのままポケットへ入れ、私は出掛ける準備

を始める。胸は焦燥感でいっぱいだった。

あの野田先輩が、これしきのこと諦めるはずがない。

では「仕方ない」とは、どういう意味になるのか。強行手段をとるに決まっている。すなわち私の家に訪れるつもりなのだろう。

私は野田先輩の湯水のように湧き出るバイタリティーを称賛しながらも、その矛先が自分に向けられては堪らないので逃げの一手を打つことにした。

しかし外は相変わらずの猛暑だ。座っているだけでも生命力が汗と共にぐんぐんと流れ出てミイラと成り果ててしまう。どこか涼める場所。つまり冷房のある場所に行く必要がある。

○ こういう時、行き付けの喫茶店は重宝するものである。

喫茶『マーメイド』は私のお気に入りの店だ。隠れ家のような立地が大変良い。特に今回は、文字通り隠れ家として使っている。さしもの野田先輩であろうと、地元の間人でさえ知る者の少ないここに私が避難していると特定するのは難しいはずだ。

今日のところはここで凌げば良い。野田先輩は熱量こそ凄まじいものの飽きるのも極端に早いいため、長くとも明日を乗り切ればほとぼりは冷めてくれよう。

店内に変わった様子はない。外観も内装もメニューも客の顔ぶれも、何年経とうが変わる気配がない。そこに磐石の安心感がある。

しかし私は変わった。

ほんの少し、マーメイドに通う頻度が高くなった。

何故かと言うと、そのところが自分でもよく分かっていない。何故私は最近になって、金欠を押してまで通いつめているのか。自室のクーラーも直っているというのに。

いや、分かってはいるのだ。本当はよく理解しているとも。

私のなかで、先日の鮎川さんとの時間が未だに尾を引いている。日が経つに連れてあの昼下がりの思い出が美化されていき、もはや少女漫画もかくやというほどのラブロマンスに発展していることは認めざるを得ない事実だ。桃色の妄想が止めどなく押し寄せ、理性という

ダムを木っ端微塵に打ち破って濁流のごとく思考の地平を埋め尽くす。

しかしこれを認めたくない私がいる。人としての生を受けて二十余年余り、清廉を貫いてきたのは何のためか。男女が蝶々結びのようにくんずほぐれつ結びつき、息をするがごとく睦言を交わし合う、風紀紊乱のこの世に抗うためではなかったのか。その俺がこんな有り様でどうする。

もう一度、この喫茶店で偶然にも出会えると心のどこかで信じているのだ。なんとという破廉恥。恥ずかしすぎて死んでしまいたくなる。けれど来るのを止められない。

私は悶々としながら苦いコーヒーを啜った。カフェインたっぷり味わいにより、幸いにも脳みそに冷静さが戻ってくる。

問題ない。少なくとも今回は違うのだ。

今の私は野田先輩という無頼漢に付きまとわれ、ほうほうの体で逃げてきた可哀想な書生である。恋愛の熱にのぼせていたり、鮎川さんが来ることを心待ちにしていたり、何かの偶然の末に鮎川さんと手を繋いでしまったりというような妄想に駆られて来たわけでは断じてないのである。

そう思うと心に余裕が出てきて、目の前のコーヒーを楽しむゆとりが生まれる。

苦しい葛藤に打ち勝った私は腰を据えて小説でも読もうと思った。思ったところで、固まった。

店に新たな客が入ってきたのだ。

頭から追い出したはずの鮎川さんの名前が瞬く間に脳裏を埋めつくし、否応なしに心拍数が跳ね上がる。

まさか、まさか、まさか。

はち切れんばかりの期待を込めてドアの向こうから現れる人影を凝視していた私は、しかし、次の瞬間には深い絶望を味わうこととなった。

「やあ、やっぱりここだったか」

そう言っって片手をあげ、私に挨拶した人物は『馬鹿』と書かれたT

シャツを着ていた。

すなわち野田先輩だった。

どうしてこうなった。

○

私は野田先輩に促されるままテーブル席に移った。先輩はコーヒーを頼み、そこへミルクと砂糖を山ほど入れる。あれではコーヒー風味の甘い牛乳である。表面張力の限界に差し迫ったそれを全く溢さず、優雅な仕種で飲む技術はまるで手品のようだ。

「なぜ、ここが」

やっとの思いで、私はそう言った。何故、何故、とそればかりが頭のなかをグルグルと駆け巡っている。絶対の信頼をおいていた隠れ家は、今や一刻でも早く出ていきたい牢獄と化していた。

野田先輩は威張るでもなく、さも当然のように答えた。

「前から君がこの喫茶店に入り浸っていることは知っていた」

「うそだ」

頭を抱えるしかない。私は決して、野田先輩にマーメイドのことを漏らしたことはない。いざという時に逃げ込むためだ。今となっては全くの無駄だったわけだが。

「私は電話を終える間に、仕方ないか、と言ったな。君はそれに怯えて家を出る。しかし君は物臭だから遠くへは行かず、近場で涼める場所へ行こうとするはずだ。ならば常連のここしかあるまいと考えるのは自然なことだよ」

「ストーカーではないですか!」

「心外だな。言っておくが、私は君に特別執着しているわけではないよ」

野田先輩は広辞苑のように分厚い本を取り出してみせた。

「これには我らの通う大学に在籍する、学生や教授たちの情報が詰まっている。生年月日から食べ物の好き嫌い、思春期の甘酸っぱい思い出まで。君の個人情報もその内の一部にすぎない」

私は啞然とするばかりである。

およそ人道を欠いた悪魔の書物を、野田先輩はペラペラと捲る。と

あるページを開き「どれどれ」とそこに記してある文を読み上げた。「君は高校生の頃、ヴェスヴィオの噴火なる大食いチャレンジに挑戦して返り討ちにあつたらしいな。よくやるもんだ」

もはや驚きもしない。どのような情報網を駆使すれば、こうした些細なプライベートまで把握できるのだろうか。ただただ恐怖するばかりである。

野田先輩はマーメイドにおける私の青春時代をあらかた掘り起こし、やがて本を閉じた。

「しかし、いぢらしいことだ。婦女子との出会いを待ち焦がれて喫茶店に通い詰めるだなんて」

「な、な、な」

私は無意識のうちに立ち上がり、口を鯉のようにパクパクとさせた。顔が火照っているのが分かる。

何故それを、と何度めかになる疑問が胸中にこだまする。あの辞書じみた手帳には、そんなことまで書いてあるのか。

「落ち着きたまえ。ほら、茹で蛸のようだよ」

人の気も知らず、目の前の怪人は甘ったるいであろうコーヒーを美味そうに飲み干した。言葉にならぬままなんとか着席した私に、彼は微笑む。

「案ずるな。当人の感情や動機までは、さすがに書にも記されてはいない。今のはあくまで私の推察さ」

「推察……？」

「君は先日の昼下がり、鮎川嬢と二人で商店街を歩き、彼女からプレゼントを買ってもらった。その事実と、君が最近になってこの喫茶店へ頻繁に訪れていることを照らし合わせれば、簡単に解るといえるものだ」

「探偵にでもなつたらどうです」

「無論、考えたことはある。だけど飽き性だから向いていないと結論が出た」

私はもはや投げやりな気持ちになり、犬が腹を見せるように机に突っ伏した。もうどうにでもしてくれ。

「本題に入ろう。今回はその鮎川嬢についてのことなのだ」
「なんですと」

私は即座に顔を上げた。食い付いたのを見て、野田先輩はニヤリと笑う。

「いかな私と言えど、情報の提供者がいなければ知ることはできない。君が彼女と一緒にいたところを、誰が目撃して私に知らせたと思う」「ずいぶん焦らしますね」

話を急かす私に「まあ聞きなさい」と野田先輩。

「速水という男は、君も知っているだろう」

先輩の言う通り、私はその名前を知っていた。なにせ私の後輩である。

そして速水なる人物のことを思い浮かべるにあたり、この件の主旨をぼんやりとだが理解した。

速水は、鮎川さんにフラれた過去を持つ。

○

かつて私の所属していたボランティアサークルは、男女の社交場としての側面を持つ。むしろそれを目的としてやって来る輩がいた。私が見るに部員の半数以上はその口である。社会貢献よりも己の願望を満たすために来るとは、なんたる破廉恥だろう。ボランティアサークルなどという肩書きは捨てて『破廉恥同好会』とでも改名すればいいのだ。

まあ、私のサークルに対する私怨はさておいて、速水という男も破廉恥の部類に属する者である。

彼はボランティアサークルの一員で、顔見知りでこそあるが、私は全く相容れない部類の人間だ。ピアスに金髪、着崩したシャツなど、そのチャラチャラとした見た目もさることながら、美女が好きだと公言して憚らないところが受け入れがたい。さらには誰に対して「うえーい」と迫るのだから空恐ろしい。初対面のとき、焦りに焦って思わず「うえーい」と返してしまったことは、数ある我が汚点の中でもとびきりの恥辱である。

四六時中、清い交際について考えている私とはまるで水と油。その

恋愛観は磁石のように反発する。

そんな私たちの間に知人以上の関係が生まれるはずもなく、ほとんど会話もせず思い出も築かないまま、私は今夏にボランティアサークルを去った。

しかし速水が鮎川さんにフラれたあの瞬間だけは、今も鮮明な記憶として残っている。部員たちの耳目を集めながら告白をした彼は「いえ」の一言で見事なまでに切り捨てられた。私は腹を抱えて笑いそうになるのを堪え、心のなかで鮎川さんに喝采を送ったものだ。

「君と鮎川嬢がその商店街を歩いていくのを見てしまった速水くんは、どうにかして私に辿り着き、助言を求めてきた。実に健気な話だ」野田先輩はことのあらましを説明して、一息ついた。健気さに感心しているというよりは、喜劇を面白がっているような顔をしている。つまり悪い顔だった。

「ところで君は鮎川嬢と付き合っているのかな」「いいえ全然」

私は言葉を被せぎみに否定した。言ったあとで、何をこんなに必死になっているのかと恥ずかしくなる。

野田先輩が古風な煙管からプカプカと煙の輪っかを吹かしながら「ふむ」と頷く。

「それは良かった。これで速水くんの依頼も果たせるというものだ」
「依頼って言うと、まさかまだ鮎川さんを諦めていないんですか。あいつは」

「いかにも」と野田先輩。あれほどこっぴどくフラれたにも関わらず、なんとという執念だろう。いつそ尊敬の念すら湧いてくる。

「彼は近々、再び鮎川嬢に交際を申し込むつもりだ。そのお膳立てをしてやることになっている。丁度いいから君も手伝ってくれないか。彼らと顔馴染みの人間がいればなにかと捗る」

「嫌です」

即座に拒絶したものの、野田先輩は想定内であるといった風で落ち着きはらっている。

「何故あんなチャラチャラとした男のために一肌脱がねばなんので

す。冗談じゃない。そもそも相手はあの鮎川さんだ。結果は見えてるじゃないですか」

「ほう、そう思うかね」

野田先輩は糸目を微かに開いた。私はその気迫に閉口してしまう。そう、誰であろう野田先輩が手を貸すのだ。学生の諸事情を網羅している彼ならば、たとえ難攻不落の鮎川さんでも或いは、と思わせる凄味がある。

しかしそうなると私としてはやはり面白くない。と言うか、かなり不味い。野田先輩の妖術にかかり、速水とイチャコラする鮎川さんなど見たくない。

「いいじゃないか。君は別に彼女をどうとも思っていないのだから」

私は「ぐっ」と言葉に詰まる。先ほどの見栄がこんなところで自分の首を絞めてくる。

「それとこれとは話が別です。何より俺にはなんの得もない」

私がそう言うと、野田先輩は「そうかそうか」と笑った。将棋を差すとき、私は何度となく今と同じような彼の笑顔を見てきた。手詰まりになった私へ向ける、勝ち誇ったあの表情。

私が悪寒を覚えたのと、野田先輩が言ったのは同時であった。

「君の麻雀における借金。あれについて便宜を図るつもりだったんだが」

「喜んでお手伝いさせていただきます」

変わり身は一瞬であった。平身低頭、足を舐める勢いでへりくだる。野田先輩は満足そうに笑いつつ、慰めるかのように私の肩をぽんぽんと叩いた。

斯くして、私は赤の他人の恋路を応援するはめになってしまった。誠に遺憾である。

○

私と野田先輩はそのまま喫茶マーメイドに居座り、作戦を練った。と言ってもほとんどは野田先輩が事前に考えてきたものである。

川に沿って車で一時間ほど移動した山の中にキャンプ場がある。

設備が整っているために子連れの家族に人気で、私も小学生だった頃に何度か家族とキャンプをしに行き、冷たい川で遊んだものだ。

今週末、そのキャンプ場にて、私のいたボランティアサークルが打ち上げとしてバーベキューを催す。夜通し行われるそこへ我々が忍び込むのだ。

速水曰く、食後の夜には肝試しをすることになっているらしい。小さなグループに別れて、暗い森のなかを一周するという。そこが狙い目である。私と野田先輩が裏から手を回し、鮎川さんと速水を二人きりにすることが目標となる。

「しかし真面目にやったところで毛ほども面白くない」

野田先輩は語気を強めて言った。何よりも退屈を目の敵とする人だ。爛々と光る彼の瞳は、面白きことこそが人生の至上命題だと言わんばかりの迫力に満ちている。

私はひどく面倒なことになる確信を持ってうんざりとしつつも、どうせ逃れられないなら行けるところまで行こう、というヤケクソな気持ちでムラムラと沸き起こった。変に前向きになったわけだ。

「バーベキューを滅茶苦茶にしましょう。奉仕活動という大義にあぐらをかき、酒池肉林を貪る奴らに今こそ鉄槌を！」

私は「鉄槌！鉄槌！」と叫んだ。

「我が弟子は過激派だな。良いだろう。前々からあのサークルの不純異性交遊については私も思うところがあった。ここいらで一つ、お灸を据えることにしようか」

無論、野田先輩は風紀の乱れなんて気にするような人ではない。むしろさらに掻き乱して、その混沌とした様を高めから見物するのが大好きである。今回もそうなるように事を運ぼうとするのだろう。

そうして我々の、無闇に壮大で阿呆な作戦が出来上がった。

○

バーベキューほど憎らしいこともそうないと、私は思うものである。自然の静謐を打ち破って煙を撒き散らし、ひとしきり騒いだ後はゴミを溢れさせて行くあの所業こそ、悪以外の何ものでもない。

品の良い人達もいるじゃないか、といった反論が湧きもするだろ

う。知ったことではない。あの若者共がキラキラと戯れる姿を想像するだけで怒りと虚しさが胸中に渦巻く。なぜ私はあの場に居られないのだ。

「見ろ。キノコがこんなに採れたぞ。夏でもいけるもんだ」

私が劣等感に耽りながら、じうじう焼ける肉を弄っていると、森の奥から野田先輩がほくほくと満足そうな顔をしてやって来た。手には色とりどりのキノコを抱えている。

地面の上に広げた戦利品は、ほとんどがおぞましい見た目をしている。その出で立ち一つで「俺には毒があるぜ」と見事なまでに主張している。

「これ食べられるんですか？」

「なに。食べてみないことには分からんさ」

「捨てましょうよ」

私の言を無視して、野田先輩は菌類の塊を焼いて食し始めた。一時間経っても先輩が死ななければ食べてみようかと思いつつ、私はマシユマロを焼く。

我々は計画を遂行するべく、町外れの山の中にあるキャンプ場に来ていた。某サークルが予約を取っているところから離れた場所に陣取り、こうして先輩とバーベキューに興じている。時が満ちるまでの暇潰しだ。

「いや、バーベキューをやってる場合ですかね。先輩はともかく、俺は顔が割れてるから見つかれば計画がおじゃんですよ」

「その辺は向こうにいる速水くんが上手くやるだろう。彼、声はやたらと大きいから。まあ今は楽しみたまえ。君、バーベキューなんて初めてだろう」

「はい。こんなに寂しい気持ちになるものだとは知りませんでした」

男二人だけで囲む火の、なんとつまらないことか。肉が鶏肉しかないというのが輪をかけて惨めである。しかも私の目の前にいるのは野田先輩だ。無精髭を生やして逢髪をなびかせ、『馬鹿』と書かれたTシャツを着ている彼と一緒に安い鶏肉や謎のキノコを食っていると、あたかもホームレスになったようであった。今の私はボランティア

を受ける側として申し分ないのではなからうか。

先輩の懐から電話の着信音が鳴った。

「やあ、順調か。うん、うん。それじゃあ手筈通りにな。では」

相手は速水だろう。簡単な報告だけしたようで、先輩はすぐに通話を終えた。

「彼、張り切っているよ。鼻息が荒かった」

「奴は性欲の権化です」

「だろいなあ」

私はここに及んで猛烈に、速水の企みを邪魔したくなつた。あのア
ンチクショウめの毒牙に鮎川さんのような乙女がかかるなど、あつて
はならないことだ。鮎川さんまで「うえーい」とか言うようになった
らどうしよう。想像してみても少し可愛いかもしれないと思つた。

どうしてあの二人の仲を取り持つ立場にいるのか、と自分で自分に
腹が立つ。麻雀で負けが込んだからである。底抜けに間抜けな話だ。

野田先輩はその微笑みの裏で何を思っているのだろう。少なくとも
も、葛藤に悶える私を面白がっているのは間違いない。

大変やるせなくなつて、私も謎にピンク色なキノコを口に詰めこん
だ。「おお」と野田先輩が目を見張る。もしも死んだら本物の幽霊に
化けて出て、速水の肝っ玉を試してやるつもりだ。

「これで一蓮托生ですね」

「うむ。ちなみに君が食つたのはトキイロヒラタケという。毒などな
いから安心していい」

「えっ、ではこれは」

「それも食用」

どうやら野田先輩はキノコの知識にも精通していたらしい。おか
げで私の覚悟は全くの無駄となつたわけだ。本当に良かった、と今に
なつて冷や汗が垂れる。

「さて、そろそろだな」

野田先輩がそう言つて空を見上げた。抜けるように青かつた空に
夕焼けの色が混じり始めている。雲にさす朱色は濃く、やがて東から
は夜が昇ってくる。

逢魔ヶ時のすばらしい空模様を目にした私は、自分のなかに魔性めいた何かが入り込んできたように思われた。それはさながら狼男が満月によつて変身するように私を大いに昂らせ、先ほどの葛藤をたちまち何処かへ追いやってしまった。

夜が来る。祭りの夜だ。物怪と化した私と先輩は闇夜に乗り、乱痴気騒ぎを好む阿呆大学生を恐怖のどん底へ突き落とす。

それからまもなく山は夜におおわれた。空にかかる月が美しい。バンガローのある方からは賑やかな声が聞こえ、オートサイトにいる私たちにまで牛肉の焼ける良い匂いが漂ってくる。

私と野田先輩は互いに頷き、黒いローブを頭から被った。火を消しペンライトを持って立ち上がる。

狩りの幕開けである。

○

私は忍者のように気配を殺して茂みに潜んでいる。目の前の広場では今まさに、私の憎むべき狂宴が行われている。バーベキューコンロをいくつも並べ、その横で男女が肉の乗った紙皿やビール缶を持ちながら赤ら顔で談笑している。広場一帯が貸し切りなので、中央にはキャンプファイアーまであった。

当然のことながら、私が見知っている人間が何人もいる。

その中に鮎川さんの姿もあった。彼女は喧騒から少し離れたところで椅子に座っていた。巻き上がる炎や戯れる人たちを眺めながら、手酌で酒を飲んでいる。その様子は退屈しているようにも、祭りめいた熱気を楽しんでいるようにも見える。

そんな彼女に近付く者がいた。速水である。速水はこちらにまで聞こえるほど大きな声で「いえーい、飲んでる？」と鮎川さんに絡み、酒を注ぐとする。

私はてつきり鮎川さんが突っぱねるものと思っていたが、彼女はわざわざ残っていた分を飲み干して速水の酌を受けた。しかも今度は速水のコップに注ぎ返してやっている。

衝撃である。私は悲鳴を上げそうなるのを必死に堪えた。

先日の商店街で得たアドバンテージは跡形もなく消え去った。こ

ここに及んでついに良心の呵責というものは一切なくなり、すぐにでも速水をギャフンとすら言えない状態にさせてやりたくなかった。私も鮎川さんに酒を注いだり注がれたりしたい。

そうやって変態的な妄想を捏ねつつ観察していると、ポケットのなかで携帯電話が震えた。野田先輩からの連絡だ。

「動きが見られる。準備は出来たか」

「イエッサー」と私は答えた。師匠になりたい野田先輩が笑う。

「よろしい。配置に付きたまえ」

電話を切った私は、音を立てぬようゆっくりと茂みから後退する。

そうして立ち去ろうとした瞬間、鮎川さんと目があつた。心臓が飛び出そうなほど脈動し、咄嗟に顔を下へ向ける。

確かに視線と視線が交わつた。向こうから暗がりとなっている此方は見えないはずだが、いや、しかし。

私は踵を返して、逃げるように森へと分け入った。鮎川さんのあの涼しげな視線が、まだ背中に向けられている気がした。

○

今回、作戦の要となるのは鮎川さんの性格である。ボランティアサークルに所属しながらも、天然記念物とでも呼ぶべき一匹狼っぷりを誇る彼女は、絶対に肝試しなんぞ眼中にない。宴から離れたところにおいて一人で酒を飲むだろう、と私たちは予想した。実際にその通りであったため、計画は次の段階へ進む。

これから始まる肝試しを利用し、皆を浮かれさせ出払わせ、速水と鮎川さんが二人きりになる隙を作ることが目標となる。

私の役目はサークルの部員たちを徹底的に怖がらせることである。ペアになった男女がイチヤイチャしながら森の奥まで来たところを、能面を被った私が強襲する。しかも手には包丁を持ち、絵の具で返り血のように赤黒いペイントまで施している念の入りようだ。

個人の真価とは、思わぬ危機に直面したときに初めて見られるものだ。森から出てきた能面に、男女のどちらかは腰を抜かして小水を漏らし、どちらかは相手を置いてきぼりにして逃げ出すだろう。そうして情けなさを存分に見せあつた二人はお互いを罵り、埋めがたい溝を

作ることとなる。

なるはずであった。

しかし私の姿を見た人たちは悲鳴を上げながらも、皆一様にはしゃいでいた。

笑う者、怖がる者、叫びながら逃げる者、写真を撮ろうとする者。反応はそれぞれで違うが、彼らの表情は浮かれた者のそれである。肝試しというイベントを心の底から面白がっている顔をしているのだ。中にはこちらへ対話を試みるような奴までいてもう手に負えない。

「やべー、さっきの見た？」

「もうマジ怖かったよー」

「あれ誰がやってんの」

「もう一度探しに行ってみるべ」

森中に歓声めいた声が響いている。別のルートに進んでいた連中も、野田先輩の仕掛けた罠によって同じ目に遭っているようだ。つまり楽しんでいる。

私は途方に暮れるしかない。

何が悲しくて、この私が憎き彼らを楽しませなければならぬのか。被っているお齒黒の能面は微笑を浮かべているが、その下で私は泣いていた。どうして、どうして、と自棄になって脅せば脅すほど、ボランティアサークルの連中は鬼ごっこをする子供のように逃げていく。誰も私の望む恐怖を持ってはくれない。

「先輩、先輩」

とうとうやりきれなくなった私は、木立の影に隠れて野田先輩へ救援を要請した。

「おお、どうした」

「どうしたもこうしたも、どうにもなりません。奴ら楽しんでばかりで全然仲が良いままです」

「ええじゃないか」

「何も良くありません。それに計画はどうなっているんです」

野田先輩の暢気さに業を煮やしかけた私は、スピーカーの向こうから聞こえてくる賑やかな音に気付いた。それに先輩の声も心なしか

弾んでいる。

「というか先輩の周り、なんかうるさくないですか」

「うむ。今歓待を受けていてなあ。少し酔ってきたところだ」

私は天を仰いだ。こちらが悪戦苦闘しているうちに野田先輩はとつくに寝返っていたのだ。「いけるクチですなあ」とか「こりやどうも」などと向こうで掛け合い、野田先輩が手品を見せているらしく実に愉快的な声が私の鼓膜を刺激した。痛撃もいいところである。

「君もこっちに来ないか。それに計画はだな」

私は通話を切り、今度こそ本当に途方に暮れた。暗い森のなかでたった一人、何をやっているのだろう。心の中心にぼっかりと穴が空いたようである。

木々の枝にはいくつか提灯が提げてある。不定期に明滅するよう先輩が細工したもので、遠目には暗闇に鬼火が浮かんでいるかのように見える。他にも私が仕掛けたラジカセからは少女の狂ったような笑い声が響いていたり、三メートルほどはある大入道のハリボテが木立の間から覗いていたり、下手なお化け屋敷よりも恐ろしげだが、最早そんなことはどうでもよくなってしまった。

何処へ行くでもなく森をさ迷う。とぼとぼと歩く私の能面を鬼火モドキが照らし出し、それを偶然見かけた男女が叫びながら逃げている。楽しそうだなあ、と羨ましくなる。

再び携帯電話が震えた。もちろん野田先輩からだ。いつもは沈黙を保っている私の携帯電話だが、今日はやたら大活躍である。履歴を見れば野田先輩の名前一色で、げんなりすること請け合いではあるが。

しばらく迷ってから「はいもしもし」と応じる。

「話は最後まで聞きなさい。作戦は終了したよ。ご苦労さん。あとは自由に過ぐすといいい」

「作戦って、速水の、ですか」

「それ以外なからう」

「ええと、その、成功したということですか」

作戦という言葉で、ここへやって来た当初の目的を思い出し、私は

固唾をのみ込んだ。まさか鮎川さんに限ってとも思っていたが、祭りの空気とは人を惑わせるものだ。吊り橋効果も侮れない。

酒でも飲んでいいのか、ぐびぐびという音のあとに続けて先輩は言った。

「それなんだがね、二人の姿がないんだ。川の方へ行くのを見たという人がいるが、まあ気にするほどのこともないだろう」

「わかりました。川ですね」

「うむ。あ、麦酒をもう一杯」

私はキャンプ場のすぐ側を流れる川へ向かって憤然と歩き出した。先ほどもどまどとは違い、爪先にぐつと力が入る。

男女二人が川原へ行くなどただ事ではない。私の定める、羨ましいシチュエーショントップ10にランクインする。いや、今なら堂々の一位だ。

那由多の彼方にあると思っていた危機は現実のものとなった。事ここに至ってようやく、私は私の成すべきことが見えた。鮎川さんを速水なんぞに任せておいて良いはずがない。麻雀の借金云々など知ったことか。

暗い川辺に突き当たり、そこから上流へ向かって歩いていくと、二人分の人影が見えた。満月の明かりが拓けた場所にいる二人を照らし出している。間違いなく速水と鮎川さんである。

速水はなんと、鮎川さんの腕を掴んで今まさに引き寄せようとしているところだった。鮎川さんはそれに応じず、抵抗しているようには見えてとれる。

その光景を目撃した私は怒り心頭、茂みから勢い良く飛び出して姿をさらした。

「はあやあみいいいい」

私は偽包丁を振り被って奇声をあげる。

すると速水は顔面を蒼白にさせた直後、声にならない悲鳴を上げてキャンプ場の方へ逃げていってしまった。まさしく脱兎の如しである。その見事なまでの逃げっぷりに呆れを通り越して感心していると、横で鈍い音がした。

振り向けば、尻餅をついた鮎川さんが私を見つめていた。私が心配し慌てて近寄るも、鮎川さんは手を前に突き出して待ったをかけた。「そのお面、脱いで」

相変わらざるの無表情だが、どうやら鮎川さんは驚いて腰を抜かしてしまつたらしかつた。私は自分の今の容貌を思い出し、迅速に能面を脱ぎ捨てた。模造の包丁も捨てて「怪しい者ではありません」と言う。それでようやく彼女は一息ついた。

鮎川さんにも怖いものはあるのだ。

○

私たちは川のほとりにある岩に腰を落ち着けた。満月の明かりとは大したもので、私はライトを点けずとも鮎川さんの表情を見ることができた。

「びつくりした。急に出てくるから」

鮎川さんは言いながら、私へお茶のボトルをくれた。下戸の私にはありがたい。

私は驚かせたことへの謝罪と共に、何故自分がここにいるのかという理由をかいつまんで話した。全ては速水が元凶だということを強調して。

鮎川さんは驚くでも呆れるでもなく「ふうん」と一言で済ませ、酒の缶を傾けた。

「鮎川さんはなんでこんな川の方に？それも、その、速水と」

「この辺りで飲もうとしたら、あの人も付いてきたの。女一人じゃ危ないからって」

速水はそうした真つ当な理由を建前にしたらしい。上手いものである。

しかしその後の行動がいただけでない。川原まで来た途端に奴は鮎川さんに迫り、大胆にも告白の段階を飛ばして接吻を迫つたらしい。そうして再び鮎川さんにフラれ、なおも食い下がったところで私が登場したという。鮎川さんの飄々とした態度に焦つたのかもしれないが、強行突破は不味かろうとさすがの私でも分かる。

私は散っていった速水に合掌しつつ、鮎川さんがたぶらかされると

いう展開が杞憂だったことに安堵した。

「さつき、茂みの中に隠れてたでしょう」

「気付かれていたか」

やはり視線が合ったのは勘違いではなかったらしい。しかも鮎川さんの口振りからするに、能面の男が私であることにも勘づいていたと見える。私が奇声を発して乱入しても尻餅を着くくらいで済んだのは、ある程度の心構えが出来ていたからということか。

「じゃあ俺が森で脅かし役をやることにも気付いていたわけだ」

「そうね」

「また阿呆なことをやっていると思っただ？」

「そうね」

自分で聞いておいて、穴があつたら入りたくないなあ、と思う。

「でも助かったわ。ありがとう」

「ああ、うん」

そこで会話は途切れてしまった。気まづくなり次の話題を探す私の横で、鮎川さんは特に気にする様子もなく月見酒を楽しんでいる。風鈴のことを言うべきか。それとも彼女の大吃いの秘密について聞いてみようか。

虫の鳴く音や川のせせらぎが私たちの間に流れる。そんな無言の時間が続いていたところで、鮎川さんはやおら立ち上がり、川の方へ歩いていった。まさか水の中に入るのではと思ったが、彼女は川縁でしゃがみ込むと何かを拾い上げ、こちらに戻ってきた。手には空き缶を持っている。

どうやらゴミを見つけて拾ったらしい。ついこの間、サークルでゴミ拾いをしたと聞いていたが、やはり捨てる輩は後を絶たないようだ。こればかりは仕方がない。

「ここ、昔は鮎やマスがいたの」

座り直した鮎川さんが言う。彼女にしては珍しく、残念そうに目を伏せている。どうやら鮎川さんは昔からこのキャンプ場、ひいては川のことを知っていたらしい。これもまた彼女の印象からは想像しにくい。釣りでも趣味にしているのだろうか。そういえば鮎川さんは

サークル内でもとりわけ自然環境への気配りが細やかであった。

小さい頃、この川で遊んだことのある私も魚を見た記憶がある。藻の影に潜んでいる鮎を近くで見ようと躍起になったものだ。今からは考えられないくらい、遠い昔のことのように思える。

「そういえば子供の頃、このあたりで溺れたことがあるよ。昔はたまに家族でキャンプに来ててさ」

思い出したことをそのまま口に出したところ、それまで川や月にご執心だった鮎川さんが私をまじまじと見つめた。穴を開けんばかりに視線を注いでくるので、さつきと別の意味で言葉に詰まらされる。どうしてだろうと考えても一向に理由が分からない。私は何か彼女の地雷を踏み抜いたのか。

しばらくして、ようやく視線を外してくれた鮎川さんは「そっか」とだけ呟いた。なんだったのかと言及したいところではあるが、私にそんな勇氣はない。

「私もこの川で遊んでいたわ」

今度は私が鮎川さんを見つめることとなった。一瞬、この間見た夢が走馬灯のように私の脳裏を駆け巡った。川に落ちた私を助けた謎の人物。そのボヤけていた像に、鮎川さんの顔が重なったような気がした。

妄想に捕らわれそうになった私は、いかんいかんと頭を振つてくれない考えを追い散らした。ロマंचイズムに浸りすぎても良いことなどない。

それから我々は特別語らうこともなく、中天にかかる月を眺めた。鮎川さんから麦酒を一口もらったが、やはり私の口には合わない。しかしほんのりと気分が高揚し、白っぽい月もなんだか色付いて見えてくる。

野田先輩がまだ猛威を奮っているのだろう。祭囃子が遠くに聞こえる。先ほどと違い、意外にも私はそれを心地よく思った。

「綺麗な月ね」

鮎川さんがポツリと言った。「そうだね」と私は答えた。

○

今回の件で速水の納まるべき立場をもの見事に奪った私は、野田先輩に麻雀での借金を返済するため東奔西走、残りの夏休みを全てアルバイトに捧げることとなった。

などと云うことはなく、その辺りは無罪放免となった。

私たちの目的はあくまで速水と鮎川さんを一人きりにするというものであり、その後どうなるかは速水次第だというのが先輩の理屈らしい。速水からどれほどの報酬を得たのかは知らないが、野田先輩は無報酬でも面白かったならば良いと考える人なので、そこはあまり重要ではないのだろう。

また、速水が恋人を作ったというのが大きい。もちろん相手は鮎川さんではない。野田先輩曰く、サークル内の後輩だという。構内で見かけた速水らカップルはいかにもな熱烈ぶりを発揮しており、私は速水を性欲の権化と言いつつ自分の正しさを再認識した。

喫茶『マーメイド』でそうした諸々の報告を終えた野田先輩は「楽しかったなあ。またやりたいなあ」などと宣う。二度とごめんである。

「そういえばあれから上手くはいったのかい」

「なんのことです」

「鮎川嬢とだよ。せっかく二人きりになるよう仕向けたのに、何も無いということはなからう」

私がぎよつとしてみると、野田先輩は愉快そうに大笑した。

話の流れからするに、その二人きりというのは私と鮎川さん以外にいないだろう。

あの夜のこととはつまり、全て先輩の手のひらの上にあったのだ。面白きことを至上とするこの人がただ普通に依頼を受けるはずもなく、協力者であった私自身もその面白きこと、つまりは先輩が観察する人間模様の中に含まれていたらしい。

野田先輩はしてやったりという顔をするでもなく、ただ満足そうに笑っている。踊らされたこちら側としては面白くないが、結果としては良い思いが出来たわけだから、なんとも複雑な気持ちになる。

私はせめてもの抵抗として、黙秘権を行使することを選んだ。無

論、焼石に水だろうけど。

「なあ、彼女と何を話したんだ」

「特に何もありませんよ」

「本当に？」

「本当に」

喫茶店の窓から外を見る。正午の太陽は狭い路地裏にもその光を届かせていて、屋内から見ているだけで暑さを感じさせる。

日は長い。夏もまだ盛りだ。

そう思うにつけ、うんざりすると共に、鮎川さんのことが頭に浮かぶ。つい先日、軽率な恋愛など唾棄すべきだと己の中で結論付けたにも関わらず、性懲りもなく彼女のことばかり考えている。これは良くない傾向だ。

商店街で連れ添ったこと以上に、あの月見が私の心を惑わせる。これも夏が持つ、人を浮わつかせる魔性めいた力のせいか。そんなものに惑わされたくは、ないものだ。一時の感傷などに捕らわれて、これ以上恥ずべき歴史を塗り重ねないよう努めたいと強く思う。

しかしもしも、あの夜に意味があるのならば。鮎川さんも何かしら感じるものがあつたのなら、もう少しだけ話をしてみるのも吝かではない。

私が見る夢のこと。鮎川さんが遊んだという川のこと。

いや、もっと他愛ない会話でも良いかもしれない。それこそ食べ物の話や、夏が暑すぎると言うだけでも悪くない。

次に彼女に会ったら何を話そうかと、私は常々、思ってしまうものである。

○

おしまい

三章 前編

夏は人を惑わせる。私が二十年余りにおよぶ人生の中で得た真理の一つである。

海辺の白い砂浜。緑葉の濃い山々。清く冷たい上流の川。夏というだけでこれら普通の景色が鮮やかに色づき、素晴らしい宝石のようにキラキラと輝き出す。

その魅力を前にして、人はしばしば判断能力を失う。やれ一夏の思い出だの、やれアバンチュールだのと妄想を垂れ流し、異性を求めて徘徊するのである。

とりわけ書生という生き物は、徘徊するだけに止まらず、唐突に自分磨きなるものを始める。見向きもしていなかった勉強に取り組んでみたり、ひ弱な筋肉を鍛えようとスポーツジムに通ってみたり、弾けもしないギターを買って散財の限りを尽くしたりする。

何が彼らをそうさせるのか。無論、異性に良く見られたいという自意識に相違ない。私は「いや、そんなことはない」とか「前々から興味があったんだ」と抜かしつつ、付け焼き刃の努力に励む人たちを見てきた。

そして現実は無情である。

理想の異性と巡り会う機会にはついに恵まれず、海では砂と塩にまみれ、山では蚊や蝨びよに刺され、川では溺れてあわや命の危機。荒砥で磨いた自己は夏の終わりと共にすぐさま錆びついて見る影もなくなる。

そのような滑稽極まる同世代の人々を私は鼻で笑ってきた。何を無駄なことかと思いつつ、変な形の雲を楽しむように、遙か低いところから彼らを見上げるばかりであった。

「何やってんの兄ちゃん」

居間のソファアームで寛いでいる弟が言った。私は彼の方を見ずに上下運動を続けながら答える。

「見てわからんか。腕立て伏せに決まっているだろう」

「いや、なんで突然そんなことやり始めたのかって聞いてるんだけど」「最近筋肉の衰えを感じただけだ。それだけ。他意はない。本当に」

私の腕が生まれたての小鹿のようにプルプルと震える。鍛練はやり過ぎてても逆効果だという豆知識を聞き齧っていたので、私は一区切りつけることにした。

額に滲んだ汗をぬぐう。これまで筋肉が疲労することを嫌悪していた私だが、いざやってみると大きな仕事を一つ片付けたような充実感を感じた。

余暇を鍛練に注ぎ、ほどよい汗を流す。これは何処からどう見ても好青年だなア、と自分を褒め称える。

「いやあ良い汗をかいた」

私が肩を回しながらそう言うと、弟は白けたような半目で見てきた。

「まだ十回だけど」

「やかましい。千里の道も一歩からという言葉を知らんのか」

「じゃあ腕見せてみなよ」

私は袖をまくり、今しがた自信をつけた上腕二頭筋を見せつけた。弟に鼻で笑われる。あまつさえ「千里どころの話じゃないね」などと言う。なんて失礼な奴だろう。

五歳も下の弟の無慈悲な発言に気を悪くしたので、居間から出ていくことにした。

しかし、このまま自分の部屋に引き下がるのは敗けを認めたようにでたいへんな屈辱を感じるため、去る前にほんの少し体裁を整える必要があった。

「さて、今度は勉学に勤しもうかな。なにせ大学生だからな、俺は」
私がカオス理論だのシュレインガー方程式だのとそれらしいことを口にする、弟はまるで、路傍に転がる犬の糞が突然喋りだしたのを目撃してしまったような顔をした。つまり一寸たりとも私を尊敬した様子はなかった。兄の威厳はいずれ。

しかしそれでも私の胸のうちで滾っている熱意は衰えることを知らない。かつてないほどのエネルギーが体中の毛細血管に満ちてお

り「何でもいいから励め」と私に訴えかけてくる。

「僕も自分の部屋に行くけど、あまり騒がしくないですよ」

「何を言ってるんだ。俺は勉強に勤しむと言ったろう。どうやって騒がしくするんだよ」

「だって兄ちゃんさ、すぐにギター弾き始めるじゃん」

立ち上がった弟は鋭い横目で私に釘を刺しつつ、居間を出ていった。

確かに私は最近、物置で埃を被っていた父親のギターを引つ張り出して弾いている。楽器など義務教育でしか持ったことがないので、たまに奇つ怪な音が鳴る。「たまに」と言うよりは「しょっちゅう」と表すのが正しいのかもしれないが、それは些細な違いであろう。寛容さを心がけることが大人物になるためには必要である。

心の広い私は、弟の言うことにも一理あると思うものだ。事実として私の演奏技術はまだ人前で披露できるものではないので、それを勉強中に聞かされては堪らないのだろう。そのくらいの道理は私とて弁えている。

朝食を摂ってからこちら、筋トレはもう痛いほどこなし、弟がいるからギターの練習もできないときている。仕方がないので、今のところは持て余したやる気を全て勉強に向けようと決意した。

朝方だというのに窓からはガラガラとした日光が降り注いでいる。いよいよ真夏と言える時期も最後とあって、太陽も私と同じようにやや張り切り過ぎているのだろうか。そう思うと普段は憎いだけの存在にも妙に親近感が湧くというものだ。

では真夏の太陽よ。お互いに今日一日頑張ろうではないか。

私は心のなかで同志の健闘を祈り、自室へ行った。もちろん冷房は容赦なく効かせる。太陽にエールは送ったが、それとこれとは別問題である。

窓枠の風鈴が涼やかな音を奏でる。鮎川さんからもらった、川魚の風鈴。その音を聞きたびに私の心臓は躍動し、血液を目まぐるしい勢いで手足の先へ送りつける。すると居ても立ってもいられず、何かしないことには落ち着かなくなってしまうのである。

何故こうなったのか。原因はだいたい自覚しているのだが、それを認めるには事の重大さに相応する恥が付きまとうので、あえて考えないものとする。今はそう、前々から興味があつたことをやるだけだ。決して言い訳などではない。決して。

そうして私は柄にもなく文机に向かい、意味不明な数式の羅列によつて完膚なきまでに叩きのめされたのであつた。

○

最近、例の夢を見る頻度が増えた。

私が子供の頃に川で溺れた記憶、その再現のような夢である。昔からたまに見てきたが、ここ二週間でもう三回目となる。そろそろ溺れ慣れてきた感じさえして参ってしまう。

細かな違いはあれど、大筋は変わらない。山中で一人遊んでいた私が、足も着かない深さの川で溺れ、そこを誰かに助けられるという内容だ。

その『誰か』が今までは分からなかった。常にその人の顔は霧がかかったように不透明で知ることが出来なかったのだ。

しかしついこの間から、得体の知れない誰かの役に、鮎川さんがすつぽりと収まつてしまった。私がここ二週間で見た夢の三回とも、鮎川さんが幼い私を助けている。彼女は優しく微笑み、人魚のように見事な泳ぎで私を水面へ引き揚げてくれる。夢は、いつもそこで途切れるのだ。

大学のサークルを同じくしていただけで、あとは殆ど接点のない彼女に、私はいったい何を求めているのだろうか。こんな思春期真っ只中の中学生じみた妄想を夢に見てしまう自分に腹が立つ。全くもつて愚にもつかない。

しかし単なる阿呆の夢と片付けることができないのがもどかしい所である。

何故なら幼い頃、私がキャンプ場近くの川で溺れたことは事実であり、気絶している内に何故か岸边に揚がっていたことも紛れもない事

実だからだ。倒木や岩に引つ掛かるのではなく陸の上で仰向けに倒れ、濡れた衣服は欠けることなく私の側にまとめて置かれていたという。

たまに家族の間でも話題に上がる。

なぜ私は、あんな風に助かったのだろうか、と。

○

私はかつて努力を手放した人間である。覚えている限りで、その起点は新品のランドセルを背負っていた頃にまで遡る。

宿題が好きだったと言う人は世間にもそう居ないと思うが、とりわけ私は宿題というものを嫌悪していた。その単語を聞くだけで虫酸が走り、夏休み明けの初日などは「胃潰瘍で動けない」と主張し、親に蹴り出されて泣く泣く登校したものである。

大学生になってから、その傾向はますます顕著になった。これまで努力らしい努力をしてこなかったことが自己の一部として屹立し、今更むくつき努力をしたところで何になる、と頑なさを増した。結果として私の浮浪人じみた空気は一層濃くなり、素敵な女性の代わりに野田先輩などの奇人変人から妙に好かれることになった。類は友を呼ぶと言うが、いつの間にか野田先輩と同類になっていた自分に戦慄を覚える。

そんな努力をしない信条の一環として、己に断固とした恋愛禁止令を敷いていた。

これは何も、全面的に恋愛を禁じたわけではない。私も健全な男児として、女性とお付き合いしてみたいという気持ちはあるのだ。その人権は尊重されるべきだと考える。

『来る☒拒まず、去る☒追わず』

これこそが私のモットーである。

ガツガツとするのはみつともない、という考えが思春期になりたての頃より私の恋愛観の根底にあった。本能のままに生きたところで欲は満たせても愛は満たせない。むしろ私が理想とする清廉かつ可

憐な乙女は、そうした軽薄さを嫌うはずである。いや、そうに違いないと確信していた私は、恋愛における一切を運命に委ねることにした。

そう志して、ついに大学三年生というところまで来た。来てしまった。こちらに来る☒が皆無なので、拒むべき人も追うべき人もいないという有り様だ。意を決して入ったボランティアサークルにおいても、路傍の石同然と成り果てて自主退部する始末。どうしてこうなった。

どうしてこうなったのか。そう自問する内に、紆余曲折あつて私は一つの天啓を得た。

即ち、努力をして成長すれば、自ずと周りに人が集まるのではないかと。

諸君、手のひら返しと笑つてはいけない。私は真剣である。初志貫徹は大切なことだが、頑固一徹で押し通そうにも通らないのが人生というものだ。時として我々は柔軟な対応に迫られる。

それに私は、この自己矛盾に対する回答も備えていた。

私はそもそも軽薄な恋愛を嫌っていたのであつて、清純かつ真つ当なものであればむしろ歓迎する所存だった。受け身であることこそ変えないものの、相手を受け止める姿勢というのも大切だと今夏に思い直した次第である。

この発想の転換を経て、私の脳裏には約束されたも同然の輝かしい未来がまざまざと描かれた。

腹筋が割れ、胸板も厚くなつた私は白いシャツを着るだけで人目を引く。伸びた背筋や悠然とした歩調からは磐石の自信が見て取れ、しかし威張り散らすような傲慢さは欠片もない。眼鏡の奥にある瞳は常に理知的な光を湛え、ふと目を合わせるだけで女性をメロメロにしてみよう。

しかし私が世の女性たちに誘惑されることはない。

もちろん、長い黒髪の似合う清楚な乙女が隣を歩いているからだ。即ち私の彼女となるべき人だ。今は失われて久しい大和撫子然とした立ち居振舞いを身に付け、夏だからといって過剰な露出もしない。

きつと裾の長い白いワンピースなどを着ているに違いない。自然環境への気配りができる優しさを持ち、その反面で大食いチャレンジを楽々と制覇してしまうような茶目っ気があればなお良い。

理想のカップルと呼ぶべき私達は清い交際を信条とし、決して人前でベタベタといちやついたりはずせ、しかし仲睦まじく昼下がりの商店街を歩くのである。

「素晴らしい」

いずれ訪れる輝かしい未来を前に、私は恍惚とした。そして奇しくも、私が理想とする女性にピッタリな鮎川さんという人が同じ大学にいるのではないか。これは運命に違いない。

もちろん鮎川さん個人を狙っているわけではないが、男を磨き上げた私に彼女が惚れてしまった場合、交際するに吝かではない。

時計を見ると正午に差し掛かるところだった。机上に広げたノートには、およそ成果と呼べるものは書かれていない。妄想に耽っている内に昼になってしまったようだ。情けないことだが、しかし勉強に向き合おうとしたその姿勢だけでも評価されるべきと考える。大切なのは志である。

私はそつとノートを閉じ、台所へ行きインスタントラーメンを食した。腹が一杯になったところで、窓から見える空が雲一つない快晴であることに気付き、少し外へ出てみようかという気が起きた。平素では考えられないことである。

しかし流石に炎天下の中を散歩するつもりはないので、何処へ行こうかと悩んだ。

悩みながら自室に戻り、文机に散らばる様々な書類をなんとなく眺めていると、一枚のメモ用紙の走り書きが目にとまった。

今日の午後二時から自由参加の特別講義が開かれるとある。これに参加するだけで単位がもらえると聞いてメモをしたことを、私は思い出した。常日頃から金と単位に困窮している私には垂涎の話だったが、本来は休暇である時間をわざわざ大学に充てなければいけないことに躊躇いを覚え、保留している内に忘れてしまったものだ。

すぐに家を出れば間に合う。だが私の貴重な休日が。いやいや今

こそ自分磨きの時ではないか。しかしローマには古くから午睡の文化というものがあつて。

悪魔と天使が脳内で囁く。

私は葛藤の末、行くことに決めた。

決め手となつたのは講義の内容だつた。学校のホームページを調べてみると、講師として招かれるのは自然環境の研究をしている著名な学者だという。テーマとしては、環境と社会の共栄うんたらとあるがそんなことはどうでもいい。

この講義には鮎川さんが来ることが予想された。ボランティアサークルでの働きぶりから考えるに、鮎川さんの自然に対する愛情は本物である。彼女のことだから単位数に不安はないだろうが、自然環境の講義と聞いて来ないはずがない。

私はこれから積極性を取り戻すと誓つた。目の前にぶら下がっている好機を見逃すわけにはいかない。

そうと決まればうかうかしてられない。

私は急ぎ鞆に荷物を詰め込み、着替えを済ませた。まだパジャマのままだったのだ。寝癖もついていたので洗面所へ行き整える。自分磨きとはなんだつたのか。

「出かけるの？」

洗面台の鏡に向き合いしつこい癖毛と格闘していると、弟がひよっこり顔を出した。

「そうだ」と答えると、帰りがけに足りない文房具を買ってきて欲しいと言う。いつの間にか兄である私を顎で使うようになってしまったことは非常に残念だが、今は口論する時間も惜しいので適当な生返事をしておいた。講義が終わっても覚えていたら買ってやるとしよう。

「それと来週の日曜んだけど、僕は家で夕飯食べないから」

「なんで」

「花火見に行く」

壁にかかっているカレンダーを確認すると、その日は年に一度の花火大会の本祭だつた。小さい頃は家族で行ったものだが、ここ数

年は一度も見えていない。弟の方は中学生になってからは友達と一緒に行くようになった。

私が行かなくなったのは、花火を見たり出店の通りを練り歩いたりするような友人が皆無だったからだろう。つまり運がなかったのだ。私は悪くない。

「友達とか。そういういえば去年も行っていたな」

「いや、彼女と」

私が驚愕して振り向くと、弟は勝ち誇ったようにニヤリと笑ってから「買い物よろしく」と捨て台詞を残してそそくさと部屋に戻ってしまった。

出かける時間が差し迫っている。私は弟の恋愛事情を追及したい気持ちで堪えて家を出るしかなかった。

駅まで自転車を漕ぎ、汗だくになりながら電車に乗り込む。平日の昼間の車内にはほとんど人がいない。シートの端に腰かけた私は儼然として外の景色を眺めた。

電車が加速するにつれて町並みの移り変わりも速くなる。この光景を、まるで世界がものすごい速さで回っているようだ、と思うことがある。今日は特にそうだった。移り行く人々の暮らしか外れて、電車に一人揺られる私だけが取り残されている。弟に彼女がいるなんて知らなかったなあ、と私は深いため息をついた。

弟は中学生でもう恋愛の妙味を覚えたのだ。しかも受験勉強を差し置いて恋人と花火大会に行くなどと言う。なんとけしからん。驚倒すべき事実には私は全身が震えた。

それに比べて、私の惨めさといったらない。虎視眈々と機会を待ち続け、いつの間にか成人してしまっている。成人の意味を今一度問い質したい。いったい自分は何をしていたのだろう。切なさに胸を締め付けられる。

電車のアナウンスが項垂れている私の耳朵を打った。私が降りる大学前駅まではあと二駅跨ぐ。

駅から大学へ向かい、講義を受ける。そこには必ず鮎川さんも来ている。私は自然かつ紳士的な振る舞いで彼女に声をかけ、隣の席に座

る。そして一時間半に渡って彼女と肩を並べるのだ。

完璧なシミュレーションを経て、私は失意の底から立ち直った。弟は弟、私は私だ。年齢は関係ない。今こそ長らく見失っていた輝かしい青春をこの手に取り戻す時である。

電車から降りて町中を歩き、大学の門前に立った私は学舎を見上げる。あの中にある講義室の一つで私は勝負に臨むのだ。敵陣に乗り込む武士の心境である。

いざ行かん、とフンドシを締め直したところで、私の横を通りすぎる人が目に入った。

その瞬間、私は目を向いて硬直した。

「ひょっー」

思わず口から飛び出た声は、勇猛な武士からは程遠いものであった。しかし今はそんなことに気を配る余裕などなかった。

何食わぬ顔で側を通りすぎたのは、鮎川さんだったのだ。

私がすつとんきような声を上げたことで、彼女は立ち止まってこちらに振り向いた。不思議そうに私を見つめている。

私は固まったまま何も言えなかった。講義室に入って鮎川さんを探すとばかり考えていたが、同じ講義を受けるのだからこの時間に彼女も登校してくるのは当然だと今更になつて気付いた。電車の中で練り上げた作戦が音を立てて崩れ落ち、私は間抜け面を晒してただ立ち尽くすしかなかった。

しばらくして鮎川さんは小さく首を傾げ、私に言った。

「講義に行くの？」

私は民芸品のようにカクカク頷く。こんな予定ではなかった。

「早く行きましょう」

彼女はいつもの平淡な調子でそれだけを言うと、一人で歩き出しました。芯の通ったなんとも勇ましい後ろ姿で、私よりもよっぽど武将じみた貫禄を醸している。

ハッと我に帰った私は慌てて鮎川さんを追いかけた。

心のなかで繰り返し唱える。こんな予定ではなかった。

恐ろしく退屈な講義で私が寝なかつたのは、隣に鮎川さんが居たからに他ならない。真つ直ぐな姿勢で教授の話を聞く彼女の横で居眠りするのはいくら私でも憚られた。そもそも緊張して寝るどころではなかつたし、作戦を遂行するどころでもなかつた。『ペンを落としちゃった作戦』や『分からないところを聞く作戦』などの妙案があったものの、出だしで挫けたために全ては白紙と化した。

「じゃあ、また」

講義が終わると、鮎川さんは荷物を片付けてさっさと教室を出ていった。他の生徒も疎らになった教室の隅で、私はぽつねんと取り残された。結局、何一つとして話せないで千載一遇の機会は終わりを迎えた。

私はしばらく茫然自失とした後、ヨロヨロと立ち上がった。

構内では秋に来る学園祭に備えて様々な人が作業をしていた。講義を受ける前に通りがかった時は緊張のあまり気付かなかつた。

大所帯のサークルが中庭で和気藹々と躍りの練習をしているのもあれば、廊下の片隅で一人黙々とヘンテコな張りぼてを作っている人もいる。将棋サークルの部室からは「ロン！」と高らかな声が聞こえてきた。

これらめくるめく青春の坩堝において、私だけが孤立していた。変態詐欺集団として悪名高い将棋部の連中ですらあんなに楽しそうだというのに、私のこの体たらくはどうしたことだ。恋の駆け引きどころかまともな青春すら満足に送れていないではないか。

絶望にうちひしがれた私は半ば自暴自棄となり、普段では絶対に取りたくない行動に打って出た。

電話をかけて三コール目。「やあ」と気さくな男の声があった。

「助言をください」

私は開口一番に言った。相手はそれだけで諸々の事情を察したのか、面白そうに「よろしい」と答えた。

「マーメイドに来なさい。今、すぐ側にある雀荘で一稼ぎしたところ

なんだ」

私と対照的に、野田先輩はすこぶる上機嫌であった。

○

電車で来た道を戻り、商店街の外れにある行き付けの喫茶店『マーメイド』の扉を開ける。いつも通り、怪しくも落ち着く雰囲気の流れている。

奥のテーブル席に座っていた野田先輩が、私を見つけて軽く手を上げた。私は彼の対面に座り、奥さんが持ってきたお冷やお手拭きを受け取って一息つく。悶えるほどに暑い中を移動してきたのでキンキンに冷えた氷水が身に染みだ。

「お待たせしました」

「なんの」

野田先輩はテーブルの上に広げている分厚い書物を捲りながら言う。

私が密かに野田手帳と呼んでいるそれは、私たちの大学に在籍している人間の個人情報ならばあらかた網羅しているという恐るべき本だ。私が小学生になってもしばしばおねしよをしていたことまで書いてある。手帳と言うよりは百科と呼ぶべき質を誇っており、今も改定中だというのだから呆れるばかりである。

しばらくペラペラと流し見してから「ふう」と息を吐き、野田先輩は手帳を閉じた。私は常々、あの禁忌の書物をいつか焚書しなくてはならないという使命感に駆られているが、今回ばかりは頼るしかなかった。

野田先輩も私が何を欲しているかは分かっているのだろう。向き合ってからまだ一度も「何用か」とは聞かれていない。

「君から連絡をくれたのは久々だな」

「初めてではありませんか」

「いや、春にツチノコ取りに行った時、電話をかけてきたはずだ。あれはなんでだったかな」

「先輩が一人で山の奥に入り過ぎて見失ったからです。遭難するところだったんですよ」

「そうだった、そうだった」

先輩は朗らかに笑いながらミルクコーヒーを啜った。この人には危機感というものが備わっているのかと、時々心配になる。

そんなことを話しているうちに、奥さんが私の頼んだアイスコーヒーを運んできてくれた。ここのアイスコーヒーは氷が少なく、時間が経っても過剰に薄くなる心配がない。

苦いそれを一口飲んで気持ち改める。さて、前置きもほどほどにしよう、と私は腹を括り本題に入ることにした。

「先輩」

「ん」

「その手帳を貸してもらえませんか」

恥を忍んだ私の申し出に、野田先輩は「うーん」と唸った。彼がここまで露骨に洩ることは珍しい。よほどの事がない限り何でもかんでも即決する人だから、野田手帳がいかに重要な代物であるかが分かるというものだ。

しかし私とて簡単には引き下がれない。野田先輩の手によって編纂されたあの書には、鮎川さんへんさんに関する記述もあるに違いないからだ。

清い交際、信のおける恋愛。確かに理想的なことだが、現実にならなければ只の絵空事で終わってしまう。先ほどの講義の一件で正攻法の不利を知った私は、こうして悪魔の知識に手を染める決断をした。もはや笑いたければ笑うがいい。恋と戦争は手段を選ばないと謂う。その先に栄光ある未来を獲得できるのならば、私は喜んで泥を被る所存だ。

「その上で、御指南を仰ぎたく」

情報とは武器である。それも戦争と並び称される恋という難敵に立ち向かうならば並大抵ではいけない。果物ナイフのような小道具ではなく、あらゆる障害を切り伏せる大段平おわたんびらを持つべきだろう。

好きなものや嫌いなもの。今どんな悩みを抱え、どんな希望がある

のか。そして思春期を遡り幼少期に至るまでの遍歴を知り尽くす。

そうした鮎川さんという存在の定義、定理、公式を駆使して、彼女の心の方程式を解いてみせよう。あとは万事が自ずと上手い具合に進んでいくはずだ。

ストーリーの一步手前である。いや、最早れつきとしたストーリーカーではないか。

残された良心から非難の声上がるが、私はそれに耳を貸さない。自重せよと、これまで耳を貸してきた結果がこの私の様だからだ。今や良心への信頼は地に堕ちている。

「君がこの手帳から何を知りたいのか、どういう助言を欲しているのか、だいたい想像はつく」

野田先輩は言った。いざ面と向かってそう言われると恥ずかしさが込み上げてくるが、私はそれを唾と共にぐつと飲み下した。

「実は鮎川嬢について、私も君に聞こうと思っていたことがあるんだ」「えっ、なんです、それは」

思ってもいない話の切り口に、私はつい動揺してしまった。私がこの人に連絡することは珍しいが、この人が私に質問とは尚珍しい。明日はかんかん照りの日中に雪でも降るのではないか。

野田先輩はまた手帳を開き、目次らしきページを指でなぞった。

「この手帳の風習は、私の恩師の恩師の恩師の、そのまた恩師の代から受け継がれてきた由緒正しきものだ。元は政府密命の調査書類が発端だという噂もあるが、今ではこの通り趣味の範疇に収まっている」

常軌を逸した趣味であることには敢えて触れず、私は「それで」と話を促した。

「現在、編集者として筆を取っているのは私だが、編纂には実に多くの人間が関わっている。大枚をはたいたり、危ない橋を渡って得た情報もある。対象者やその事項によって記されていることの幅はまちまちではあるが、昨年の休学期間において新入生以外の在学中の生徒は網羅したと自負している」

いつになく回りくどい言い回しにさすがの私も焦れつたくなってくる。

使用料を払えと言いたいのだろうか。いや、それだけならば野田先輩はとつくに交渉を済ませてしまっているはずだ。

「ですから、その凄いい手帳を少しの間貸して欲しいんです。なんなら今ここで見せてもらうだけでも構いません」

「いや、貸しはしない。君には無用の長物だ」

キツパリと拒否されて、私は目を白黒させた。「どうしてですか」と詰め寄ると、野田先輩は無精髭の生えた顎をじよりじより擦って言った。

それは私が初めて見た、野田先輩の悔しそうな表情だった。

「無いんだよ」

「え?」

「載っていないのだ。鮎川嬢のことについては、この私をしてさえ、何も知らん」

私は衝動的に手帳を奪い取ってその目次を洗った。野田先輩は私の蛮行を止めなかった。五十音順に見ていくと、すぐ上の方に鮎川という名字を持つ人の名前が幾つか並んでいた。目次で指定されているページを開く。

呆れるほど長い項目を右上から順に繰り返し確認する。何度も確認して、野田先輩の言うことが本当だと分かった。

手帳には『鮎川・女性』とあるばかりで、他の一切が記されていない。下の名前すら載っていない。他にも鮎川という名字の人はいるが、私の求める鮎川さんについては何一つ、有意義なことが書かれていない。

先の話から考えるに、手を尽くして調べはしたのでだろう。何代にも渡って築き上げた諜報技術を駆使したのでだろう。それでも鮎川さんの素性は何一つ分からなかったのだ。住所も、学部も、年齢さえも。

憧れしかなかった鮎川さんへのイメージに、突如として暗雲が立ち込めたような錯覚をおぼえた。よく見る夢の中で、幼い私を助けてくれる彼女の微笑が脳裏を掠める。

あの時彼女は、どんな姿をしていた?

「彼女は何者なのだろうね」

未知に遭遇した探検家のように、興味津々といった様子で野田先輩が言う。対して、私は何も答えることが出来ない。

店内に流れるジャズの音がやけに遠くに聞こえる。窓からは夏の強い日差しが注いでいる。小さくなったアイスコーヒーの氷が、グラスの中でカランと冷たい音を立てた。

○

続く

三章 中編

気付けばコーヒーの飲み過ぎで胸焼けしていた。いつの間にか路地裏には斜陽がさし、ほんのりと茜色に染まっている。

喫茶マーメイドで野田先輩と話し合っているうちに、夕暮れ時になってしまったようだ。緊張と興奮が続き、喉が乾く度にコーヒーをおかわりした。逆さにして机に置かれている伝票を表に返してみると、目を背けたくなる数字の羅列があった。私はそつと伝票を伏せた。

それだけの時間話しあっても、結局、鮎川さんという女性が何者なのかという問いに答えは出なかった。

年齢、住所、学歴など個人情報的一切が不明で『鮎川』という名前すら本名か分からない。それらの情報は野田先輩が事前に調べていたものだった。

「しかし迂闊だったな。ここ最近まで彼女について何も気にしていなかったなんて」

野田先輩が言うには速水からの依頼、私も巻き込まれた肝試し騒動の一件によつて、初めて鮎川さんの存在に注目したという。

飽き性の先輩が唯一長年に渡って続けているのが人間観察であり、それを元に例の名簿を作成することだ。だというのに鮎川さんのことを今まで忘れていたのだから、彼の悔やしきは押し知るべしである。

私も鮎川さんについて知り得ることを野田先輩に教えた。学内やサークルにおける彼女の言動を思い起こし、新入生の頃から何かと目が合っていたことや風鈴を貰った経緯を語り、尋常ではない大食いだったりコーヒーがあまり得意でないことなど、どんなに些細なことでも話して聞かせた。

普段であればこうした思い出はひっそりと胸の内にはしまっておくものだが、予断を許さない事態なので四の五の言っではいられない。

私が話した内容は意外にも野田先輩を驚かせた。どれも彼の知ら

ないことだったらしく、熱心にメモまで取っていた。

「不思議だなあ」

「何がです」

「話を聞く限り、どうも彼女は君に特別な関心があるようだ」

私は絶句した後、自分の頬が熱くなるのを感じた。慌てて否定しそうになり、口をつぐむ。余計な話を挟んで本題から脱線させたくはなかった。

「心当たりはないかな。昔、彼女と何かあったとか」

「それは……………」

一瞬、件の夢のことが頭をよぎる。川で溺れた幼い私を、人魚の姿をした鮎川さんが助ける夢だ。まるで運命だとても言わんばかりに、最近はその夢ばかりを見る。馬鹿馬鹿しいことこの上ないが、鮎川さんが身元不明だと知った現状では「もしかすると」と思ってしまう自分がいる。

しかし、このことばかりは誰かに言うつもりは無い。もちろん野田先輩にも。荒唐無稽な妄想を浮かべることにかけては卓越した能力を誇る私であっても、信じてもらえない内容ではないと弁えている。

私が言葉に詰まったのをどう捉えたのか、野田先輩はとくに言及もせず、何本目かになる煙草に火を点けた。彼は自分で煙草の葉を何種類か混ぜて、紙で巻くのを好む。混ぜてから数日寝かせると良い塩梅になるという。

風来坊じみた彼がそうしているとマーメイドの雰囲気と相まって異国情緒が漂い、怪しい煙を吸っているようにも見えてしまう。

「吸いすぎではありませんか」

「気にするな。コストリカ産のオーガニックの葉っぱだ。化学物質のなんちやらを混ぜ込んだそこいらの既製品よりずっと良いし、何より美味しい」

「ふうん」

「君もたまに吸うだろう。嗜好品は良いものを選ぶべきだよ」

細めに巻いた煙草を実にうまさうに味わってから「さて」と先輩は話を続けた。

「鮎川嬢の交遊関係は皆無と言っていい。これまでに取材した人たちは誰も、彼女の人のなりを具体的に話せなかった。大学に入学する以前の知り合いすらいないという状況だ」

「ボランティアサークルの全員にも掛け合っただんですか」

「無論だ。君の他では速水君くらいだな、彼女に関心を持ったのは」「ちよつと待ってください」

野田先輩の言い回しに違和感を覚えて、私は話を遮った。

「関心がないって………鮎川さんが他の人に対して、ということですよね？」

野田先輩が「いいや」と首を横に振る。

「それも間違いではないが。私の言った通りだよ。鮎川嬢がそうであるように、他の人も彼女には無関心でいるようだった」

「そんなはずはありません」

「ふむ、どうしてかな」

「鮎川さんと話したがる人がたくさんいたからですよ。そりやあ自分から輪に入ることはなかったかもしれないけど、周りからは話しかけられていましたし」

「君と違って?」

「ぐつ、お、俺と違ってです」

野田先輩のストレートな言葉に傷つきながら泣く泣く肯定する。私の孤独は寄る辺のない寂しいものだが、鮎川さんのそれは己の生き方を貫いている故のものである。その違いは雲泥の差と言える。

もちろん他人からの評価もガラリと変わるものだ。路傍の石同然となり果てていた私を尻目に、鮎川さんは部員たちの畏敬の念を一身に集めているようだった。毅然とした態度というのは人を惹き付けるもので、鮎川さんはその美貌も相まって近寄りがたくも人気のある、まさしく高嶺の花と呼ぶにふさわしい存在だった。速水などが告白して無惨に散ったのもやむ無しである。

私の意見を受けて、野田先輩は「そうかそうか」と頷いた。そのくらいのことでは先刻承知、と言うような態度だった。

「しかし私が見聞きしたこととはだいぶんズレがあるようだね」

「どういうことですか？」

「先日、ボランティアサークルにいる君の同期に鮎川という人について聞きたい、と訪ねてみたよ。そしたらどうだ。彼はしばらくポカんとした後『ああ、確かうちに居ますね、その人』などと言った」

野田先輩の声真似が誰のものであるかは分からなかったが、実に素っ気ない口調であったことは伝わった。ほとんど名前も知らない、赤の他人について語るような。

「同級生が、ですか」

「そうだ。他の誰に聞いても同じような反応だった。私が尋ねるまで、鮎川嬢のことを綺麗さっぱり忘れていたようにね」

野田先輩は煙の輪っかを吐いた。「まるで妖術だな」

異常な話に、私は唾を飲み込んだ。

鮎川さんは決して幽霊部員ではない。むしろゴミ拾いを始めとした環境整備への積極性は目覚ましく、その献身ぶりは他の部員たちも一目置いていたはずである。私には終始配られることのなかった差し入れのジュースやお菓子も、彼女にはいの一番に渡されていた。

それがどうしたことだろう。鮎川さんの居ないところでは、皆が彼女のことを忘れていくというのだ。

野田先輩は「やや作為的に思える」と言う。

作為的とは、誰のことを指しているのか。もちろん鮎川さんだろう。しかし鮎川さんが人目を避ける理由などあるのだろうか。あったとして、そんなあからさまに他人の認識を操る術があるものなのか。

私は不意に、すぐその商店街で鮎川さんから風鈴を貰った時のことを思い出した。ほんの少し目を離れた瞬間に、彼女は幻のごとく立ち消えた。あの時は深く考えなかったが、今にして思うと繋がるものがあるのでは。いや、しかし……………。

「まあ、それはさておき」

パンツと手を叩く音で、思考に没頭しかけた私は顔を上げた。目の前には相変わらず、ニコニコと笑う野田先輩がいる。

「……最近、君たち二人に何かと接点があるのは紛れもない事実だ。

君が他の人と違い、鮎川嬢への興味を失っていないというのも気になるところではある」

「それで、俺に鮎川さんのことを調べろと?」

「依頼の形をとる必要もないだろう。我々の利害は一致している。協力し合おう」

私は押し黙った。野田先輩と違って興味本意だけではないからだ。今後、どうやって鮎川さんと関わっていくのが正解なのか。その答えが途方もない闇の中に隠れてしまったような気がする。

野田先輩は私の返事を待たずに言った。

「ところで君、次の週末は空いているかな」

「え、週末というと……」

「河川敷の花火大会の日だよ」

私の住む街には県境に大きな川が流れていて、毎年の夏に花火大会が催される。今朝がた弟も彼女と一緒に行くとか言っていた。

夜になると川に小船が何艘も浮かび、そこから花火が打ち上がる。暗い空に色とりどりの花火が連綿と咲き誇る光景はなかなかの見物で、その日の河川敷や橋の上は大変混雑する。

道路の一部は閉鎖されて車の代わりに人間がごった返し、朝方の満員電車のような様相を呈する。川沿いに立ち並ぶ露天で意気揚々とりんご飴や綿菓子を買っても、人の服に糖分を擦り付けるだけとなり、たこ焼きは地面に転がって誰のものかも分からぬ下駄に踏みつけられてしまう。

全ては苦い過去の記憶だ。故に私は花火大会なんぞには決して近づかない。別に一緒に行く人がいないからではない。

無論、長期休暇を欲望のままに貪る腐れ大学生に他の予定があるはずもない。「空いていますか」と私は誇りをもって答える。すると野田先輩は「よし」と言っ、一枚のチラシを懐から取り出し机に広げた。

「当日の夜、有志の集いによる大食い大会が行われる。祭り会場の北端だ」

チラシを手にとって眺める。いかにも素人の手作りくさいそれに

書かれていることを要約すると、どうやら賭け事の類いらしい。大食い自慢の知り合いを選手に立てて一攫千金を狙うというわけだ。

よく見るとスポンサーの一つに我が校の将棋サークルの名前がある。悪事珍事の枚挙に暇のないあの団体が噛んでいるとあれば、荒れることは火を見るより明らかである。

「鮎川嬢を誘って、ここへ来なさい」

「へ？」

私は豆鉄砲を喰らった鳩のように目を丸くした。寝耳に水である。いくらなんでも話が飛躍しすぎてついていけない。

「彼女がまさか健啖家だとは知らなんだ。しかも噂に聞くこの店のナポリタンを苦もなく完食するとは、いや素晴らしいな。是非とも参加してほしい」

「いや、いやいや。なぜ私が鮎川さんを誘わなければならんですか」
「君が一番、鮎川嬢と関わりがあるんだ。スカウトマンとしてはこれ以上ない適任だろう」

「しかし、しかし」

すぐさま否定できない私に、野田先輩は畳み掛けた。

「無名で、しかも可憐な女性が優勝したとなれば大穴だ。会場は興奮に沸き返るぞ」

それは阿鼻叫喚と呼ぶのではないかと思いつつ、確かに鮎川さんならば勝てるかもしれないと妙な期待が湧く。

問題は、私たちが鮎川さんの連絡先や住所を知らないことだ。当日までに上手いこと彼女に出会い、勧誘する必要がある。それを一任されるのだと思うと気が重いところだ。

そう考えていると、野田先輩は「そうそう」と言っただけでまた懐から紙切れを取り出した。彼は懐はファイルにでもなっているのだろうか。

「ここに鮎川嬢の電話番号が書いてある」

「は？」

今度こそ、私の思考は停止した。続いて様々な疑問が津波のごとく押し寄せたが、それらは入り乱れすぎて何を口にすべきか分からず、私は「あうあう」と言った。端から見て実に情けない姿であったら

う。

「何故そんなことを知っているのか疑問だろう」

私がかくかくと頷く。

「まあそこは企業秘密というやつだ。君が私の高弟となり、ゆくゆくは跡を継ぐというのなら教えるに吝かではないがね」

今度は首を横に振ると、先輩は「残念だなあ」と全く残念じやなさそうに笑う。

野田先輩がわざとらしく掲げている紙切れを、私はまじまじと見つめる。鮎川さんの電話番号が記されているというだけで、少しシワの寄った薄汚い紙片が宝石のように輝いて見える。むしろ宝石が霞むまでである。つまりは欲しくて堪らなかった。

半ば無意識に手を伸ばすと、ひよいと紙切れを遠ざけられる。野田先輩に「こちら」と言われてようやく我に帰る。私は自分の行動にびっくりした。恋は盲目という言葉が身に染みた瞬間だった。

「な、何故、それがあることを先に言わなかったのです」

私が聞くと、野田先輩は「それも企業秘密だ」と言った。ひよつとしたら彼は企業秘密という言葉を使いたいだけなのかもしれない。

「交換条件だ。君は彼女の電話番号を得る代わりに、私の頼みをしっかりと果たす」

「わかりました！」

「よしよし」

即答であった。釈迦が垂らす蜘蛛糸のごとき好機に、私は否応なく飛びついた。まさに垂涎の逸品。実際に口にはいっぱいに涎が湧いており、鼻息も荒く、どこからどう見ても変態である。

しかしこの時の私に自分を客観視する余裕など欠片もなかった。鮎川さんの電話番号を手に入れた興奮にのぼせ上がり、飛躍的妄想を次々に浮かべるばかりであった。

電話で約束を交わした我々は、当日の夕暮れ時に駅前待ち合わせをする。私が約束の三十分前という模範的な時間にやって来ると、その反対方向から浴衣姿の鮎川さんも歩いて来るのだ。しっかりとした着付けをして、長い髪は綺麗な簪で結わえ、白い肌には薄く頬紅を

さしている。その気合いの入れようから、彼女がどれだけ私と祭りに行くことを楽しみにしていたかが分かる。私は自然な態度で彼女の浴衣姿を誉めた後、「それじゃあ行こうか」と手を握る。我々は屋台の立ち並ぶ川沿いを練り歩き、的屋で遊び呆け、ラムネを飲みつつ欄干に寄りかかって花火を見上げるのだ。花火の光に照らされる鮎川さんの横顔はとても美しいだろう。額に滲む汗すら清らかに見えるはずだ。私が彼女に見惚れていると、不意に鮎川さんはこちらを向き、今までに見たことがないほど柔和な笑顔を浮かべるのである。

ここまで完璧な構図を思い描いて、野田先輩との約束を入れ忘れていたことに気付いた。

どうということはない。目前にある人生初のデートと比べれば些事である。あわよくば素知らぬふりをしてすっぱかそうかという、我ながら悪どい考えが閃いた。いやむしろ鮎川さんのための思えばこそ、そうするべきではないか。彼女がいかに健談家とはいえ、金を賭けられむさ苦しい男共の群れに混じって大食いを披露するのは嫌がるはずだ。私には紳士として、彼女を守る義務があるのではないか。そんなあれこれを黙考していると、先輩はおもむろに煙草の火を消し、窓の方を向いて呟いた。

「やあ、もう夜になるな」

野田先輩につられて、暗くなり始めた路地裏を見る。すっかり長居してしまった。

「そろそろ出ますか」

席を立てて会計をしに行こうとすると、野田先輩がさつさと私の分も払ってしまった。そういえば電話口で「麻雀に勝った」などと言っていたなあと思いつく。ついコーヒーを飲み過ぎてしまい、私には非常に厳しい金額が積み重なっていたので、とてもありがたい。

感謝を述べると、野田先輩は私の方を向き、にんまりと笑った。

「おかわり分はツケておく。鮎川嬢の件、よろしく頼むよ」
間抜けにも私の口がぽかんと開く。

どうやら、引くに引けなくなってしまったようであった。

野田先輩は電車で帰るといふことで、最寄りの駅まで私もお供した。暑いことに変わりはないが、日光がなくなつた分いくらか楽である。道路沿いに植えられた並木からは蝉時雨が響いている。

歩きつつ蝉の性生活論議に花を咲かせていると、すぐに駅のロータリーが見えてきた。駅舎へと続く階段を上がる前に、野田先輩が「ここまでで十分だよ」と言った。

「先輩」

「なんだね」

私は一拍置いて、静かに深呼吸をした。

「もしもですよ。鮎川さんがその、人間ではなかったら、どうしますか」

野田先輩は目をぱちくりとさせた後、ハハハッと何々大笑した。

やはり阿保だと思われたか、と口にしたことを後悔しかけたところ、先輩は私の肩をぽんぽんと叩いた。

「どうもせんさ。安心しなさい」

「そう、ですか」

「仮にそうだったとして、肝心なのは君が彼女とどう関わるかだ。自分の問題だ。慎重かつ楽天的に、よく考えておくと良い」

「矛盾してませんか、それは」

「矛盾も良いじゃないか。まあ、なるようになるさ。私の見立てではそう悪い方には転ぶまい。それに君はやるべき時にはやる男だからな」

彼の言っている意味の半分はよく分からなかったが、激励をもらったのだろうと思うことにした。適当なことを思いつくがままに述べている可能性が高いけれども。

野田先輩は券売機で切符を買い、改札をくぐつた。電子マネーが普及しつつある今日この頃であるが、彼は切符を通す方が好きだと言って頑なにアナログにこだわっている。

野田先輩を見送り駅を出た私は、あてもなくぶらぶらと歩いた。今

日話したことが頭のなかを駆け巡り、どうも落ち着かない気分だった。このまま家に戻る気にはなれず、さりとて何処かへ行こうというわけでもないので浮浪者のごとく町を練り歩く。

しばらくそうしていると、見慣れた商店街の入り口に戻ってきてしまった。頭を使わずとも、体は慣れ親しんだ道を覚えているものである。

この時間ともなると雑貨屋などは大抵シャッターを降ろしてしまっていて、やや閑散とする。代わりに飯処や居酒屋の看板には灯りが点き、仕事帰りのサラリーマンや小さな子ども連れの家族などが各々店に入っていく様子が見られる。

通りに漂う良い匂いを嗅ぐと、私のお腹もきゆうと鳴るので、どこか手頃な店に入ろうかと考える。先ほどの浮いたコーヒー代で牛丼やラーメンくらい食べても良いだろう。

匂いにつられてあっちへフラフラ、こっちへフラフラ。ただの浮浪者から飢餓状態の浮浪者へ昇格といったところだ。

そうして商店街をうろついていると、通りかかった路地裏から怒鳴り声が聞こえてきた。「ふぎけんな」とか「金を返せ」などと穏やかではない。

すぐ側にはゲームセンターがある。今も私の目の前でやたら大きな音を立ててピカピカと光を放ち、大きなガラス張りの向こうではゲームに興じる人たちの姿が見える。路地裏の連中もおそらくゲームセンターで遊んでいて、どちらかが不正をしたか負けが込んだかで喧嘩になったのだろう。

「土下座しろー！」

巷で喧嘩など滅多にない。耐性のない私はすっかり怯えて、足早に路地裏の前を通り過ぎようとした。相手に気取られないための技術においては格別の自信がある。私は以前、その技術を駆使してサークル内で空気と同化していたのだから。おかげで名前すら覚えてもらえなかったほどだ。

しかし私は、はたと足を止めてしまった。それどころか路地裏の方を凝視してしまう。言い争っている声の一つに聞き覚えがあった。

私がかつて所属していたボランティアサークルの後輩であり、最近になって因縁ができてしまった男。

速水が胸ぐらを掴まれてひっ叩かれていた。

○

私と速水は赤の他人と呼んで差し支えない。一時期ボランティアサークルで一緒だったとはいえ、住む世界が違いまともに話したことなど皆無である。

しかし、以前あつた肝試しの一件で私にとって速水はある意味、野田先輩よりも関わりたくない人物となっている。

速水と鮎川さんを二人きりにさせる作戦のはずが、私と鮎川さんで月見をするという構図に差し替えられてしまったのは今思い返しても不思議でならない。自分で差し替えておいて言うのもなんだが。

あれから私は、いつ速水に報復されるものと戦々恐々とした日々を密かに過ごしてきた。速水には鮎川さんとは別の恋人が出来たと聞いていたし、野田先輩も大丈夫だと言っていたが、人の恋路を邪魔した業の深さに私はすっかり怯えていたわけだ。

速水を助けるべきか、そうでないか。答えは明白である。

路地裏には速水の他に三人の男と、一人の女がいる。女は噂に聞く速水の恋人だった。彼女もボランティアサークルに所属しているらしいが、幽霊部員だった私は顔もほとんど覚えていない。確か飯島という名前だったと思うがどうだろう。

今にも速水をリンチしようとしている三人は半袖やタンクトップから見える上腕が逞しく、反対に速水は細っこい。あれでは喧嘩にならないだろう。彼女の飯島さんもすっかり萎縮してしまいオロオロとしている。

これに私が突貫したところでどうにもならない。三本の矢という有名な逸話があるが、私と速水がまとまったところで瞬く間にポキンポキンと折られるに違いない。

私は多少の罪悪感を振り捨てて、見なかつたふり決め込むことにし

た。さらば速水。たぶん彼女の前で格好つけて不良相手に大見得をきつてしまったのだろう。

そう思い、顔を背けようとしたところで、速水の彼女である飯島さんと目があつた。彼女は私に気付くと、地獄にもたらされた蜘蛛の糸を見つけたような顔をした。大きく開かれた瞳が「何がなんでも助けて」と強制的なまでの気迫を放っている。

ここに天秤は傾いた。もしもこの状況で見捨てれば、翌日には私の悪評が大学構内を駆け巡ることだろう。生協新聞に「情の欠片もない畜生現る」と見出しを書かれ、ついに私に声をかける者は皆無となり、その噂は尾ひれはひれを付けてご近所でも囁かれること請け合ひである。つまり人生の終わりである。

もう引き返せなくなつたことに、心のなかで悔恨の涙を流す。折角なら肝試しの件をこれでチャラにして欲しいなあ、と切に願う。

私は携帯電話を取り出し、110と番号を押した。息をすうっと大きく吸い込む。

「もしもし警察ですか。今、目の前で喧嘩が起きてまして」

私の大声に、速水や不良っぽい三人が私の方を向いた。警察へ状況や場所を伝えるうちに、向こうが勝手に慌て始める。胸ぐらを離された速水はよろよろとバランスを崩して尻餅を着く。

不良たちは私をとちめようか、この場から逃げようか意見が割れているようである。どうか後者に傾いてください、と祈りつつ「私も襲われてしまう！」と警察に助けを求める。

アーケード通りの真ん中で110番をかけて喚き散らす男はたいへん目立つ。近くにいた通行人がなんだなんだと野次馬で集まってくる。

それでようやく不利を察したのか、不良三人は路地裏の向こう側へと走り去っていった。無頼漢どもを一掃できる法律の強力さに、私は深く感動した。法学部に入っておけば良かったかな、などと叶わぬ妄想か過る。

「だ、大丈夫？」

側に寄って二人を訪ねると、飯島さんが「ありがとうございます」と

頭を下げてきた。速水は未だに呆けていて「おお、うっす」などと曖昧な返事をする。

すぐに警察が駆け付けて、飯島さんが事情を説明した。速水が殴られてはいるが、事件にはしないとのことと話はついた。最後に、私は「あまり大声で場を混乱させないように」とお叱りを受けた。理不尽である。

「あの、本当にありがとうございます」
「あざっした」

警察が立ち去り、興味を失った野次馬もいなくなったところで、二人に改めて礼を言われた。前者が飯島さんで、後者が速水である。見た目はどちらもチャラチャラとしているのにこの違いはなんだろう。

「何かお礼をしたいんですけど」
「いやそんな、俺は何も」

彼女の意外すぎる殊勝な態度に私の方が恐縮してしまう。どちらが助けた側なのか、私がペコペコと頭を下げていると、腹がグウと鳴った。

「あ、腹減ってんだセンパイ」
速水が言った。

「じゃあさ、ラーメンでも食いに行くか」
私はその提案に慄いた。デートの最中にも関わらず夕食に第三者を招き、あまつさえ酷暑の夏にラーメン屋を指定するとは。しかも不良と喧嘩して情けなくもしこたま殴られた後である。

これは百年の恋も冷めよう。助けたにも関わらず今ここで一組のカップルが別れるのかと切なく思っていると、飯島さんは「そうしよっか」と言った。二つ返事であった。

「お礼に奢らせてください。あ、ラーメンで大丈夫ですか」
「へ、ああ、はい」

私の口から間拔けな返事が漏れた。

○

人生とは数奇なものだ。昨日まで友と呼べる人間はおらず、野田先輩なる変人に絡まれるのが関の山だった私が、順風満帆なキャンパスライフを送っている後輩たちとラーメン屋の席を同じくしているのだから。

私たちが入った店はこの商店街に古くからあり、私もよく世話になっていて中華料理屋だった。醤油ラーメンが一杯四百円と格別に安く、摩訶不思議なほど美味しいチャーシューに店主のこだわりが見える。

テーブル席の空きがなかったので、私たち三人はカウンターに並んで座った。遠慮なしに奢られるのも座りが悪いので私が最安値の醤油ラーメンを頼むと、飯島さんは「他に頼むものはないか」と言ってきた。怒濤の勢いに任せて餃子とビールを注文させられる。酒が苦手とも言えず、私はジョッキを傾けた。

速水が豚骨ラーメンを啜る傍らで、彼女は大盛り炒飯と唐揚げとチャーシュー麺をがつがつ食べている。しかも全て大盛りである。女性にラーメン屋は大丈夫なのかと不安に思っていた私は圧倒された。鮎川さんといい、世の女性はこういうものなのかと思わずにはいられない。

「はーくんはさ、もつと落ち着かなきゃね」

窘められた速水が「うるさいなあ」と居心地悪そうにする。

「聞いてくださいよ。はーくん……あ、速水君ったらね、そのゲーゼンのアクションゲームでさっきの人たちに嫌らしい戦い方して」

「アクションじゃなくて格闘ゲーム。格ゲー」

速水が横から指摘をするが、彼女に「はいはい」と流される。

「それで相手が怒っちゃって。こっちもこっちで雑魚だのなんだの煽るから喧嘩になっちゃったんですよ。なんであんな言い争いになったのかね。普段のはーくん、そんな感じじゃないのに」

「もういいだろ、済んだ話なんだから」

「なに拗ねてんの。私のこと庇ってくれたし、最後は格好良かったじゃん。負けちゃったけど」

「負けてねえ」

私を置いてきぼりにして二人の世界が展開され始める。恐ろしいことである。その目映いばかりの景色に、私は太陽を恐れる吸血鬼のように縮こまるしかない。

やがて大量の食事をみごとに平らげた飯島さんは、トイレに行くと言つて席を立った。私と速水はまだ一杯のラーメンをあくせく食べているというのに、なんたる早業だろう。

しかし困ったことになった。

速水と共に残された私は、黙々と汁に沈んだ麺を掬い出す作業に勤しむ。とにかくそうしてないと気まずくて仕方がない。彼女の前でこそ話題に上らなかつたが、私と速水には鮎川さんを巡る因縁がある。不良から助けたことでチャラにならないだろうかと願いつつ、飯島さんが早く戻つて来ることを祈るしかない。

チラリと横目で見ると、速水は何食わぬ顔で汁の残りを飲み干している。彼は気まずくないのだろうか。それとも本当に恋人が出来たことで過去の一切は気にしなくなったのか。しかし曲がりなりにも恋の邪魔者が隣にいるのだ。思うところがなくてはおかしいではないか。

しばらく待っても飯島さんは戻ってくる気配がない。女性は長いよなあ、と当たり前の考えに至つたが、腕時計を見ると先程から一分ほどしか経っていなかった。気まずさのせいで時間の感覚が狂っている。

「なあ、速水」

「何すか」

人間、ストレスが極限にまで達すると何をするか分からないものがある。

この場合の私は、自ら話を振るといふ行動に出た。このまま針の筵むしろに座り苛まれるくらいなら、いつそ全てを清算してしまおうと考えた次第だ。すなわち暴挙である。

「この前の、肝試しのこと。気にしてないのか」

「肝試し？」

何のことか分からない、と言いたげな速水の顔。

覚えていないのか。いやそんなはずはない。

「鮎川さんのことだよ。ほら、お前が告白しようとした」

私は妙な焦燥感に駆られて、思わず直接的なことを言ってしまった。

それでも速水はピンと来ていない様子だった。どころか「鮎川？」とまるで知らない人のように呟く。こいつは私をからかっているのかとも思ったが、見ると至って真面目な顔をしている。嘘をついているようには見えない。私は戦慄した。

「本当に覚えていないのか。二週間前にサークルの打ち上げがあっただろう。そこでお前、野田先輩に依頼したんじゃないのか」

「あー、そっか。あれか」

私がそこまで追及してようやく、速水は思い出したらしかった。

しかしどうも緊張感に欠ける。あの夜のこととは私の中では大事件として記憶されているが、速水は違うというのか。よしんば新しい恋人が出来て浮かれているとしても、ここまで無関心になれるとは思えない。

頭を過るのは、さきほどのマーメイドのことだ。「まるで妖術だな」という野田先輩の言葉が鮮明に思い出され、それに驚くほどの現実味を感じた。

「あれ、確かに好きだったんだけど……………」

速水が何か言おうとした時、飯島さんがお手洗いから戻ってきた。やっぱり長かったなあと思ったが、どうやら化粧を直してきたらしかった。汗をかいたせいで崩れてしまったのだろう。

私たちが話していたのが見えていたようで彼女は「何々、なんの話」とやけに嬉しそうに聞いてきた。

「二人でなに話してたの」

「何でもねえよ」

「えー、なんで隠すん。ひよつとしてアレな話だった？十八歳未満はダメみたいなの」

「バカ、違えよ」

彼女の前で速水は防戦一方である。二人のやり取りには付き合い

始めの初々しさがなく熟年感すら漂っており、机上と妄想でしか恋を知らぬ私を混乱させた。そんな私をしてさえ、彼女の尻に敷かれる速水の将来が透けて見えるようであった。昨今の男女のはこのようなものなのだろうか。

速水がなかなか頑固なので、飯島さんは私に話を振ってきた。

「そんな隠すようなこと？」

「いや、ただの世間話だよ。花火大会には行くのかとか」

流石に他の女の子の話をしていたとは言わない。私が思い付くままに答えたものだから、速水の目が少し泳いでいた。

「もちろん二人で行きますよ。ね、はーくん」

「お、おう」

もちろんと来たものだ。

自覚したくもない嫉妬と羨望の炎がメラメラと燃える。恋人と夏祭りに行くなど、私が中学生の頃から夢想しつくし、遂には夢想するだけで終わったシチュエーションではないか。弟も速水たちも何故そう易々と叶えることができるのか。

私が一人で勝手に落ち込んでいると、飯島さんは「先輩も行くんですか」と聞いてきた。私は虚勢にも胸を張って「もちろん」と答える。

「俺は夏を謳歌するよ」

「なら先輩も私たちと一緒に来ませんか」

「え、どうして」

私はひどく動揺した。

恩返しでラーメンを奢るのはまだ良しとしても、夏祭りのデートに誘うというのはどう考えてもおかしい。それはもう恋愛観の相違ではなく破壊である。恋人がいるなら恋人と過ごすべきだろうと私は断言したい。そこだけは譲れない。

一方で、いや待てよ、と思う。ひよつとしたら飯島さんは私に気があるのではないか。さきほど路地裏で助けたことによつて速水から私に気が移り、このように声をかけたとも考えられる。

そうなると大変である。なにせアプローチが大胆すぎる。まさか彼氏のいる前で男を夏祭りに誘い、彼氏のいる前で逢瀬をしようと言

うのだから風紀紊乱にもほどがある。肝試しの件こそ有耶無耶になつたものの、今度こそ速水の私に対する憎悪は沸点を越えて爆発するはずだ。

片想いの相手を奪い、交際の相手さえかつ拐つていく。これでは私がまるで女たらしのアンチクショウではないか。

そうならないよう自戒してきた修行の日々はなんだったのか。もはやモテ期到来と言って喜んでいる場合ではない。このような人生の危機に対処する術を身に付けていない私は誰かに頼るしかない。やはり野田先輩に助けを求めろか。

「ああ、大食い大会か」

「そうそう」

妄想を飛躍させた挙げ句の果てに他力本願の極みへと足を踏み入れたが、速水の言葉で我に帰った。

「大食い大会？」

飯島さんが「はい」と元気よく答える。

「花火大会の日、街の端つこで大食い大会をやるんですって。私たちに参加しようかって話していて」

「それはひよつとして、お金を賭ける…？」

「あ、知ってたんですね」

私はほつと胸をなでおろした。彼らは大会を観戦しに来たらどうか、と言っているのだ。我ながら馬鹿なことを考えていたものである。

速水が参加したところで強豪相手に太刀打ちできそうにないが、そこは賑やかしに徹するのも一興であろう。私と飯島さんも声援くらいはかけてやれる。

それならばお安いご用、と言いかけたところで、しかし私は鮎川さんも応援しなければならぬのだと思ひ出した。鮎川さんと速水、どちらを応援するべきかと問うならば迷う必要はない。即決である。誘ってもらった手前、誠に遺憾ながら私は速水たちとは敵対せざるを得ないのだった。

私が断りを入れると、さして残念がられもせず「用事があるなら仕

方ない」とそれで話は終わった。人生そんなもんである。

「ところで勝算はあるのか」

速水が食べ終えた並盛り用のラーメン丼を見ながら心配すると、速水に「違う違う」と言われる。

「やるのは俺じゃなくて、こつち」

親指でくいくい、と彼女の方を指す。私が見つめると飯島さんは「私食べる量多くて……」と照れ臭そうにする。彼女はそう言いながら五目焼きそばを追加注文した。しばらくして運ばれてきた料理を受け取って嬉しそうに頬張る彼女を、私は呆然と見つめる。あれだけ食べてまだ足りなかったというのか。

「お前ほんとよく食うよな」

速水が呆れるも飯島さんは「いいのいいの」と軽く流しつつ麺をばくばく食べ進める。

まさか鮎川さんの対抗馬がこんなところにいたとは。世の中の狭さと、人の縁の奇妙さを感じずにはいられない。

結局、飯島さんは苦もなくあつという間に焼きそばを平らげてしまった。麺の一本も残すことなく空になった器の底には、魚が水面から跳ねるような形で描かれている。

「また来よつか」と飯島さんはまだまだ余裕そうな表情だった。速水がこちらを向いて苦笑した。私もつられて笑った。

○

速水たちと店の軒先で別れた後、家路に着いた。夜のアーケード街はムツとした湿っぽい暑さに覆われている。

飲食店でも早いところはすでにシャッターを降ろしていて、通りを歩く客も疎らである。宴会でもやっているのか、何軒か向こうにある居酒屋からは楽しそうな笑い声がする。そうした飲み屋の連なる場所から遠ざかっていくごとに、通りからは人気が無くなる。鮎川さんに風鈴を買ってもらった店の前を通りすぎ、マーメイドのある裏路地を横切ってアーケード街を出る。

癖でズボンのポケットに手をつ突っ込むと、指先に何か触れた。鮎川さんの電話番号が記された紙切れだった。汗で数字が滲みかけてしまっていて、私は慌てて携帯の電話帳に番号を登録した。

液晶パネルにはいくつかの連絡先が映されている。見るからに少なく、私は電話帳の画面を開くたびにがっかりする。なにせ家族と野田先輩くらいしか名前がない。言わずもがな、野田先輩の名前が一番私の精神を抉る。サークルでさえ空気同然だった無味乾燥な青春の集大成がここに形作られているようであった。なんたる不毛だろうか。

しかし今は違う。砂漠に匹敵する荒涼とした私の電話帳には、今や鮎川さんの電話番号が燦然と輝いている。それはまるで長い旅の末に見つけたオアシスのようだった。

この番号にかければ鮎川さんが電話に出る。そう思うだけで体が妙に固くなり、心臓が石炭をくべた蒸気機関のように熱を上げる。

夏のものとはまた違った暑さを感じて、私は居ても立ってもいられなくなり走り出した。へなちよこなフォームで夜の町中を駆ける私は、さぞおぞましい変質者に見えたことだろう。または妖怪の類いか。人とすれ違わなかったのが幸いである。

青春とはかくも若人を翻弄するものである。まるで免疫のない私もまた、言い様のない気持ちに急かされて遮二無二ひた走った。

○

読者諸兄、その後私が鮎川さんに電話をかけたと思っておられるなら、それは間違いである。

私は鮎川さんに電話をかけなかった。速水たちとラーメンを食べた日の夜も、その次の日も、そのまた次の日も。ついに花火大会が明日に迫ったが、私は一向に鮎川さんへ連絡をとろうとしなかった。

より正確に言うならば、出来なかったのである。

しようしようとは思っているのだが私は携帯電話と睨み合うばかりでまんじりとも動けずにいる。鮎川さんの連絡先を開いては閉じ

るという意味不明な行動を繰り返し、ため息をつきながら部屋をごろごろと這い回っていたらいつの間にか夜になってしまふ。眠れないのでそのまま朝になることもあった。そうして限りある時間を空費し、祭り前日まで来てしまったのである。

この体たらくを見れば、野田先輩をしても「君は底抜けの阿呆だな」と言われるに違いない。私だってそう思う。しかしこれがどうにもならない。電話をかけねばという意思に反して私の手は意味もなく液晶画面を弄るばかりで、通話ボタンを押すだけの簡単な操作がままならないでいる。

人間とは目の前に成すべきことを突き付けられると目を反らすもので、特に私の場合は顕著だった。ネットニュースを読み漁ったり、弾けもしないギターを弄ったり、思い立ったように筋トレを試みてすぐに止めたり、平素では考えられないことだが自ら文机に向かってレポートを仕上げたりした。

しかしこうした有益に見える行動をとってみても、充実感を得るところか焦りが増すばかりであった。なぜ学生の本分を果たしているのに焦燥に駆られなければならぬのか。私はその気持ちから逃げるように、これでもかと勉学に取り組んだ。すると遂に、到底不可能と思われた課題の山がキレイさっぱり無くなってしまった。残されたのは焦燥感の捌け口を無くして虚脱した私というヘツポコだけである。

外へ出ようにも街中には提灯が張り巡らされ、幟もそこかしこに立っている。商店街など甚だしいことこの上ない。何処へ行っても夏祭りの猛威から逃れることは出来ず、私は自室に籠城するより現実逃避の術がなかった。

今も私の前には携帯電話が鎮座している。もはや手に取ることさえ億劫になりかけていた。沈黙を貫く愛機は「さっさと電話しろよ」と訴えかけてくるようである。

「俺だってそうしたいさ」

私の頭のなかで囁く声がする。

『乗り越えれば楽になるぜ。そのまま恋路を突っ走って幸せになつて

しまえよ』

「やかましい。問題はそう単純ではない」

『へタレだな』

「それもあけるけれどー」

セルフ問答で劣性に立たされた私は呻き声を上げて悶絶した。心境はまさしく危急存亡といったところだ。

だが、単純な問題ではないというのは本当だった。単なる惚れた腫れたでは流石の私であってもここまで苦悶はしない。しないはずだと信じた。

今回の件は私の心境以前に、鮎川さんの正体が不明であることが考えものであった。祭りに誘ったとして、私は彼女に何を言えば良いのだろう。これからどうやって接していくべきなのだろう。考えれば考えるほど思考は空回り、蜘蛛の巣に絡め取られたように身動きできなくなる。

人の気持ちとは度しがたいものだ。そもそも鮎川さんについては何ら有力な情報がないのだから、彼女の心の内を想像するにも取っ掛かりがない。膨らむのは妄想ばかりで、風船のように宙を漂い、地に足の着いた妙案など一つも浮かばない有り様だ。

「夏が終わってしまう。俺の夏がっ」

夏祭りの足音はもうすぐそこまで来ている。なのに私は心の準備さえ出来ていなかった。いつそのまま投げ出して、世界一周の旅にでも出ようかと考えたのは我ながら呆れるばかりである。

そうして私が頭を抱えていると、にわか携帯が振動を起こした。それは電話の着信の震え方だった。

私はぎよつとして目を剥き、爆弾処理を行うような慎重さで携帯を手取る。まさか向こうからかかってきたのだろうか。まだ私は気持ちの整理がついていないというのに。

しかし相手の名前を見て、一気に力が抜けた。電話をかけたのは鮎川さんではなく、例によって野田先輩だった。冷静に考えれば鮎川さんが私の電話番号を知っているはずがなかった。とんだ杞憂である。

「はい、もしもし」

「鮎川嬢の話はどうなった」

ホツとしたのも束の間、挨拶もそこそこに野田先輩は言った。話を急かすような感じに私は戸惑った。彼ほどの人物が焦るとは、よほどのことがあったのか。

何があつたのかと聞いても「それより鮎川嬢は」とやけに鮎川さんのことを気にする。

「それがその、まだ電話をしていなくて」

私が恥を忍んで答えると、たいへん大きなため息が聞こえてきた。

「そんなことだろうと思つた。全く君という人は！」

「悪かつたですね。で、なにをそんなに必死になっているのですか」

「今からそつちに行く。そのまま待機していなさい」

言うが否や、野田先輩は通話を切つてしまった。理解が追い付かず呆然としていると、ややあつて家の呼び鈴が鳴った。「はい」と応対する弟の声が聞こえる。

やがて私の部屋に弟がひよこりと顔を出して言った。

「兄ちゃん。野田さんとかいう人が会いに来たつて言ってるけど」

「……わかつた」

恐るべきタイミングだが、野田先輩であれば不思議はない。おおかつた最初から私を訪ねるつもりで近くまで来ていたのだろう。

弟に礼を言つてから玄関に立ち、野田先輩を招き入れる。「邪魔するよ」と言つて上がり込んだ野田先輩はいつも通り悠々とした面持ちであり、電話で受けた印象とは違つて見えた。焦りが顔に出ない性質なだけかもしれないが。

ひとまず私の部屋に入れると、野田先輩は我が家のようにどつしりと腰を下ろし「喉が乾いてしまった」と凶々しくも飲み物を所望した。彼の欲するままに冷たい麦茶を持ってくると、先輩はそれを一気に飲み干した。

「いやあ今日はいつにも増して熱いな」

「まったく。嫌になります」

挨拶がてらに他愛もない言葉を二、三言交わした後、野田先輩は本

題を切り出した。

「なぜ電話をかけない」

「その、色々あってですね。私にも思うところがあるわけですし、決して約束をすつぽかそうとしていたわけじゃないんですが、なんと云いますか」

「分かった、分かった。もういい」

「ぐっ」

「まあ聞かずとも理由くらい察しがつく。意地の悪い質問だったな」

野田先輩は出来の悪い弟子を慈しむように言った。「君は底抜けの阿呆だね」

「実際、大食い大会に関しては無理にでも参加しろと言うつもりはなかったのだ。賑やかしにでもなれば良いかと思っていたんだが、事情が変わってしまった」

「と言いますと」

私が相槌を打ちつつ麦茶のおかわりを注ぎ直す。先輩はそれをもた一気飲みする。まるでやけ酒でもしているかのような飲みっぷりだった。

「私の推薦していた選手が急に参加できなくなってしまったね。新しい有力者が必要だ」

なんでも野田先輩は将棋サークルと確執があるらしく、この大食い大会で決着をつけるつもりだったという。しかし祭りの前日になって何者かの妨害が入り、野田先輩が雇っていた大食い選手が出場できない事態となってしまうらしい。その後釜として目を付けたのが、以前話に出した鮎川さんというわけだ。

何を賭けての勝負かは知らないが、野田先輩の気迫を見るに彼にとつてはかなり重要なことらしい。

「今すぐ鮎川嬢に連絡をとってくれ。君が誘えば彼女は必ず来る」

「なんですか、その根拠のない信頼は。もしもそれでフラれたりなんかしたら、どう責任を取ってくださると言うんです」

「当たって砕けろだ。ここで勇気を振り絞らないでどうする」

「砕けるのは嫌です。そんなに鮎川さんの力が必要なら先輩が電話す

ればいいでしょう」

「この分からず屋さんめー!」

私の巖のようなへっぴり腰に業を煮やした野田先輩は、私から携帯電話をひったくると巧みな指さばきで操作して「ほれっ」と突っ返してきた。

見ると、鮎川さんに電話をかけているではないか。通信中という文字が画面に出ている、コール音が鳴り始める。

私は目を白黒させて喚いた。

「なにをするんです!」

「いいから彼女と話さない。一言誘うだけで済む話ではないか」

野田先輩が言い終わらないうちに、コール音が鳴り止んだ。鮎川さんが電話に出たのだ。

スピーカーから「はい」と彼女の声がある。私は先輩の蛮行を非難することも忘れて慌てふためいた。

「あ、アノ、あのあのの」

「なんですか。あのあの詐欺ですか」

鮎川さんに聞いたこともない詐欺の名前を付けられてしまった。私の気分はどん底まで落ち込んだが、むしろそのおかげで幾分か冷静さを取り戻した。

私が名乗ると、鮎川さんはあつさり詐欺の疑いを取り消して「何か用?」と単刀直入に聞いてきた。

怒濤の展開に、私の頭は真っ白になった。ここ数日間考え続けてきた長い前置きは一瞬にして忘却され、花火、誘う、アバンチュール、などの単語が頭のなかで渦を巻く。自分でも何が何やら分からなかった。

「どうしたの」

鮎川さんが聞く。私はカラカラになった喉で固唾を飲む。全身にびっしょりとかいている汗は、夏の暑さによるものではないだろう。何せ嫌になるほど冷たく感じる。

極度の緊張によって私の思考能力は瞬く間に削がれていき、脳内に残った単語がぼろりと口から漏れた。

「あの、花火、行きませんか」

「いいわよ」

それで私と鮎川さんのデートは決定した。数刻前まであらゆる状況を想定し、尋常ではない慎重さで事の成り行きを見極めようとしていたのに、あまりに呆気ない幕引きであった。

その後、私は鮎川さんと日取りや待ち合わせ場所について話したが、決めたのは全て鮎川さんだった。燃え尽きた私はうんうんと頷くだけの全自動肯定マシーンと化していた。今ならどんな無茶を言われても何も考えず「うん」と頷いてしまっただろう。

約束を取り付けて電話を終えたあと、脱け殻同然になった私に野田先輩は微笑みつつ、一安心したように煙草を一本巻いて吸った。彼が上を向いてふうつと息を吐くと、風鈴が涼やかな音を立てた。

「やあ。青春だなあ」

こんな疲れる青春があつてたまるか。そう思ったが、今は文句を言うだけの力も無かった。斯くして私は、鮎川さんと夏祭りに出掛けることになった。

その晩、遠足を前にした小学生のように寝付けなかったことは言うまでもない。

○

続く

よく晴れた昼過ぎ、私は駅前で鮎川さんを待った。駅前広場の中央には、輪っかが捻れたような形をしたヘンテコな彫像が鎮座している。現代アートというやつか。題名に『宇宙と創世』とあるが私には何が何やらさっぱりである。ともかく、その前が鮎川さんとの待ち合わせ場所だった。

田舎の駅だが、今は見渡す限り人で溢れている。すぐその道路から出店がポツポツとあり、川に沿って所狭しと軒を連ねている。電車から降りてきた人はそのまま的屋に並ぶ人混みに加わったり、誰かと待ち合わせるのか駅前の彫像の周りに烏合のごとく集まる。

過剰な人口による熱気と真夏の日差しが交わり、立っているだけで体力を著しく消耗する。まさに灼熱地獄である。

そんな中で二時間も立ち尽くしている私は、もはや干からびる寸前であつた。

腕時計を見ると予定の時間まであと三十分もある。時間を確認してはゲンナリするという行為を、もう何回目か数えるのも億劫になるほど繰り返している。

すっかり温くなったペットボトルの麦茶を飲み、私は自分の愚かしさを呪った。何故、数時間も前から待とうとしたのだろう。

○

私は行列というものの尽くを嘲笑ってきた。食べ物ひとつに数時間と待ち呆けをくらす意味が分からず、行列に並ぶ人種は等しく愚かであると断じて止まない。奴らは時間というものの貴重さをまるで理解していないぞ、とテレビを眺めつつ家でぐうたらしながら思っていたものだ。

しかし今日、私は実感した。自分も同じ穴のムジナなのだ。

最初は十分前に着けばいいだろうと考えていた。普段の私からは

考えられないほど常識的な判断だった。

しかしそこで「いや待てよ」と考えを改めた。鮎川さんは電話口で、口調こそ平淡だったものの夏祭りでの予定をとんとん拍子に立てていった。もしかすると彼女は今回のことをとても楽しみにしていて、二十分前には来るかもしれない。そうしたら私はもう十分早く行くべきではないか。だが鮎川さんはそれを見越してさらに十分早く来るのでは。ならば私は更に。それでも鮎川さんは或いは………。

そして私は思考の隘路に陥った。しかも一方通行である。

このような『もしも』の堂々巡りの果て、三時間前に家を出るという結論に達したわけだ。紛れもなく暴挙であった。おかげで炎天下に長時間、それも無意味に晒されることとなり、私は押し花のように萎れた。しかも私は何を隠そうクールビズに真つ向から唾を吐く冷房信者であり、その軟弱さたるやモヤシも同然である。太陽はまさしく天敵だった。

屋内が大好きで肌は色白、体型もモヤシにそっくりだし、ひよつとして私は人間に変化したモヤシの妖怪ではなからうか。そうとは知らず、今まで人間のふりをして過ごしてきたのかもしれない。なら父と母、弟はどうなるのだ。彼らも太陽を避ける宿命にあるモヤシ妖怪の一族だと言うのか。怖い。

ゆつたりと流れてきた雲が日差しを遮り、束の間の日陰ができる。今にも茹だりそうだった脳ミソが冷静さを取り戻し、俺はいったい何を考えたいんだろうと阿保らしくなった。モヤシ妖怪ってなんだ。

顔を上げると、辺りには更に人が増えてきたようだった。電車が停まる度、駅舎から人々が波のように押し寄せて、ガヤガヤと祭りへ参加していく。

先程から私の隣に立っていた大学生らしき男がにわかにソワソワとし始め、周囲を忙しなく見渡している。間も無くして彼は顔を輝かせて、電車でやって来たらしい女性の元へ駆け寄っていった。朝顔の柄の浴衣を着ている女性は、男を見つけるとこれまた嬉しそうに笑い、二人は仲睦まじく手を繋いで河川敷へと歩いて行った。

なんと眩い光景だろうか。悔し涙を呑んで傍観するしかなかった私も、今日ばかりは彼らの側に立つのだと思うと震えるものがある。しかも鮎川さんはとびきり美しい。長い黒髪を纏め上げ、浴衣でも着た日には男という男の心を射止めまくってしまうに違いない。無論、真つ先に射止められるのは私である。ああ、今すぐにも彼女が私のお相手なのだところら中で自慢したい。

そうやって楽しみが積もる反面、私は胸中に全く別の感情が渦巻いていることも自覚していた。

鮎川さんが正体不明の人物だと知ったのは、つい先日のことだ。私を弟子と呼んで憚らない野田先輩は、厄介だが信用できる情報筋である。場合によっては裏社会にも通じている彼がお手上げと言うのだから、鮎川さんの謎は凡人の私では察することなど不可能である。野田先輩曰く危険はないとのことだが、それで安心してはいられない。

大学生でもなければ社会人でもない。純粋な日本人の顔立ちで、日本語以外喋っているところを見たこともないが、彼女の来歴は一切分からない。

このような人物を相手にどんな話をすればいいのか。それが目下最重要の課題であった。喫茶マーメイドでの偶然の出会いから始まり、この夏で随分と近しくなっただと思われたが、今ではすっかり自信がない。何を聞けばいいのか、そもそも私は彼女の正体を知りたいのか。あれやこれやと考えて昨夜遅くまで鮎川さんとの会話をシミュレーションし、手紙でもしたためようかと便箋に向き合ってみたりもしたが私の不安は増大するばかりであった。

唯一の手掛かりは、私がよく見る夢だけだ。ただの夢にしてはあまりに鮮明な、鮎川さんに助けられる記憶。今回のデートで、あの夢をどうやって鮎川さんとの会話に繋げればいいのかということが、私の頭を最も悩ませるところである。

再び腕時計を確認すると、約束の時間まであと五分とない。いつの間にか考え事に没頭していたらしい。

もう少しで鮎川さんがやって来る。偶然の出会いではない。私とデートをするために！

否応なく心拍数が上がり、人混みを必死に見回す。私の通う大学の方面から電車が来て、その乗降口からホームへぞろぞろと人が降りて来るのが見える。駅舎へ上がっていく人の群れから過たず彼女を見つけ出さんとして私は血眼になる。

鮎川さんはどのような格好をして来るだろうか。どうやら彼女は私と夏祭りに行くのを大変楽しみに行っているようだし、本当に可愛らしい柄の浴衣を着ているかもしれない。さらに髪を結い上げて薄く化粧までされたら、私の節穴のような目では見つけられないのではないか。いや、むしろその美貌が目立って分かりやすいだろうか。

鮎川さんとの会話への不安も何処へやら、期待感が圧倒的に優勢となり、一層強く駅舎を睨んだ。今に、今に鮎川さんが昇降口の階段を降りてくる。「待った？」と聞かれれば、私は三時間待った疲労をおくびにも出さず「今来たところさ」と爽やかに言わねばならない。そうして彼女の手を握ろう。ごく自然にそつと握ろう。こればかりは人混みではぐれないようにするための仕方のない措置である。断じて下心によるものではない。落ち着け。私は紳士だ。

万事予定通りに運んでみせる。

「ひゃあー」

総身を強ばらせていた私は、後ろからツンとつつかれて女のような悲鳴を上げた。何事かと振り向くと、そこには鮎川さんが立っていた。

「待たせた？」

そう聞かれるも、私は意味のある言葉を出せず首を横に振るのが精一杯であった。てつきり電車で来るものとばかり思っていたから大変驚いた。ついこの間も大学でこんな不意打ちを喰らったナア、と思ひ出す。

鮎川さんは相も変わらず涼しげな無表情である。私の恥態を見ても顔色一つ変えない。その鉄壁さはこれから祭りに赴くという時にあっても健在だった。

夏の暑い風に吹かれてはためくのは、白く長い裾。鮎川さんは浴衣などではなく、普段着のワンピースを着ている。感服するほどに徹頭

徹尾いつも通りを貫いていた。

「行きましようか」

「あ、はい」

私は促されるまま、彼女のあとに付いていく形となった。手など握れるはずもなかった。

○

鮎川さんがたこ焼きを食べたいということで、私たちは屋台の立ち並ぶ川沿いを歩いた。

たこ焼きが目当てと言いながら、鮎川さんは目につくものを何でもかんでも買い漁った。

焼きそば、フランクフルト、リング餡、お好み焼き、チョコバナナ、イカ焼き、また焼きそば。

屋台をしらみ潰しに渡り歩くその勢いは破竹のごとし。ありとあらゆる食い物を平らげてしまわんばかりの迫力である。ふわふわの綿飴とガラス玉のようなアンズあめを両手に持つ鮎川さんは実に魅力的だが、その胃袋の底知れなさには畏怖するばかりだ。

私は焦った。どうにかして彼女を止めなればならない。なにせこの後に大食い大会が控えている。鮎川さんの食欲は頼もしい限りだが、このまま食い続けては勝負どころではなくなってしまう。

しかしここでも私の意気地無しは遺憾なく発揮される。鮎川さんは大食い大会のことなど何も知らない。私が伝えなかったからだ。面倒事を先伸ばしにし、伝えるべきタイミングを伺う体でいつの間にか機会を逸しているのが常である。鮎川さんが食べば食うほど「これから大食い大会に出てほしい」などとは言いづらくなる。こんなことから昨日からお願いしておけば良かったと思うがもはや後の祭り、私は呆然として鮎川さんのグルメ活劇を見物する他なかった。

「あの、鮎川さん」

「なに？」

「……………とうもろこし美味しいですか」

「美味しいわ」

私はもう駄目かもしれない。

焼きとうもろこしを齧る鮎川さんを眺めながら「これがデートというものなのかしら」と私は思った。想像していた男女の逢瀬とはどこか違う。奥ゆかしい会話がない。甘酸っぱい気配がない。一向に二人の距離が縮まない。繊細微妙な駆け引きをしようにも、やきもきするのは私だけで鮎川さんはまるで意に介さないことは明白である。

何故、天衣無縫の彼女は私と夏祭りに行くことを了承したのだろうか。これではカップルどころではなく、爆食いする美女となぜかその後を付いていく男である。つまり男がいなくても成立する。奢ってほしいなんて話もないし、商店街の件よろしく、私は己の立ち位置を見失った。こんなことなら唾棄せず恋愛指南書でも読んでおけばよかった。

たこ焼きを一つ買って、私も食べながら歩く。そうすれば乙女を執拗に追うストーカーの疑惑も薄れるだろうし、会話がなくても少しは間が持つ。気がする。

そうやって練り歩いていると川岸を結ぶ大橋の前までやって来た。花火を間近で見るとはうたってつけの名所で、まだ夕刻だというのに橋の上はすでに人でごった返している。場所取りでもしているのか、川上側は特に混雑している。欄干にへばりつくようになして寄りかかっている人々からはテコでも動かぬという気迫が見て取れた。

西日を映して暖かい色が付き始めている川面を眺める。流れは穏やかに見えるが、随分と水嵩が増している。昨晚、大雨が降ったためだ。今日晴れてくれたのは有り難いが、この状況で花火を上げられるのだろうかと不安である。

この橋を渡って川下の方へ行けば大食い大会の会場がある。私は、これ以上鮎川さんが食べる前にさりげなくそこへ連れて行こうと考えた。

さりげなくというのが肝要である。用意された大量の飯と、勝負に挑む選手たちの熱気にあてられれば、鮎川さんなら自ずと参加を表明してくれるに違いない。そして伝えそびれていた私の落ち度は闇に

葬られる。

脳裏に浮かんだ恥知らずの妙案について考えを巡らせていると、私の袖がくいくいと引つ張られた。鮎川さんだった。さつきまで食べまくっていたはずだが、今は何も手に持っていない。どうしたのだろうか。まさかお腹が一杯になったので帰ると言うのではないか。

それは色々な意味で困る。とても困る。具体的には、鮎川さんの素性を知る千載一遇の好機を逃した上に、野田先輩からは罰として弟子入りという名の社会的抹殺を受けてしまう。私が考え得る最悪の事態だ。

「あれ」

鮎川さんが指さした方を見ると、射的の屋台があった。一見して無表情のままの彼女の目は爛々と光っている。そういえばこの人は好奇心旺盛だったなあ、と商店街を一緒に歩いたときのことを思い出す。

私は鮎川さんの望むまま射的に挑んだ。二人分の金を払ってコルク銃を受け取る。初めてやるらしく、鮎川さんは銃をしげしげと眺め、使い方を店主から熱心に聞いたあと、私の横でどつしりと構えた。ようやくデートらしくなってきたことに、私の萎みかけていた心は窒素を積めた風船のごとくパンパンに膨れ上がった。相変わらず振り回されている感は否めないが、花より団子の状態に終止符を打てたのは実に喜ばしいことである。

下段の小さい菓子類を狙う私とは反対に、鮎川さんは勝負師であった。よりにもよって一番上にある馬鹿デカイゲーム機を狙っている。あんなものにくらコルクをぶつけたところではなしのつづて、倒れるはずがない。物理法則に反する。

一瞬の張りつめた静寂の後、鮎川さんが満を持して引き金を引いた。景気のない音と共に銃からコルクが発射され、ゲーム機の箱の中央を強かに穿った。

ゲーム機は微動だにしなかった。

○

私たちはそれから的屋を巡った。輪投げ、ヨーヨー釣り、ゴムボールすくい、飴付きのくじ引き。少し風変わりなところでは如何にも手作りのボーリングもやっている。射的も店を変えていくつかやった。

鮎川さんの技巧は壊滅的であった。およそ成果らしい成果がない。ポイは瞬時に破れ、ヨーヨー釣りの釣り紙も水に濡れて呆気なく切れた。輪投げの輪っかを明後日の方向に投げて店主の脛を打ったりもした。射的においてはどうやっても特賞の品が落とせないので小さい的を狙ったところ、その尽くを外すといった具合である。

私はどこかで鮎川さんを完全無欠であらゆる物事をそつなくこなしてしまおう人だと思っていたが、この小一時間でその先入観は覆った。

しかも彼女は失敗したとしてもめげることなく、次こそは絶対に上手いく、といった根拠のない自信を滾らせているように見えた。私が射的で取った駄菓子を食べつつヨーヨーを弄びながら遊技に興じるその様子は、はしゃいでいる子供そのものである。まるで初めて祭りに来たみたいだった。

鮎川さんの興味は止まることを知らず、屋台から屋台へと渡り歩いていく。唯一やらなかったのは金魚すくいくらいなものだ。私が「やらないの」と聞くと鮎川さんは静かに頷いた。その横顔がどこかつまらなさそうだったのが印象的だった。

改めて財布を開いてみると、恐るべき散財をしていることに気付いた。ただでさえ払底気味の私の財布は、いまやミイラのように干からびてしまった。私よりもよっぽど散財しているはずの鮎川さんは大丈夫なのかと様子をうかがってみるが、堂々と闊歩する後ろ姿はそういった心配とは無縁のようであった。

いよいよ彼女が何者であるか分からなくなる。大学生でもなければ社会人でもなく、あまり関わり合いになりたくない業種の関係者でもない。しかし金はあるときた。野田先輩によるとバイトもしていないようだし、いったい何処から捻出しているのか是非とも問い質し

たいところである。

どういった切り口で聞くべきか考えている内に、屋台が疎らになり始めてきた。いつの間にか祭り会場の外れまで来てしまったらしい。何処からか太鼓の音が聞こえる。祭り囃子ではない。広い通りから脇道に逸れたところにある路地の奥まった方から聞こえてくる。逢魔ヶ時の薄暗さも相まって妖気にも似た怪しげな雰囲気立ち込めている。

川との位置関係から、ここが大食い大会が開かれるという会場の近くだと分かった。そうなると怪しい音楽が聞こえてくるこの奥には。「鮎川さん、こっちは……………」

勢い、私は鮎川さんを誘おうとした。しかし彼女はすでに歩を進めていた。勇ましいその背中には覚悟を決めた人間の風格が漂っている。まるでこれから戦いに臨む気合いの入りのようである。

鮎川さんは元から大会のことを知っていたのだろうか。

○

狭い路地を抜けた先は空き地になっていた。そこには天幕がいくつかが張られ、人ばかりが出来ていた。大学生くらいの青年から、恰幅のいい壮年の男まで年齢層は幅広いが、ほとんどが男性であった。色気の欠片もない。汗と何やらこってりとした食べ物の臭いが入り雑じった熱気は、すぐその本祭のそれとは質が全く違う。なにせ祭りらしい騒音がない。人はたくさんいるのに、どの人もヒソヒソとしか喋らず、ある種図書館のような静けさがあった。そこにスピーカーから流れる太鼓の音が加わり実におどろおどろしい。『鯨飲馬食』や『一攫千金』と書かれた提灯の投げる明かりがより一層怪しさを増している。

一際大きな天幕の側には『決戦場』という幟が立っている。ここが大食い大会の会場であることにはや疑う余地はなかった。

さしもの鮎川さんも男共の放つ異様な空気に威圧されてか足を止めている。我々は様子を見つつ、迂回するように会場の端を移動し

た。

「おおい、こつちだ」

すると私たちに声をかける者がいた。薄汚れた健康サンダルと『馬鹿』と書かれたまっ黄色のTシャツを着こなす年齢不詳の男。すなわち野田先輩であった。何故かサングラスとマスクを着用しており、つけ髭まで張り付けているのでしばらく誰だか分からなかった。

彼はこちらへ近寄ると「待ちかねたよ」と言った。

「どうしたんです。その格好は」

「変装だよ。お尋ね者というわけだ」

「はあ」

「もう今にも始まる。選手登録は私の方で済ませてある。さあ行つた行つた」

詳しい説明もそこそこに、野田先輩は鮎川さんを会場の中心へと追いやってしまった。彼女と引き剥がされた私は即時異議を申し立てた。

「待つてください。彼女にはまだ何も事情を話していないんです。なにもこんな唐突に」

「君の奥手も筋金入りだな。だが心配するな」

「いや、心配もなにも順序が」

「気にするなと言っている。ほら彼女を見てみなさい。そんな細かいことを差し挟ませない顔をしているじゃないか。外野がとやかく言うのは無粋というものだ」

野田先輩に言われて見ると、選手席の末端に座った鮎川さんの表情には些かの迷いもなかった。ことここに至って、私は彼女の同行者ではなくただの観衆になり下がった自分を知った。私は完全に蚊帳の外であった。

「それより君も金を賭けてきたらどうかね。倍率が凄いことになってるぞ」

すっかり忘れていた。私は諸々の疑問や不安を放擲して、運営のテントに駆け寄った。ホワイトボードに手書きのオッズ表を見ると、鮎川さんはダントツの大穴であった。財布の中身を確認すると、しわし

わの野口英世が一枚出てきた。実に頼りない姿であるが、もし鮎川さんが勝てばこれがまとまった額になって返ってくる。それはとても魅惑的な皮算用であった。

しかし、一つ懸念がある。受付の男が「賭けるんですか」と聞いてきたが「ちよつと待ってください」と私は思い止まった。

ここへ来るまでに鮎川さんが大量の食事をしていたことが引っかけか。見た目には序の口といった顔をしているが、果たして今の胃の容量は如何ほどであろうか。まさか一品食べて「美味しかったです。ごちそうさま」などと言いだすのでは。鮎川さんに限ってそれはないだろうと思う反面、彼女ならば単なる食事目的で大食い大会の席に座る剛胆さを持つていても不思議はないと思えた。

悩みつつオッズ表を凝視していると、飯島という名前が目についた。ゼッケン番号七番とある。選手たちのいる方を見てみると、七番の席には速水の彼女である飯島さんがいた。出場するというのは本当だったのかと私は舌を巻く。しかも食欲の権化のようなむさ苦しい男たちに挟まれながら、彼女の態度はいかにも自信に満ちていた。もう一度表を見直すと、飯島さんは鮎川さんに次いで倍率が高い。私は二人に手持ちの半分ずつを賭けた。

諸君、私は間違っているだろうか。本命の鮎川さんを応援する気持ちで全額注ぎ込むべきだったであろうか。浮気者、結局は金か、と私を罵るだろうか。

しかし考えてもみてほしい。

お金は大切である。

○

私が野田先輩の元へ戻ってから間もなく、選手紹介が始まった。

改めて見ると錚々たる顔ぶれである。ギラギラとした脂汗の光る巨漢ばかりで、その全員が勝利への執着に燃え気炎をあげている。優勝候補として名を挙げられた男はボールのような体型をしており、食べる前から息が荒い。彼に理性はあるのだろうか。

そんな男共の中にあつて、肩を並べている二人の女性が異彩を放っている。鮎川さんはツンと澄ました顔で、飯島さんは隣の鮎川さんを気にしつつも誰かへ嬉しそうに手を振った。そちらを見ると、やはり言うべきか速水もいた。いつもは騒がしい印象だが、大人しく控えめに手を振り返しているだけだ。

司会をしているの是一目で不摂生と分かる不気味な顔色の男だった。明らかに私よりも細身で、彼こそがモヤシ妖怪だと断ずるのもやむ無しである。しかしよくよく見ると私はその男のことを知っていた。なにせ学内でも広く知られる有名人だったのだ。

「彼は将棋サークル『ぬらりひよん』の部長だ。来年で二十五歳になるが就職などしたくないと未だに駄々をこねてこんな馬鹿をやっている」

「詳しいですね」

「古い知り合いだからね」

野田先輩は煙管をふかしながら言った。そういえば野田先輩がこの大食い大会に拘るのは、将棋サークルが関わっていると昨日聞いた。

「彼は私をサークルに連れ戻そうと言うのだよ」

「連れ戻す?」

「私の古巣だからね。まあ今となつては昔の話さ。しかし連中は今でも私なんかに固執する。部長の座に戻らなければ強行手段も辞さないと言ってきた。だからこの由緒正しい大食いでの決闘で雌雄を決するというわけだ」

「野田先輩が出なくていいのですか」

「こういうのは形式が大事だ。正しく言うなら代理決闘といったところだろう」

聞くところによると、野田先輩が交渉していた選手が倒れたのは将棋サークル『ぬらりひよん』によるものらしい。確たる証拠はないが、状況的に見て間違いないとのことだ。

その選手が倒れた経緯は、頼んでもいないピザが山のように届き、それを全部食ってしまったために腹を壊したとのことらしい。ちな

みにピザの代金はネット決済であらかじめ払われていたという。

色々な意味で恐ろしすぎる。辛抱堪らず謎のピザを食ってしまうその人の食欲も恐ろしいが、自腹を切つてまでピザを注文するという欠陥だらけの作戦を実行した将棋サークルも恐ろしい。相手が食わなければ、大損こいてお仕舞いではないか。さすがは野田先輩の関係者である。変人しかない。

将棋サークル『ぬらりひよん』と野田先輩、また彼の持つ手帳には並々ならぬ因縁があるに違いない、しかし私は「これ以上聞いてはろくな目に遭わない」と勘を働かせて話を切つた。彼らの不毛な騒動に巻き込まれるのはごめんである。私はこれ以上、貴重なモラトリアムを無意義に過ごしたくない。

鮎川さん含め八人の選手紹介と、各人からの簡単な挨拶が済み、いよいよ料理が運ばれてきた。

私たちは瞠目する。

たこ焼きであった。大量のたこ焼きであった。その偉容は圧巻と評する他ない。山と積まれた粉物の球体はたかが十数人が消費できる熱量を遥かに越えている。会場の端で救護テントが慌ただしく準備を進めていることから、例年の過酷さがしみじみと感じられた。

各選手にたこ焼きが取り分けられる。中身はタコだけでなくチーズや餅などもあると言っているが、あれだけの量を食うならその違いは皆無に等しいだろう。

我々一般人は富士山のごとく聳えるたこ焼きを見るだけで胃もたれを起こしそうだが、選手たちは皆、獣のように瞳を光らせている。本気であれを食うつもりなのか。正気ではない。

「制限時間は六十分です。それでは食べ始めてください」

顔色の悪い司会が言った。選手たちが「いただきます」と手を合わせたと同時に、戦いの火蓋は切つて落とされた。

それはまさに、飢餓地獄から解き放たれた亡者のごとだった。食べる食べる食べる。ただひたすらにがむしやらに、親の仇でも討つように猛然と食べ進める。

先陣を切っているのは優勝候補のゼツケン一番だ。隣のボディー

ビルダーのような男性が小ぢんまりとして見えるほどの巨怪は、その見た目に負けない食欲を持ち、たこ焼きを皿から直接喉へ流し込んでいる。運営本部にいる将棋サークルの面々が沸き立つ。彼こそが野田先輩を打倒するために将棋サークル『ぬらりひよん』が用意した刺客に違いない。爪楊枝すら使わない無作法ですらこの場においては許される。ちゃんと噛んでいるのか心配である。いや、噛んでいないだろう。

飯島さんも大した健闘ぶりだった。頬袋を作りながらせつせと口に詰め込む姿はギャルとかけ離れ、一人の選手としての風格があった。

しかし、やはりと言うべきか驚嘆するのは鮎川さんの活躍である。彼女は戦いの渦中であって一人涼やかだった。たこ焼きの一つ一つを淡々と口に運ぶのだ。その作法は流麗で、一切の淀みがない。まるでたこ焼きを食べ続けるプログラミングをされたシステムのような。誰もが他の選手の動向を気にするなかで彼女だけが無我の境地にあつた。

一皿十個のたこ焼きが幻のように消えていく。矢継ぎ早にお代わりが運ばれる光景はわんこそばもかくやという程である。

百個に差し掛かるくらいから、場に変調が現れ始めた。最初に白旗を挙げたのは筋肉質な好青年だ。青白い顔をして口に手を当てている。あの身体を育てるため食べる量に自信はあつたのだろうが、化け物相手では分が悪かったようだ。彼に賭けていたらしい観客たちは悲嘆に暮れたり、或いは選手へ声援を送ったりしている。

それを皮切りに脱落者が出始めた。倒れた順に担架に乗せられ、手際よく救護テントの方まで運ばれていく。五番ゼツケンの中年が糸の切れた人形のように気絶し、残っているたこ焼きの上に突っ伏した。末席にいるまん丸に太った男は突然笑いだして仰向けに倒れたまま動かなくなった。せつせと担架で運ばれる。おそらく自分が食っているのがたこ焼きなのか、自分自身がたこ焼きなのか分からなくなってしまうのだろう。

たこ焼きは情け容赦なく新たに焼き上がる。際限はない。将棋

サークル『ぬらりひよん』の財力はどこからくるのだろう。

「どうやってあれだけの物資を？」

「麻雀だ。私が教えた」

「えっ」

「大学界隈の雀荘はだいたい将棋サークルが介入している。ほら、君もよく行くだろう。あの商店街にある、喫茶店のすぐ側の」

「あそこもそうなのですか！」

「君は良いカモだと評判だよ」

私はもう二度とその店には行かないと決めた。負けた分を必死になって取り返そうとしていたのが阿呆みtaiである。野田先輩も共謀していたのかとも考えたが、彼は私の借金を肩代わりしているし、何より将棋サークルとは絶縁に近い状態だという。

そういえば私は、あの偏屈な集団が看板通り将棋に勤しんでいるとは一度も聞いたことがなかった。いつも部室から聞こえる声は「ロン」だとか「ポン」だとか言っていた。その礎を築いたのが野田先輩だというなら、将棋サークル『ぬらりひよん』にとって野田という男の存在は無視できないものなのかもしれない。

「それより君、鮎川嬢とは上手くいったのか」

不意に鋭い質問が飛んできて、私は思わず目を反らした。それが何よりも雄弁な答えであった。野田先輩は深いため息をつく。

「いったいここに来るまで何をしていたんだね」

「いい、良いではないですか！ 私には私の考えがあります。藪から棒を突っ込んでも蛇が出てきます。期が熟すのを待たなければ」

「いつまで待つつもりだね」

「それは……………あれです。この後の、そう、花火とか」

私が言外に無計画を吐露すると、野田先輩は肩をぽんぽんと叩いてきた。まるで馬鹿な弟子を慰めるような叩き方だった。

「君は底抜けの阿呆だな」

「阿呆でけっこうです」

「うむ。賢しいよりずっと良い。まあここまで来れば私が首を突っ込むものでもないのかな」

野田先輩の意味深な言葉に、私は首を傾げた。先輩は何か知っているのか。

聞こうとしたその時、司会の声が拡声器から響いてきた。

「さあ、現在三人が残っています。あと十五分、誰がより多く胃に収めるのか」

喋っているうちに戦いはいよいよ佳境に入ったらしかった。

残っているのは将棋サークルが用意した怪人、速水の彼女の飯島さん、そして鮎川さんの三名だった。

飯島さんはずいぶんと辛そうである。左右にいるライバルの動向をしきりに観察しながら、一個のたこ焼きを食うのもやつとという有り様だ。一番ゼツケンの巨漢も手が止まりかけている。最初の勢いはすっかり陰つてしまい、爪楊枝でちよいちよいとたこ焼きを弄くる様はしょんぼりと落ち込んだ熊のよう。

そんな中で鮎川さんだけが変わらず食べていた。恐るべきことに何も変わらないのである。食べる速さも、姿勢も、顔色も。たこ焼きが焼けたそばから口へひよいひよい運んでしまう。いつの間にか飯島さんや巨漢を大きく引き離している。まさしく人外の光景だった。

その様子を見た飯島さんたちは、二人同時に白旗を上げた。試合終了のゴングが鳴らされる。

鮎川さんはさも当然のように優勝をもぎ取ってしまった。

しばらく啞然とした空気が流れた会場に、拍手が疎らに響き始める。やがて割れんばかりの大音響となり、大穴の勝利に皆が沸き立った。運営本部のテントにいる将棋サークルの面々は地団駄を踏んで悔しがっている。それを腹の底から面白がるように、野田先輩はにっこり笑っていた。どうやら確執云々の話は本当だったらしい。私にはこれっぽっちも関係ないけれど。

スポットライトが一点に集中し、拍手喝采はさらに大きくなる。促されるまま立ち上がった鮎川さんに苦しそうな様子はない。平然とした顔で司会から花束と『キングオブ食いしん坊』と書かれたどころなく不名誉な襷をもらう。

鮎川さんは口についたソースをティッシュで拭い「ごちそうさまで

した」と小さくお辞儀をする。彼女が口元を隠しながら満足そうに小さくげっぷしたのを、私は確かに見た。

○

「いやあ助かった。君は私の恩人だ」

「お礼の必要はありません」

表彰台から降りて我々の方へ戻ってきた鮎川さんを、野田先輩が称えた。先輩は小躍りしそうなほど上機嫌である。よほど将棋サークル『ぬらりひよん』との間にできた溝は深いと見える。

鮎川さんは優勝した。他の追隨を許さぬ堂々の一位であった。他の選手が歩くこともままならない中で一人表彰台に立ち、司会から勝利の感想を聞かれた際に「美味しかったです」と言ったのは実に彼女らしかった。

「私はもう行くが、君たちはこれから花火でも見るのかな」

「え、えっと」

「はい。見ます」

私が口ごもる横で、鮎川さんはハッキリと答えた。果断である。男として立つ瀬のない私はいっそう身を縮めるばかりだ。

野田先輩は「そうかそうか」と何故か喜ばしいことのように頷く。「では……………」

野田先輩がそう言いかけた時、遠くで一人の男が声を上げた。

「いたぞ、野田だー！」

我々三人が振り向くと数人の男性がこちらへ駆け寄ってきていた。運営本部からも続々と人が出てくる。将棋サークルの部長である司会の男が「捕まえろ！」と檄を飛ばす。

「こりゃいかん。君、あとは頼んだ」

野田先輩はそう言って私に紙切れを押し付けると、すたこら逃げ出してしまった。サンダルを履いているとは思えない速さだ。まるで脱兎である。よほど捕まりたくないらしい。

受け取った紙を見ると、鮎川さんの名前とゼッケン番号と賭け

た金額が書かれ、それから『ぬらりひよん』という文字の判子が押してあった。代わりに換金しておけということらしい。抜け目のない人である。

人混みを掻き分けてきた将棋サークルの面々は「あつちへ逃げたぞ」「追え追え」「今日こそ手打ちにしてくれる」と野田先輩の逃げた方へ走っていく。それとは別に、司会をやっていた男が私と鮎川さんの所へ来た。

「やあ、君はたしか野田の一番弟子だね」

「いいえ違います」

あまりに不名誉な覚えられ方をされていたため、私は考えるより先に否定した。

男、もとい将棋サークル『ぬらりひよん』の部長は、幽霊のように青白い顔にニヤニヤとした底意地の悪そうな笑いを浮かべている。その笑い方からは彼の性格が如実に見て取れ、また変な人に目をつけられてしまった、と私は暗澹たる気持ちになった。

「隠しても無駄だよ。我々の情報網を甘く見てはいけない。何より野田自身が君を弟子にとつてしていると公言している」

甚だ迷惑な話には私は呆れて何も言えなかった。まさか私の知らないところでそんなことになっているとは。野田先輩は学内でも有名な自由人である。そのあまりの奔放ぶりは学部学年を問わず勇名を馳せ、大抵の常識を備えた人は彼を徹底して避ける。そんな野田先輩の弟子だというデマを流されては、私が友人や恋人を作れなかったのも無理からぬ話だ。決して、私が口下手だったり、野田先輩の口車に乗って学生たちの恋路を邪魔して回ったからではないのだ。そうに違いない。

私が真理に気付いて憤然と考え込んでいるうちに、『ぬらりひよん』の部長の周りに人が集まり始めた。彼らは私と鮎川さんを囲むようにして並んでいる。

「そちらの優勝者の女性は誰か存じないが、野田が用意した助っ人間違いあるまい」

「ま、待ってくれ。何をするつもりだ」

不穏な空気に、私は緊鮎川さんを庇うように彼女の前に立つ。

部長は緊張しきった私を「ふん」と鼻で笑い、サークルの部下たちに向かって指を鳴らした。

「連れていけ」

一斉に男共が私たちへ襲いかかってきた。私は反撃しようとするも細腕ではどうにもならず瞬く間に布団です巻きにされた。縄でぎゅっと縛られて「ぐえっ」と蛙が潰れたような声が漏れる。鮎川さんはというと全くの無抵抗で、男たちも手荒な真似はせず大事な骨董品を扱うかのように彼女をす巻きにしている。我々は二人して担架に乗せられ、将棋サークルの連中に運ばれていった。

何故こんなことになってしまったのか。これからどうなるのか。そして、私の輝かしい理想のデートは何処へ行ってしまったのか。す巻き状態の私は汗を拭うことも出来ぬまま、己の命運を呪うしかなかった。

ため息が、蒸し暑い空気に溶けて消えた。

○

続く

三章 後編

将棋サークル『ぬらりひよん』に人質として捕らえられた私は、住宅の屋根に囲まれた狭い夜空をぼんやりと眺めていた。夕焼けの時間は過ぎていくが、町灯りのせいで見える星はせいぜい一等星くらいのものだ。あとは白んだ三日月だけの殺風景な空である。

しばらく前に山間のキャンプ場でも鮎川さんと月を見たが、あの時のようなロマンチックさは欠片もなかった。なにせ我々は縄で縛られ、椅子に固定されてしまっている。

大会広場の隅にある仮設の資材倉庫。その裏側の人目につかないスペースに私たちは拉致された。後ろ手に縛られた縄は固く、手首に食い込んだりはしないがどうにも逃げられそうにない。

見張りの男が一人いる。真面目に監視はせず、私たちに背を向けてパイプ椅子に腰かけ携帯を弄っている。どうやら私たち程度では逃げられないとタカをくくっているらしい。全くもってその通りである。二、三回交渉してみたが暖簾に腕押しだった。

私は先刻、す巻きにされてここへ運ばれる際にも『ぬらりひよん』の部長へ猛抗議した。

「なぜ俺たちを捕まえるのですか」

「決まっているだろう。野田を誘い出すためだよ。いわゆる人質というやつさ。安心してくれて良い。我々はあくまで紳士的な組織だ。手荒な真似はしない」

「あなた方は間違っている。俺を人質にしても野田先輩はやって来ないぞ」

「いいや来る」

「来ないっいたら来ない。野田先輩は俺の身の安全などこれっぽっちも気にしないんだぞ」

「君ね、そんなこと自分で言っつて悲しくないの。奴は来るさ。十年来の付き合いがあるんだ。分かるんだよ、僕には」

「俺たちを解放しろ！然るのち賭け金を払ってくれ！」

「しつこいなあ君も。金はあとで用意してあげるから大人しくしてて

くれよ」

無論、私の抗議が意味をなさなかったのは、監禁されている現状から容易に察しがつくだろう。

どこでどう間違えればこうなるのか。現代日本で普通に暮らす限りは考えられない境遇に、私は大いに不満を抱かざるをえない。人生初のデートが無茶苦茶になってしまった。

すぐ隣には、私と同じように拘束されている鮎川さんがいる。彼女の超然とした態度はこんな状況下でもまるで変わりなく、じつと夜の空を見つめている。無表情なので怒っているのか落ち込んでいるのかすら分からない。少なくとも焦りは見受けられなかった。拉致されているにも関わらず恐るべき剛胆さである。まさかこうした荒事に慣れているというわけではあるまいが。

「ねえ」

鮎川さんから声をかけられた。

唐突に話しかけられて、私は上擦った声で返事をする。

「ここから花火は見えるかしら」

「ど、どうだろう。方角はまあ、川の方だけど。屋根があるからね」

「そう」

鮎川さんは空を見上げながら言う。彼女の目がわずかに細くなり、口元がきゅつと結ばれる。その微妙な表情の変化が、私の視線を釘付けにして離さない。

「なに？」

話が途切れたあともそうやってじつと見ていたら、鮎川さんに気付かれた。一瞬焦ったが、彼女の口調には特に嫌悪感がなかった。なかったと信じたい。

「いや単に、鮎川さんが何を考えているのかと思って」

「……………花火を見たかったわ」

意外な答えであった。まず返事をされたことが予想外だったが、そんな普通のことを考えているというのが私にはどうも信じがたかった。

「他には何か考えていた？」

「またも鮎川さんが聞いてきた。しかもどういう質問なのだ、それは。私の思考を洗いざらい知ろうとでも言うのか。婦女子にそう思われるのは名誉であり興奮するに吝かではないが、相手の思考を知りたいのは私の方である。まさか花火で頭がいつぱいということもあるまい。」

「特別なことは何も……」
「言ってみて」

今日の鮎川さんはどうしたわけか妙にぐいぐいと来る。何だろ天心当たりがない。いや、無いと言えば嘘になるが、彼女の正体を密かに探ろうとしているなどと感じさせる場面があつたようには思えなかつた。私はまだそこまで行動に移せていない。

考えた末、私はこれを一つの好機と捉えた。鮎川さんから会話に乗ってくれるならば、普段はしにくい話も出来るというものだ。それに今は話すこと以外にやれることもない。

「俺が昔、川で溺れたことがあるっていうのは話したっけ」
「ええ」

「その時のことをたまに夢でも見るんだ。ある女の人が助けてくれるんだけど、その人の顔が全然分からなかつた。つい最近までは」
「最近、までは？」

鮎川さんが聞き返す。

私はせっかくの夏祭りが台無しになって投げやりになっていたのかもしれない。そうでなければ、口について出た言葉を切っ掛けに、彼女に対して踏み入った話など出来なかつただらうから。

「ちよつと話題を変えるけど、ついこの間、野田先輩から聞かされたことがある。鮎川さんの身辺についてだ」
「そう」

「あの人は阿呆なことばかりやっているけど、すごい情報屋ではあるんだよ。うちの大学にいる人のことなら知らないことはないんじゃないかな」

「そう」

「でも、君のことはなにも分からなかつた」

空気が張り詰めたような気がした。決定的な一言を口にした自覚があった。

彼女の無言が気まずい。しかしここまで言っておいて、さすがの私も引き返すわけにはいかなかった。

「野田先輩も不思議がっていたよ。こんなことは初めてだって」
「……………」

「俺は君がどこの誰なのか、何をしていた何を考えているのか、全く知らないんだ。知りようもないから、どうしたものかって思ってたんだ。ここしばらく。特に、川で溺れる夢を頻繁に見るようになった最近」

言い終わり、二人の間に沈黙が流れる。私の言いたいことは終わった。あとは鮎川さんの返事を待つばかりだ。

私たちはしばらく黙ったままだった。蝉の合唱が四方から響き、それに紛れて遠くの祭り囃子が聞こえる。予定ではそろそろ花火の打ち上げが始まる頃だろうか。鮎川さんは花火が見たいと言った。それが彼女の真意なのか。私にはまだ、分からない。

やがて、鮎川さんは口を開いた。

「……………知りたい？」

俯いていた私は弾かれたように彼女を見る。鮎川さんも私を見ていた。真っ直ぐに、射抜かんばかりにこちらを見つめている。

どう返すべきか判断できず答えるのを躊躇っていたが、鮎川さんは私の返事を待たずに言った。

「私は知りたいわ」

その一言は私に対してすさまじい威力を持っていた。話の流れから考えて、鮎川さんの言うところの「知りたい」というのは、私のことを知りたいという意味で間違いないだろう。

つまり私は今、鮎川さんに告白されていると見て良いのか。「貴方のことを知りたいです」とはなんて大胆な告白だろう。照れ臭さと困惑がいつぱんに押し寄せて、私は唸ったり仰け反ったりしたい衝動に駆られた。

そんな私の胸中を知ってか知らずか、鮎川さんは話を続ける。

「何でもそう。環境のこととか、人の暮らしのこととか、気持ちとか。知りたかったから大学の講義に出たし、サークルにも参加していた。だから今日、夏祭りにも来たわ」

鮎川さんの話を聞き、私は早とちりをしていたことに気付いた。別に愛の告白ではなかった。恐るべきは拗らせた童貞の妄想力である。穴があつたら入りたいし無ければ掘ってしまいたい。

しかしそうした一喜一憂は隅に置いておくとして、鮎川さんの発言は意味深だった。普通に聞けば好奇心旺盛で勤勉なのだろうと思わなくもないが、私は彼女が普通の人間ではないことを知っている。何処の誰かは知らないけれど、普通でないということだけは知っている。

そして話の流れからして、私が知っていることを鮎川さんも承知しているはずだ。その上でこうして話をするというのは、どういう意図があつてのことなのだろうか。授業やサークルに参加していたなどと。人の暮らしに興味があるなどと。

おそらく重要なことを、臆面もなくさらりと口にした鮎川さんの澄まし顔を見る。蒸し暑い微風に彼女の前髪がそよぐ。人としてどこもおかしな所がないのが、逆に私にはおかしなことのように感じられた。

「鮎川さん、君は……………」

言いかけて、私は思わず悲鳴を上げそうになった。後ろから肩を叩かれたのだ。誰かと思って振り向こうにも、縛られているので背後を見れない。

困惑し「誰だあ！」と叫ぼうとしたところで口に手を当てられる。忍び足で私の前に姿を現したのは速水であった。

彼は中腰のまま私の背後から目の前に回り込み、自分の口に人差し指を立てて見せた。静かにしろということか。

すぐ側の鮎川さんかというと、すでに縄を解かれている。私が俯き、思考に没頭している内に解放されていたのだ。私とは正反対に、落ち着き払い、くつろいでいるようにすら見える彼女の態度はこの事が予定調和だと言わんばかりであった。鮎川さんは速水が来るのを

知っていたのだろうか。

「これはどういふことだ」

拘束を解いてもらった私は掠れ声でそう聞いた。彼に助けられる理由が思い付かない。裏にどんな目論見があるのか想像がつかず、私は緊張に身を固める。

「別に。うちの連れが助けてやれってうるさいから」

「連れてって、飯島さんのことか」

「前にゲーセンで助けてもらったからそのお礼だって、あいつが。あと今日は良い勝負ができたからってよ」

「その彼女は何処に？」

「食べ過ぎで寝込んでるよ」

言いながら、速水は鮎川さんをちらりと見た。

「サークルの奴らはほとんど野田さんを追いかけていったみたいで、こっちは手薄だ。走れば逃げられる」

「速水、お前がここまでしてくれるなんて」

「いやまあ、俺も思うところがあるつつうか」

会話をしつつも見張りに注意する。私たちを監視する責務があるはずの男はいまだにそっぽを向いて暇を潰しており、私は大いに緊張感を削がれた。速水の言う通り、ここから逃げ出すのはそう難しくないかもしれない。

速水を殿にして私たちは歩き出した。なに食わぬ顔で監視の背後を通り過ぎる。振り向かれたので「やあ」と挨拶すると、覇気の欠片もない顔で「おう」と彼も片手を上げる。そして何事もなかったかのように携帯電話を弄るのに戻ってしまった。私はこんな連中に捕まって絶望していたのかと恥ずかしくなった。

少し歩いたところで、後ろでガタガタと慌てた音がした。ようやく気付いたらしい。見張り役失格の男が何やら騒ぎ立てようとしたが、そこに速水が立ち塞がった。

「であえー！であえー！」

速水に押さえられて前に出られない男は、何故か古風な言い回しで応援を呼んだ。私は思わず笑いそうになったが、事態は意外に切迫し

ている。運営テントに残っていた将棋サークルの面々が飛び出してきたのだ。鬼気迫る形相で「ひつとらえろ」「手打ちにしてくれる」「ポンカンチー」などと穏やかでない。最後のは意味がわからない。

「逃げよう、鮎川さん！」

私はとつさに鮎川さんの手をとって走り出した。「あつ」と彼女の声。柔らかな女性の手のひらの感触がしたが、そんなことを気にしている場合ではない。速水が必死の抵抗をしてくれている。

人も疎らになっている大会の会場を抜け、川沿いの通りに出る。なんだか現世に戻ったような心地がした。しかしすぐ後ろからは悪鬼たちが私たちを捕まえに来ている。

人を隠すなら人の中。花火はまだ始まる前で、大橋を中心にして集う観客の数は最高潮に達していると見える。屋台がほとんどないこちらの方にも、かなりの数がある。常道としては間違っていない選択肢だろう。

しかし考えてみれば、追われている野田先輩も同じように人混みに紛れようとするのではないか。そして将棋サークル『ぬらりひよん』のメンバーはその大半が野田先輩の追跡に駆り出されている。その中を突っ切るといふのはむしろ危険ではないか、と私は思った。

「鮎川さん、こっちだ」

彼女の手を引き、人混みとは反対の方向へ走る。振り向くと追っ手が何人か迫っているが、運動能力は私とどっこいどっこいらしい。いや、日がなタバコをふかし麻雀卓を囲んでいるせいか体力は私よりも劣る。一人はもう息が上がって見るも無惨であった。

建物の影に駆け込み、角をじぐぎぐに曲がる。出鱈目なように自分で自分が今いる位置を正確に思い描き、追手と鉢合わせることがないように動ける。この辺りの土地勘では負ける気がしない。小学生のころに探検と称して無闇にほっつき歩いた成果が今になって発揮されている。

そうして追ってきている連中を撒いた頃には、私は息も絶え絶えだった。胃がひっくり返りそうな気分である。将棋サークルの連中がこぞって虚弱だったことは、不幸中の幸いといしか言いようがない。

私のあとに付いてきていた鮎川さんかというと、肩で息をしているもののさして疲れた様子はなく軽い運動をしたかのようなだった。夏が終わってもトレーニングはしよう、と私は心に固く誓った。

用心深く橋を渡って向こう岸に移り、また身を隠す。周囲を見たところ将棋サークルの部員らしき者はいなかったが油断はできない。すぐにこの場を離れるべきだろう。屋台のある川沿いを避けて裏道を使えば駅まで安全に行ける。そうして鮎川さんを電車で乗せて見送れば、とりあえず今日は事なきを得る。これは敗走ではない。不幸な目に遭い、やむを得ず戦略的撤退をするのである。今回はここまで私にしてはよくやった。

目標が決まり、いざ行かんと奮起し振り返ったところで、後ろにいた鮎川さんと目があつた。

「どこに行くの?」

「駅だよ。屋台の前を歩くと『ぬらりひよん』の奴らに見つかるかもしれないから人気のない路地から行こう。鮎川さんは電車で来たんだろう」

私が「行こうか」と言っても、鮎川さんは何やらまごまごとして動く様子がない。

「野田さんはどうするの?あの人もまだ追われているみたいだけど」

「あの人は自分でどうにかするさ。そもそもこの事態だって、あの人が蒔いた種じゃないか。俺たちが気にすることはないよ」

「あとお金を返してもらってないでしょ。私に賭けていた分、損しちゃおうわ」

「それはまあ、後でどうにかするから。今日はこれ以上ゴタゴタに巻き込まれるのも勘弁だしね」

「でも……………」

鮎川さんはどういうわけか渋る。一体どうしたのだろうかとうと混乱しかける私を、彼女は上目遣いに見てきた。鮎川さんらしからぬ、不安気な顔だった。

「でも、まだ、花火を見ていないわ」

それで私の心は決まった。さつき逃げている時、息が荒く頬も上気

していた彼女の顔はどこか楽しげだったことを思い出す。鮎川さんはこの状況も楽しんでるに違いなかった。

普段は無口な彼女にここまで言われて、その願いを無下にすることは私にはできない。それに私だって、まだ今日成すべきことをしていない。話は途中のままだ。鮎川さんのことは、まだ何も分かっていないのだ。

「……ここそ隠れながらになるけど。見つかったらまた追い回されてしまう」

「それでいいわ」

今度は鮎川さんが私の手を取った。提灯の光で照らされた彼女の顔が、僅かに微笑んだように私は錯覚した。

「じゃあ、行きましょう」

鮎川さんが言った。

○

間もなく花火が打ち上がる時間とあって、人の多さはピークに達していた。歩くにも一苦労するほどである。はぐれないように鮎川さんは私の肩を掴んでいる。

私たちはまたしても屋台のある通りに戻り、人混みのなかを移動していた。目指すのは花火見物の特等席である大橋の上だ。どこか高いところに登って遠くから眺めるといふ案も出したが、鮎川さんたちの希望でこうなった。今はもう大変混んでいるだろうが、我々二人が入るくらいはなんとかなるはずだ。

「鮎川さん、団子とかはいいの!?」

周囲の喧騒に負けじと声を張る。しばらくして「大丈夫」と鮎川さんもやや大きめの声で返事をする。しばらく間があったことに、私はあえて言及しない。あれほど大量のたこ焼きを食ったあとで団子を食うかどうか悩む腹の空きがあるというのは未だに信じられない。いかに鮎川さん肯定派の代表である私といえども呆れる所が無いと言えれば嘘になる。

人の濁流に揉まれながら進んでいくと、橋の手前まで辿り着いた。将棋サークルの妨害に遭うことも覚悟していたが、流石に人がこう多くてはそれもなかった。此方からも、それらしい人影は見つけられない。何にせよ邪魔される心配がないのは有難い。

「鮎川さん、これは少し厳しいかもしれないぞ」

「そう、ね」

橋の手前まで来ると、我々はあまりの人の多さに圧倒された。寿司詰めとはまさにこのことといった光景で、老若男女が押し合い圧し合い、動くというか蠢くくらいしか出来ない有り様となっている。私や鮎川さんはおろか、子供ですら割り込むのは至難に思われた。

「あっちにしよう。少し空いてる」

私は川下の河川敷を指さした。花火が打ち上がる所から橋を挟んで反対にあるため、他の場所より人が少ない。鮎川さんも異論はないようで、黙って私のあとを付いてきた。

堤防の側面にある坂を下りて河川敷に立つ。橋が多少邪魔なように思われるが、花火の高さから考えれば問題はないだろう。

そんなことを考えて上を見ていると、鮎川さんに裾を引かれた。「あそこが良いわ」と今度は彼女が指をさす。そこは橋のちょうど真下で、薄暗く人もほとんどいない。試しに行ってみると案外悪くなかった。空は見渡せるし、何より人がいないというのが大変良い。橋の上の喧騒も少し離れて聞けば風情があるように感じる。そんな場所に鮎川さんと二人きりでいるというのは、どうも面映ゆい気分だった。

暗がりではあるが川の様子も分かる。水嵩が増してはいるが、流れはそれほど速くないように見えた。花火を打ち上げるのに支障はないようで、遠くの川面には船が何艘も出ている。本番までの予定時刻はあと十分ほど。私と鮎川さんは隣り合い、黙ったまま花火を待った。なかなか良い雰囲気である。将棋サークルから逃げ出す前にしていた会話の続きも気になる。私はあまりチラチラと鮎川さんを見ないよう気を付けつつ、どうにかして話を切り出すきっかけを作れないものかと思案した。

「ついに追い詰めたぞ！」

唐突にそんな声が降ってきて、私は肩をびくりとさせた。隣を見ると鮎川さんも驚いた表情で上を見つめている。どうも橋から聞こえてくる騒ぎの感じが祭りのものとは違っている。私たちは顔を見合わせたあと、恐る恐る橋の下から出て様子を伺った。

人がひしめく橋の上。その欄干に、一人の男が立っているのを我々は見た。『なんと』と言うべきか、それとも大方の予想通りというべきか、欄干に立つ男は野田先輩であった。

もう少し移動して見えやすい所まで行くと、将棋サークル『ぬらりひよん』の連中が野田先輩を囲もうとしているのが見えた。その中にはサークルの部長もいて、部員や一般の方々に揉みくちやにされながら「降りてこい」と叫んでいる。野田先輩は追い詰められながらも何故か悠々と腕を組んで仁王立ちしている。

「降りたら安全を保証してくれるのか。雀荘へ自由に出入りしても構わんのかね」

「身の程をわきまえろよ。要求できる立場か」

「なら嫌だね。私はここから花火を見物する」

「いいからさっさと降りてこい。川が増水しているから危険だぞ！」
「やだ」

穏やかでない雰囲気だ。頑固な野田先輩は不安定な欄干から一向に降りようとしない。万一にも人を突き落としては事なので、将棋サークルの連中も手を出しあぐねている様子である。根気強く説得を続けていたらしい部長だったが、ついに堪忍袋の緒が切れかけてか、殊更声を大にして言った。

「こっちは人質を取っているんだ」

「なんだって？」

野田先輩が話に耳を傾ける。当の人質である私はギクリとしたが、逃げ出したことはまだバレていなかったらしい。どうりで追手を撒いて以降、私たちを探し回る奴等がいなかったわけだ。

「君の一番弟子とかいう男だ。彼は今、運営本部のテントに監禁されている。まだ紳士的に対応しているが、君が素直に従わないなら彼に

は然るべき措置をとらざるを得ない。分かっただらさつさとこつちへ来るんだ」

「ちなみに、その行為とは」

「地獄のエンドレスナイト将棋デスマッチだ」

「それはなんと恐ろしい」

「我々だって恐ろしい。将棋のルールなんてろくすっぽ知らないんだから。でも伝統的な刑罰だから仕方がない」

ところどころ聞き取りづらいが、何だか私を酷い目に合わせようとしているということは分かった。野田先輩は先ほどまでの頑然な態度を変えて何やら迷っている。もしかして私の安否を心配してくれているのか。単純な私はちよっぴり感動した。

よく目を凝らすと、一人の男が部長に近付き、何か耳打ちをしている。男は捕らえられた私たちを見張っていた部員だった。部長から「何イ!？」と悲鳴に似た声が響いた。

「どうして逃がした」

「スマホをやっています」

「バカ野郎、お前は滅俸だ!」

「そんなあ」

どうやら私たちが脱走したことが今になって伝達されたらしい。裏家業っぽいことをしている『ぬらりひよん』だが、何処か間抜けたところのある奴らだ。

などと思っていると、橋から身を乗り出して「あーっ」と部員に指をさされる。野田先輩も部長もこちらを向き、河川敷にいる私たちの存在に気付いた。

「あいつらだ。人質がいるぞ捕まえろ!」

「通してください、通してください」

「痛い!踏まないで!」

見つかった私は急いで逃げようとしたが、将棋サークルは動こうにも人混みのせいで中々思うように進めなさそうだった。それと鮎川さんが密かに私の袖を掴み引き留めていたこともあって、私はもう少しここで騒ぎを見物しようかと考えた。

野田先輩は首だけこちらに向けながら「やあ」と暢気そうに挨拶をしてきた。距離がやや遠いので、先輩も私も声を張る。

「花火を見に来たのかい」

「そうです。その人たちに捕まりましたが、何とか逃げ出して来ました」

「ははは。それなのにここに居るとは肝が座っているじゃないか。しかし見つかってしまったよ。逃げなくていいのか」

私は鮎川さんの方を横目で見た。彼女は相も変わらぬ無表情だが、ここは退かないという意志が明確に見てとれた。

「大丈夫です。後のことは花火を見てからにします」

「そうかそうか。まあ、安心したよ。君達が人質にとられたと聞いてね。依頼が果たせなくなるのかと不安だったのだ」

「依頼？なんのことです」

野田先輩の言葉に、何故か隣の鮎川さんが過敏に反応した。掴んでいた私の袖をぐいと引き、切羽詰まったような真剣な顔で何かを言いたげに「あの、私」と口をぱくぱくと動かした。

「鮎川さん？」

私が言った瞬間だった。耳をつんざく轟音が響き渡った。

花火の初弾が上がったのだ。目の端で捉えていた光に振り向けば、そこには儚く消えていく大輪の花があった。何かを言いかけていた鮎川さんも大きな花火の余韻に目を奪われている。もちろん一発だけではない。続々と次が打ち上がる。夏の夜空は一気に彩られ、人の声を掻き消すほどの音が止むことなく空気を震わせる。

しかし我々は、その光景から目を離していた。なんと野田先輩が川に落ちかけているのだ。最初の花火の音で驚き、バランスを崩してしまっただけらしい。

「野田先輩！」

私は叫んだ。野田先輩は「うわっと」と腕を振って体勢を戻そうとしているが、ついに足を欄干から踏み外してしまった。将棋サークルの部長が強引に人混みをかき分けて「野田っ」と手を伸ばしたが、寸でのところで間に合わなかった。野田先輩は背中から川に落ちて

いった。私たちの目の前で、暗い川に大きな水飛沫が上がった。

橋の上が騒然となる。将棋サークルの連中が慌てて動いている。

私は唾然としながらも、頭の片隅で思い出したことがあった。この川は一見穏やかなように見えても流れが速いのだ。それも雨で増水しているときなんかは特に危険である。今までに何回か、遊泳禁止の立て札を無視して遊んでいた人が溺死したというニュースを聞いたことがあった。

その記憶が脳裏に過つたと同時、私は駆け出していた。走りながら上着や靴を脱ぎ捨てて半裸となる。

「鮎川さん、警察と救急車に連絡を！」

そう言つて、私は夜の川へと飛び込んだ。飛び込む瞬間に聞こえたのが花火の音だったか鮎川さんの声だったか、判別はつかなかった。

○

夏といえど、川の水はかなり冷たい。だが思っていたほど川の流れは速くなかった。少なくとも、流れに真つ向から逆らおうとしなければなんとか泳げる。

しかし全く気は休まらない。いつ聞いたのだったか、野田先輩はカナヅチらしいのだ。なんとしても助けなくてはいけない。

出来るだけ自分が流されていかないよう気張りつつ、野田先輩が落ちたと思われる所から下つて必死に探していると、手に布のようなものに当たった感触があった。それを思い切り掴んで身を寄せると大当たり、野田先輩だった。水中は暗くて目が効かないが触った感じで分かる。落ちたときに水を大量に飲んでしまったのか、引つ張つてもぐったりとして力がない。

私は肩に彼の腕を回し、どうにか水面へ顔を出した。見ると思つたより随分流されてしまったようで、橋がだいぶ遠くに見える。焦燥感に駆られ、私はがむしやらになって河川敷の方へ泳いだ。人を一人担いで泳ぐというのは、私が想像していたより遙かに尋常ではない行為だった。体力の消耗が著しい。流れを横にぶつた切つて行こうとし

ているので遅々として進まず、まともに息継ぎもできない。視界が狭くなり、肩にかかる野田先輩の重量をより一層重く感じる。

しかし私は泳げていた。自分でも信じられないことだが、火事場の馬鹿力とでも言うべきか、とにかく私は少しずつ陸の方へと近付いていた。片手のひと搔きか、ばた足のひと押しが、下流に流されながらも私たちの体を浮かせて岸へと向かわせる。ここまで必死になったのはいつぶりだろう。それも誰かのために。切迫した状況にそぐわない考えが頭の片隅に浮かぶ。

ある地点から川の流れが変わった。私は対応しきれず川岸から離される。

焦った。非常に焦った。息継ぎのタイミングが乱れて水を飲んでしまった。やけくそになって必死にもがく。

それが失敗だった。左足に激痛が走り、泳ぐに泳げなくなる。足が吊ったのだと理解するのにしばらくかかった。急に無理やり動かしすぎたのだ。準備運動なんてしている暇がなかったから。

右足で水を蹴ってもまるで浮き上がれない。手も片方は先輩を担ぐために塞がっているので全くの無力だった。

抵抗虚しく、私は沈んだ。野田先輩だけでも岸へ揚げたかったがそれも叶わなかった。疲労からか、体温が下がったからか、意識が遠退いていく。夜の川の中は闇に溶け込んだのかと思うほど真つ暗だ。暗く冷たい、底のない恐怖。子供の頃に感じたそれには覚えがあった。死の感覚だった。

全くもって私は阿呆だ。考えが足りていない。運動不足の素人が、川で溺れた人間を助けようなどと。

『君はやるべき時にはやる男だから』

野田先輩に言われたことがふと浮かんだ。いつのことだったか。あれは買い被られたなあとと思う。私は単に向こう見ずなだけなのだ。だから肝心なこと何一つ成し得ない。結局、鮎川さんに対しても踏み込めないままだった。

私はすっかり諦めた。足がまだ痛いことと、川に流されていくことだけが分かる。

その感覚に、割り込むものがあつた。私の体に触れたと思うやいなや、ぐいつと強い力で引つ張るのだ。流れに逆らっている。何者か私と野田先輩を掴まえて、なんと川の急流に逆らつて泳いでいるのだ。そうでなくては説明がつかない。

混乱している内に私は放り投げられた。男一人の体重が川から飛び出して岸にうち上がる。「げほっげほっ、げえええっ」と自分では信じられない声が出た。肺が酸素を欲して過剰に働いている感じた。間も無く、私のとなりに野田先輩も揚がつてきた。彼は意識を失っているが、誰に胸を押されるでもなく肺の水を吐き出した。ひとまずは助かつたと見ていいのだろう。

それと、もう一人。野田先輩を引き揚げながら現れたその人を見て、私は驚愕するよりも安堵した。ああやっぱり、と思つた。

川を遡つた向こうの空に火花が上がっている。彼女の顔がその光に照らされ、暗がりながら克明に私の目に映つた。

「げほっ。あ、鮎川さん。やっぱり君は……………」

私と野田先輩を助けてくれた人——鮎川さんは少し照れたように顔を背けた。白いワンピースはぐつしよりと濡れている。そして彼女の下半身から先、つまり腰から足にかけての部分がまるで魚の尾ひれのようなつた。

いや、『ようだった』と言うのは適切ではない。まさにそのものであつた。

滑らかな鱗が、街灯から投げられる光に薄くきらめく。その輪郭はきれいな流線形を描き、先端にある大きな二股のヒレが川に浸っている。

蒸し暑い空気をさらうように、強い風が吹いた。首筋に張り付いていた鮎川さんの髪を吹きあげて、その下にある人には決してない呼吸器官を露にする。

「そんなに驚かないのね」

鮎川さんが言った。声色は何一つ、先ほどまで私と祭りを巡っていた時と変わらない。しかしどこか雰囲気は違っているように思えた。

私は努めて冷静であるよう心がけて答えた。

「色々、考えてはいたからね。特に今日は何度も変なことを聞いただろ」

「そうだったわね」

何を思い出したのか、鮎川さんは柔らかな表情を浮かべて私を見た。無表情だが剣呑な感じが些かもないように見えたのは、私の勘違いだろうか。

「さっき私が言ったことは本当だから」

唐突に鮎川さんはそう言った。

「え、何のこと？」

「知りたいって言ったでしょう。この二年間、とても面白かった」

今度こそ私は驚愕した。鮎川さんの正体よりも、彼女がその口から素直な気持ちを言ったことの方がよほど衝撃的だったことには我ながら驚いた。一度も笑ったところなど見たことがないが、彼女は面白かったと言う。大学の講義に出ることも、サークル活動に勤しむことも、ふらりと町に出掛けて様々な物に見て触れるこおとも。

しかしにわかには信じがたい。たったそれだけの理由で彼女が二年もの間、人間社会に紛れていたのだろうかと思わずにはいられなかった。

「納得いかない？」

私になにか言う前に鮎川さんに当てられてしまった。そんなに顔に出ていただろうか。或いは妖術の類いで心を読めていたりするか。

頷くと、鮎川さんは私の頭から爪先までをじっくり見て言った。

「人ってたった数年で変わるものね。ずっと気になってはいたけど、あの時の子があなただっという確信が持てなかったから困っていたわ」

そう言われて私の中にもようやく確信が生まれた。記述問題に正解の丸をつけられたような

気分だった。

よく見る、幼い日のトラウマが映される夢。そこで溺れた私を助けてくれる人物が鮎川さんであったことは、最早疑いようのない事実

だった。そして奇しくも十年近く経った今、私は再び同じように救われたのだ。

「あの日、あなたは山奥のキャンプの側にある川で遊んでいた。たぶん家族と来ていたのね。人間のことを学んだ今なら分かるわ。でも一人で川上の方まで行って、岩の上から足を滑らせて川に落ちてしまった。そうよね」

「……………まさか、二回も溺れているところを助けられるなんてな」

頭が上がらないとはこのことだ。むず痒いのは、恥ずかしさと感謝が混ぜこぜになっているからだろう。

「違うわ」

しかしどういうわけか、鮎川さんは私の言葉をきっぱりと否定した。

「助けられたのは私よ」

「え？」

「覚えていないのね、そこは。あなた、あの川で魚を探していたでしょう」

そう言われても、幼い頃のことなのでピンと来ない。なんとなく『言われてみればそうだったかな』と思うくらいだ。

助けたとはどういうことだろう。少なくとも私には人魚に助けられた記憶はあっても助けた覚えなどない。

川魚を探していたらしいが、私はその時捕まえようとしていたのか。いや、そうだったら二度にわたって鮎川さんが私を助けてくれた辻褄が合わなくなる。

「分からないわよね。私はあの時、ただの魚の姿をしていたから。背中に深く刺さっていた釣り針を抜いてくれたのは、あなたなのよ」

「そう、だったか。ごめん。やっぱり覚えてないけど」

「いいの。その方がなんだか素敵だわ」

鮎川さんはそう言って微笑んだ。出会ってから二年と数ヶ月。初めて見る彼女の笑顔は私が想像していたよりもずっと無邪気であり、穏やかなものだった。

「あの時の子があなただって証拠は揃っていたけど、もし違ったらって不安だった」

その確認のためにも今日の夏祭りに私と来たのだと鮎川さんは言う。恐るべき慎重さだ。

しかしそんな彼女がこうして私の前に本当の姿を現したということとは、何か確証を得たということに他ならない。そんな場面や会話が あったのか、私にはほとんど思い当たらなかった。

いつ確信したのかと聞くと、鮎川さんは「ついさつき」と答える。

「さつき？」

「川に飛び込んだ時よ。その人を助けるために躊躇いなく走ったところ見て確信したわ。ああ、この人なんだ、って」

そう言われて、私は頬に熱が上ってくるのを感じた。嬉しいやら恥ずかしいやらで謙遜の言葉も出てこない。私は赤くなっているであろう顔を背けて別の話題に逃げた。

「じゃあ、俺と同じ大学やサークルにいたのは偶然じゃない、と思ってもいいのだな」

「言わずもがなね」

もしも二年前の新生生の時分に彼女の正体を知っていたら、私のキャンパスライフは花畑のように色合い豊かなものとなっていただろう。鮎川さんと何故か視線が合うことに憂うこともなく、むしろ彼女と仲睦まじくボランティア活動に精を出していたはずである。当然サークルも辞めずいつも皆の輪の中心におり、学内では謎の多いカップルとして話題を呼んだかもしれない。

などと妄想を膨らませ、私はそこまでその有り得たかもしれない人生を欲していない自分に気付いた。いま目の前には鮎川さんがいて、二年越し、いや十年以上経ってようやく私にその隠すべき素顔を見せてくれている。自分でも説明のしようがないが、私はたったそれだけの事実胸を満たされていたのだ。

「これからどうするんだい。まだ人間社会のことを学ぶのか」

私が言外になんでも協力するという意思を込めて聞くと、鮎川さんは静かに首を振った。顔は微笑を浮かべたままだが、その端正な眉を

曲げて寂しそうな表情になっていた。

「ここでお別れよ。あなたとも、この町とも」

「何故だ。今まで通りにすればいいじゃないか。俺は誰かに鮎川さんのことを喋ったりしないし、それに妖術かなにか分からないけど、鮎川さんは人から認識されづらくなることが出来るんだろう」

「何にでも制限はあるものよ。特にこういうのはね。鶴の恩返しっていうお話があるでしょ。一年くらい前に町の図書館で読んだの」

鶴の恩返しというのは言い得て妙である。まだ食っちゃ寝をするだけで親に可愛がられていた幼い頃は数々の昔話を読み聞かせてもらっていた。鶴のみならず動物やお地蔵さんなどが人間に恩返しをする話は私にも馴染み深いものだ。あの手の物語は枚挙に暇がない。自分が知らないうちにその登場人物たちと同じ境遇にいたとは、奇妙な気持ちになる。

こうして分かりやすい例を出されれば追及のしようも無い。正体がばれてしまったからには去らねばならない。そういうものなのだろう。

私と鮎川さんは見つめ合った。名残惜しい気持ちを共有していると思っただのは気のせいではないはずだ。今までなら望むべくもないシチュエーションだが、何故か甘酸っぱい空気は些かも無い。しかしそれで良かった。鮎川さんへの思いを恋の一文字で括るのは無粋であるように思われた。

あと何を言おうか。私たちが迷っていると、気絶したままの野田先輩が「げほげほ」と盛大に咳をした。そろそろ起きてしまいそうだし、しかも川上の方の堤防からはたくさんの人が近付いてくる音がする。川に落ちた我々を探してのことだろう。

もう私と鮎川さんに残された時間は幾ばくも無いようだった。

「花火きれいだったわね。最後に見れて良かった」

「うん、月も良かった。ボランティアサークルの打ち上げで、川原で見たやつ。あまりビールは得意じゃないけどあの時の美味かった」

「商店街にはあれから何度か足を運んだのよ。喫茶店にも」

「俺もそうだ。だいぶんすれ違っていたわけだね、俺たちは」

「ええ。そうみたい」

私と野田先輩を探して人々が近くまで来ている。鮎川さんは短いため息をついて言った。

「それじゃあ、さようなら。もう川で溺れないように」

「ああ。鮎川さんも達者でな」

私がそう言うと同時に、鮎川さんは身を翻して川に飛び込んだ。競泳の選手のように洗練された動作であった。彼女はその見事な尾ひれを使って急流をもともせず泳ぎだし、川を上りながら暗い水中にとつぷりと消えた。

○

私が彼女の行ってしまった方を見つめ呆けていると、野田先輩が「ううむ」と呻いた。何度か咳き込みつつ、よろよろと上体を起こす。

「ここは……………」

「先輩、無事ですか」

「うーん。どうやら君に助けられたらしいな」

礼を言おうとする野田先輩を遮り、私は言った。

「助けてくれたのは、鮎川さんです。俺たち二人とも彼女に助けられました」

野田先輩は「そうか」とあまり驚かなかった。むしろ納得しているような風だった。

「して彼女はどこに」

「もう行っちゃいましたよ。たぶん、ずっと遠くに」

「なるほどなあ」

私が川上を眺めながら言うと、野田先輩もつられるようにしてそちらを見た。

ごうごうと川の流れる音がする。空に花火が打ち上がるたびに大気の震えが体に伝わる。土手の上に人が来たようで手分けしようという声がする。遠くの方からはサイレンも聞こえてきた。

「今だからこそ言うが、実は君を騙していたんだ」

突拍子もない野田先輩の言葉に私は振り向いた。

「何のことですか？」

「ここ最近、君は鮎川嬢と頻繁に出会っただろう。君は偶然と思ったかもしれないが、あれは私が一枚噛んでいたんだ。鮎川嬢に君の行動を逐一報告していた。今回祭りに誘ったときに彼女が二つ返事です承したのも、君の方から誘うことを我々二人で示し合わせていたからだ」

私は愕然とした。野田先輩を通じて行動が筒抜けだった？

それは一体いつ頃からなのか。何故そんなことをしていたのか。私と鮎川さんの関係に野田先輩ほどの程度まで関与していたのか。

疑問は次々に浮かんだが、思考がまとまらず言葉にはならなかった。先輩は私の意図を察してか話を続けた。

「まあ色々聞きたいことはあるだろう。断っておくが、私が好奇心でやったことではないよ。依頼があったんだ。鮎川嬢からね」

「依頼って……」

「なぜ正体不明の彼女から携帯電話の番号だけ知り得たと思う。本人から君にさりげなく伝えてほしいと言ってきたんだよ。連絡を取り合うのに必要だからとね。肝試しのときに君らを二人きりになるよう仕向けたのもそういうわけさ。喫茶マーメイドに君がいると伝えたのも私だ。全ては彼女が欲したことだ」

「じゃ、じゃあ知っていたのですか。鮎川さんの正体も」

私が言うと、野田先輩は「いいや」と首を振る。

「安心しなさい。なぜ鮎川嬢が君に固執していたのかも私は知らない。なんとなく予想はつくがね。私は単に、君との仲を取り持つ依頼を受けたに過ぎないよ。彼女は焦っていたようだった。きつと君がサークルを辞めたからだな。繋がりが切れることを恐れて、行動に移したのだろう」

逆に捉えると鮎川さんは二年もの間、私に何も言い出せなかったということか。正体がばれる危険性を考えてのことだろうけど、いくらなんでも慎重すぎる。私は自らを受け身の権化として類い稀な奥手ぶりを発揮してきたが、彼女も大概だったらしい。

思わず笑みがこぼれた。何故だかすつきりとした気分だった。きつと鮎川さんも今、こんな憑き物の落ちたような心持ちで、生まれ故郷の上流を目指しているに違いない。

ヒュルルと間延びした音が聞こえる。豪快な爆音と共に特大の花火が夜空に咲き誇り、夏祭りの最後を華々しく飾った。

○

夏のおしまい

エピローグ

あれから何度目の夏が巡ったことだろう。

修士課程にまで張り付き保っていた私のモラトリアムもとつくに終わりを迎えてしまった。社会の荒波になど揉まれたくない。人間なので陸で生きるべきだ、と主張してみたが周囲から猛烈な非難を浴びたために渋々就職をせざるを得なかった。何故一日の大半を労働に費やさねばならぬのか常日頃から疑問である。疑問に思いながらもつつがない日々をおくっているの、私は致し方なく働く。不貞腐れてもどうにもならないのは大学を卒業してから一ヶ月と経たずに思い知った。日がなクーラーの効いた部屋で寝そべるだけだった頃が懐かしく愛おしい。カムバック、怠惰で素敵な若い日々よ。

そう思いながらも三食きちんと食べてたまに遊びに出向き麻雀などに興じる毎日に、私はそこそこ満足している。社会に真っ向から唾を吐くことは、もうなくなつた。

○

野田先輩は今どこで何をしているのか、詳しいことは知らない。

あの花火大会の夜のあとに将棋サークル『ぬらりひよん』と一悶着あったが、彼はそれを乗り切り颯爽と旅に出てしまった。「世界は広い」などと言って一足飛びに国外へ行ってしまったその身軽さには改めて舌を巻いたものだ。大学はどうするのだ。

将棋サークル『ぬらりひよん』と決着をつける際には当然のことながら私も巻き込まれた。野田先輩が向こうに間者を潜り込ませたり、あちらの過激派と呼ばれるグループが強行手段に打って出たりしてなかなか大変な騒ぎであった。おかげで拉致されることにもすっかり慣れてしまった。下宿に謎のダッチワイフが贈られたり、サークルの部室に仕掛けを施してポルターガイスト現象を起こすなど壮絶な争いを繰り広げた末に、最後は野田先輩と部長との将棋によるデスマッチが行われた。決着はつかなかった。どちらも将棋のルールな

ど知らなかったのだ。

そうした何やかんやで自由の身になった——もともと自由すぎたが——野田先輩は海の外へと見聞を広めに出かけた。たまに帰国してきたときに喫茶マーメイドで落ち合うこともあるが、ここ暫くは南米あたりで熱中していることがあるらしい。

ついこの間送られてきた写真には、広大なコーヒー畑を背景に相も変わらぬ朗らかな笑みを浮かべた野田先輩が映っていた。彼は真っ黒に日焼けしていた。

○

速水と飯島さんの二人とは、あまり関係が深くないので特別語るべきことはない。彼らも私と同様に将棋サークル『ぬらりひよん』との抗争に巻き込まれた経緯を持つ。そこで共同戦線を張り、飯島さんの食べっぷりが再び火を吹いたり、速水と結託して麻雀勝負でイカサマを行い返り討ちにされたりしたこともある。静謐の欠片もない、騒々しくも退屈しない思い出だ。

しかし友人であるかと言えばそのあたりは怪しく、私が大学院に行くと共に会う機会はめっきり減った。彼らの鮎川さんについての記憶はほとんど薄れているらしく、そのため共通の話題も半減し、ますます疎遠になっていった。

ただ最近になって、私の住まいの郵便受けに二人からの葉書が届いた。それは彼らの結婚式の招待状であった。

あの二人が付き合いはじめた当初は長続きするものか、と思っていたのが気付いてみればゴールインしてしまっていた。人生とは分からないものである。

以前の私であれば嫉妬に荒れ狂って即座に招待を断っていただろう。もしかすると勢い余って招待状を千切っていたかも。いや流石にそれはないと信じよう。信じたい。

ならば今の私はどうかといえは、まあ、さつさと有給休暇の申請をしてきたと言えは分かっていたただけるだろうか。

○
夏の暑い日、私は当たり前のようにクーラーに頼る。未だに毛布を被るくらい部屋を冷やすのが好きだし、冷凍庫いっぱい詰まった棒アイスを見るだけで心が踊る。

○
しかしたまに窓を開け、生温い風を取り込むことがある。自然に吹く真夏の風はまるで涼しくないが、趣が違うものだ。私はそういう時、歳暮で大量にもらう蕎麦を啜りながら、風鈴の音に耳を傾けるのである。

○
避暑というものを覚えた私は、時たま山奥へ出かける。小川がすぐそばに流れるキャンプ場だ。虫が多いし疲れるので泊まり込んだりはしないが、私はその川原に腰掛けて足を水に浸す。森に阻まれてキャンプ場の方からは人に見られない静謐な空間だ。そこにいると、私は子供の頃を思い出す。その辺を駆け回り、川魚を探した子供の頃のことを。

釣りに来たわけでも泳ぎに来たわけでもない。クーラーボックスに入っているのは冷えた炭酸飲料だ。単に涼みにきたわけで、やることと言えば寝そべるか本を読んだりするくらいのものである。

○
では何故、釣竿を持ってきたのか。
無論、必要だからである。ともすれば最重要と言えるかもしれない。

私は竿を伸ばし、台に立てる。風にあおられても倒れないようしっかりと石で固定する。川の方へ向かってしなる竿の先には、釣糸ではなく風鈴が吊るされている。川魚の絵が描かれた小ぶりの品だ。

涼やかな風がそよいだ。風鈴の音が軽やかに鳴る。木の枝がさわさわと揺れて木漏れ日がちらつき、水面に反射して川が光った。

すると川のなかに大きな影が見えてくる。それは人間ほどの大き

さで、私の方へ近付き、ちやぷりと水音を立てて岸边へ上がってきた。「やあ、久しぶり」

私が手を上げて軽く挨拶すると、彼女は同じように「久しぶり」と言ってきた。まだ川のなかにある下半身は、気持ち良さそうに尾ひれを揺らしている。

風鈴の音色が『私が来たよ』という合図だ。彼女からの贈り物が、このひっそりとした山奥で私たちを毎年のように引き合わせる。

「どうしたの、その格好」

不意に彼女がそう言ってきた。私は大抵、彼女と会うときには白のワイシャツに黒いスラックスを着て行く。最初は気を引き締めるためにやっていたことだが、それが習慣になって今でもここを訪れるときはそういった少し固い格好をする。

しかし今の私は適当なTシャツを着ていて、ズボンなど短パンである。彼女にはあまり見せたことの無いラフな格好だった。

何度か通ったために気でも抜けていたのか。家を出てしばらくして気が付いたので今日はこのまま来てしまったのだ。

間違えたのだと率直にそのまま伝えるのも野暮ったい気がして、私は返答に悩んだ。もう私もいい歳だ。どうせなら洒落た返事をした
い。

しばらく考えて、まだこちらを興味深そうに見ている鮎川さんに笑いかけ、私はこう言った。

「クールビズというやつだ」

○

おしまい